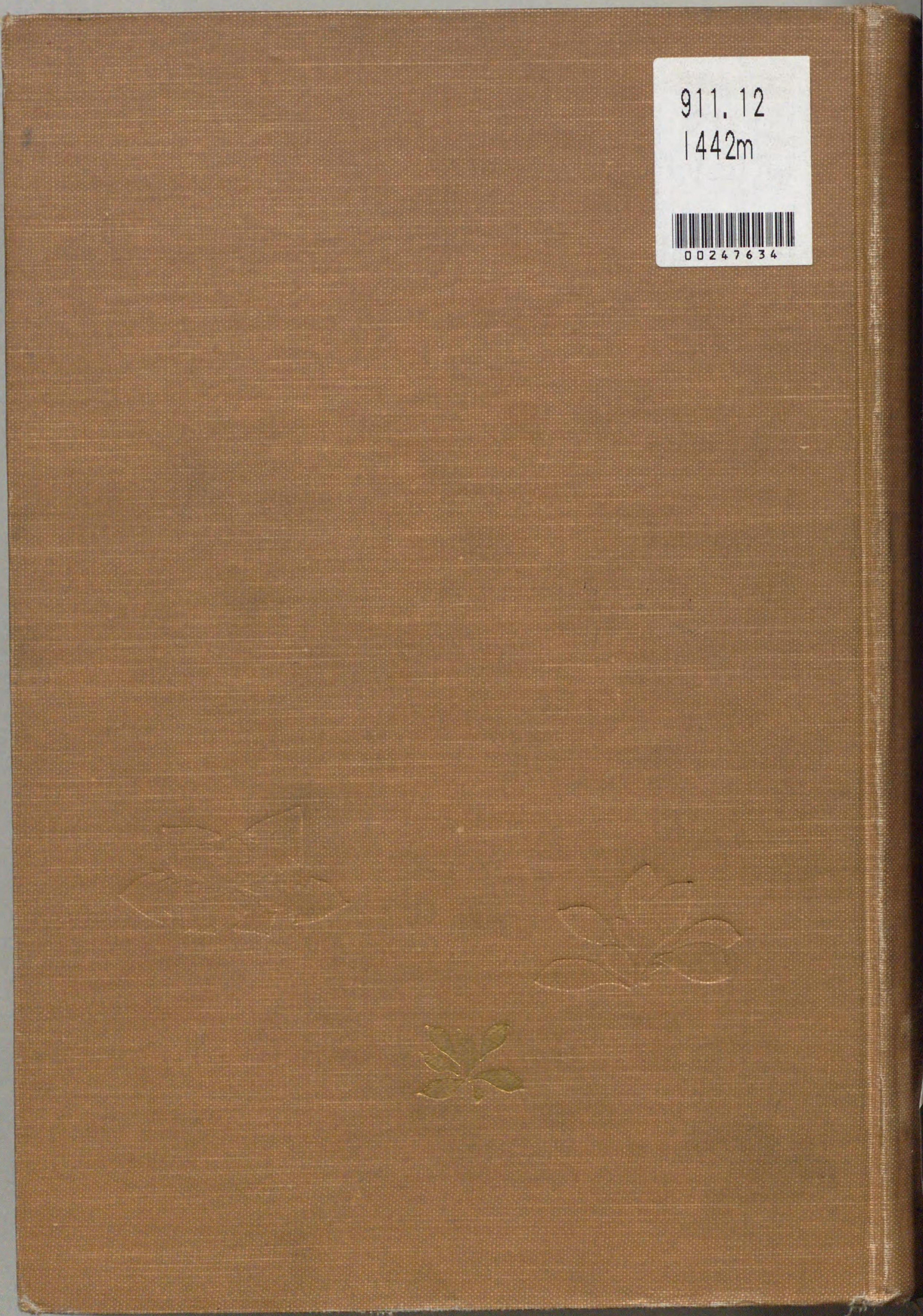




911.12
1442m





萬葉集新考

卷二

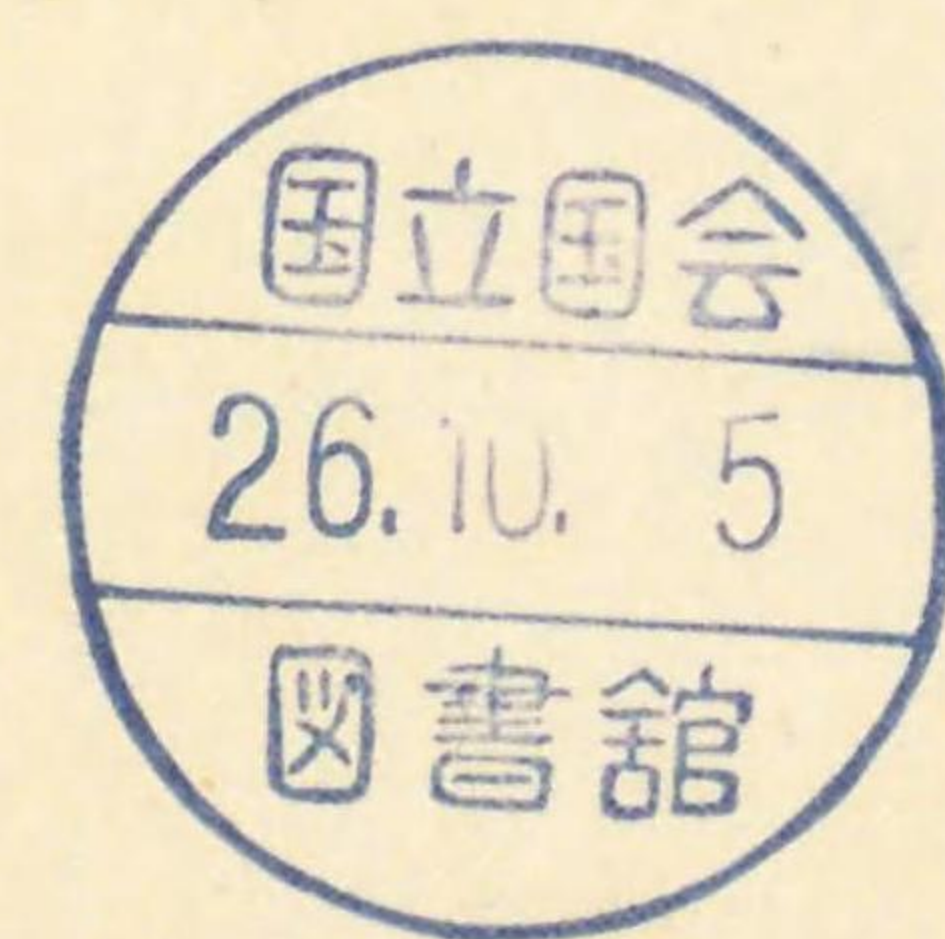
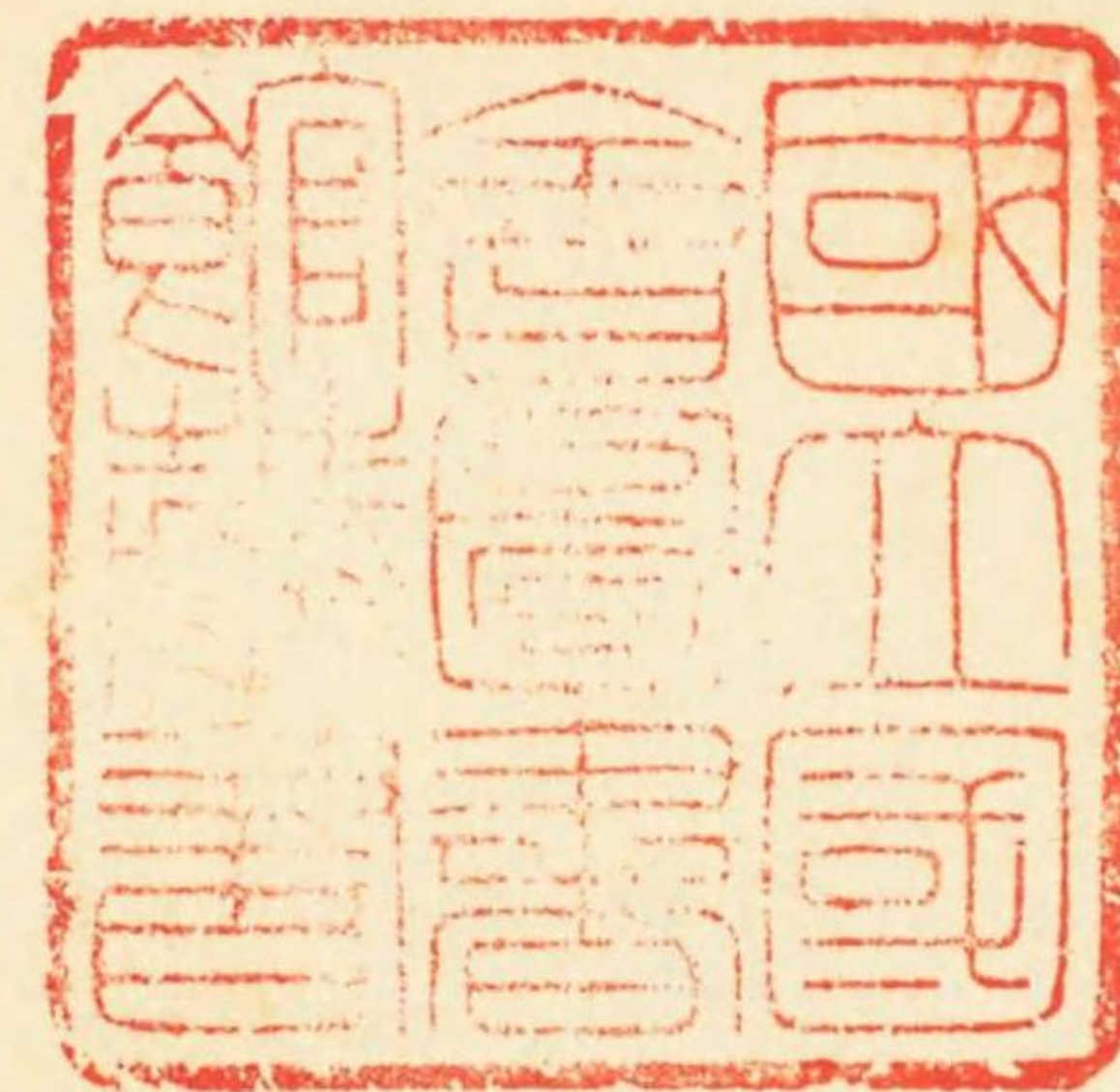


萬葉集新考

卷二



911.12 I442m



247634

圖版解説

紙本、縦一尺二寸七分、横一尺七寸八分。契沖
阿闍梨の自畫像である

契沖は元來真言宗の高僧なるが萬葉集代匠記の

著者で又近世歌學の開祖とも云ふべき人である

鷹啼できくのはなさく秋はわれど春のうみ邊

にすみとしのはま 沙門契沖

と書ける歌は伊勢物語に見えたる古歌である。

契沖は畫なかにいた事が無いといふ人があつた

であるが少いだけで、無い事は無い。此圖版の

歌と畫と同筆なるは如何なる懷疑者といふことも

首肯するであらう。然し若し自作の歌であるなら

ば尙耳を掩うて鉛を盗む輩があるかも知れぬが

其輩の口をも塞ぐべきは古歌を書ける事である。

人のかいた繪に加へた畫ならば古歌を書きはず

まじく、たゞの故あつて人の繪の傍に古歌を書

くことも沙門契沖さばかり識しはすまいでは無い

か

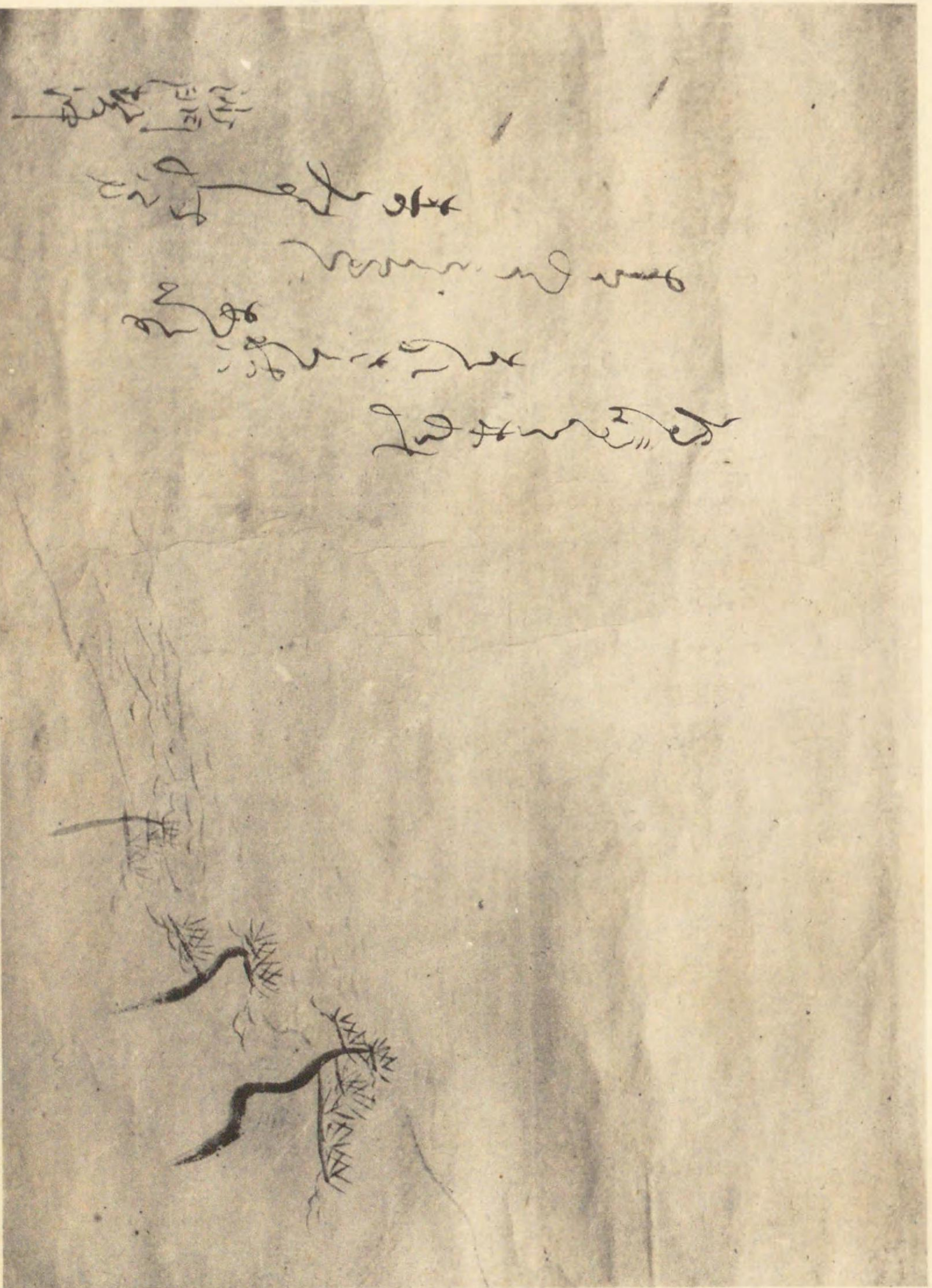
契沖の沖は多數の眞蹟に就いて檢するに沖と見

えるもある。されば或は沖を正しと或は沖な

是とする事であるが元來沖と沖とは同字である

う

から自身も或は沖と書き或は沖と書いたであら



凡例

漢字のみにて書けるが萬葉集の原文にて假字がきにせるは譯文なり
原文は寛永版本に依りたり。但誤字なる事明白なるものは指摘の煩を
避けて直に改めたる處あり。又俗字を正字に改めたる處あり
譯文中傍訓を施したるは諸家(特に略解古義)の訓の一定せざりし處と、
諸家の訓を斥けて余が新に訓ぜし處と、讀者が讀み悩み又は讀み誤る
べき恐ある處となり。その別は註解を讀まばおのづから明ならむ
歌の中に□を以て圍めるは衍字、即宜しく除くべき字
字間に△を挿みたるは脱字又は脱文ある處
字の左傍に小さき△を附したるは誤字
字の右傍に△を附したるは注意すべき字なり
又歌の中に()を以て括したるは枕辭なり

萬葉集新考第二

目次

卷四

相聞……………六一三頁

卷五

卷第五新製目錄……………八三五頁

雜歌……………八三九頁

卷第五の筆録者(附録)……………九九九頁

山上臣憶良年齢考(附録)……………一〇〇三頁

卷六

卷第六新製目錄……………一〇一頁

目次

目次

二

雑歌……………一〇二頁

流布本卷第四至卷第六目錄……………一一八九頁



萬葉集新考卷四

井上通泰著

相聞

難波天皇妹奉^{タテマツリ}上^ノ在山跡皇兄御譚一首

ひと日こそ人母待^モ告^ツながきけを如此所待^{カク}者有^バ不得^{ラズ}勝^{カモ}

一日社人母待告長氣乎如此所待者有不得勝

契沖いはく

妹とのみあるは何れの皇女と知れざるなるべし、仁徳天皇の御代に此皇女も難波にましまして異腹の皇兄等の御中に御心を通はされたるが常は難波に坐ますが假初に大和へおはしましたるを待侘て贈らせ給ふと見えたりといへり。難波天皇妹とありて奉上皇兄とあればその皇兄は難波天皇即仁徳天皇ならむ○第二句は舊訓に人モマツツゲと訓めり。契沖は此訓に従ひて告を繼の借

字とせり。又雅澄は告を志の誤字として人ヲモマチシとよめり。案ずるに告は吉の誤にてその吉の上に倍などをおとしたるにて人モマツベキにあらざるか。コソとかゝれるをベケレと結ばでベキと結ぶは古格にてオノガ妻コソトコメヅラシキの類なり(玉緒七卷七丁参照)○ナガキケのケはケナガクのケにて日數といふことなり○第四句は宣長の所を耳の誤としてカクノミマテバとよめるに従ふべし○結句を眞淵はアリガテナクモとよみ田中道麻呂は勝を鴨の誤としてアリガテナカモとよめり。卷十一に君ニコヒツツ有^{アリガ}不勝^{マモ}鴨とあるを例とし有不得鴨の誤としてアリガテナカモとよむべし。カテナはアヘヌといふ事なれば不勝とも不得とも書くべし

追考 第二句の告は諸本に吉とあり

岳本天皇御製一首并短歌

神代より あれつぎくれば 人さには 國にはみちて (あぢむらの)
 去來者^{カミ}ゆけど わがこふる 君にしあらねば 晝は 日のくるるま

で よるは 夜のおくるきはみ おもひつつ いねがてに登^ト あか
 しつらくも ながき此夜を

神代從生繼來者人多國爾波滿而味村乃去來者行跡吾戀流君爾之不有
 者晝波日乃久流留麻亘夜者夜之明流寸食念乍寐宿難爾登阿可思通良
 久茂長此夜乎

左註に云へる如く高市^{タカチ}岳本^{ツツノ}宮即舒明天皇の御製にや後岡本宮即齊明天皇の御製
 にや明ならず古義に

今御製詞に依て考るに後岡本宮齊明天皇の皇后に立せ賜ひて後か、またはいま
 だ皇后に立せ賜はぬ前か舒明天皇を思奉りて御製^ミませるにやあらむ

といへり。婦人の作とおぼゆれば此説に従ふべし○略解に題辭なる御製の下に歌
 の字を補へり

アレツギは生レ繼ギなり○去來者は宣長のカヨヒハとよめるに従ふべし○キハ
 ミはマデといふに同じ。上なるマデに對して語を換へたるのみ○寐^イ宿^ホ難^ガ爾^ニ登^トは宣

長の説にイネガテニシテキミマツトとありしが中間の六言おちたるなるべしといへり。もとのまゝにて可なり。イネガテニをイネガテニトとのたまへるはシラニをシラニトといふと同格なり。○アカシツラクモはアカシツルモなり

反歌

山のはにあぢむらさわぎゆくなれど吾はさぶしる君にしあらねば

山羽爾味村騒去奈禮騰吾者左夫思惠君二四不在者

上三句は山ノハニ味村ノサワギユク如ク人サハニサワギユクナレドといふ意とおぼゆ。さらば山ノハニアデムラの九言はサワギの序とすべけれどさる序は異様なる上にサワギユクの主格無ければ辭足らず。案ずるにいにしへの歌殊に反歌は意だに通ずればよしとして強ひて辭の足らざるを嫌はざりしにや。一卷三山歌なる反歌もタチテ見ニコシイナミ國ハラとのみいひて阿菩大神ノといふことを云はねば

二山の鬪諍を伊奈美の國が見に來りし由の傳ありて其方に據てよませ給へるにぞあるべき(犬雞隨筆下卷三十三頁)

などいふ説も出來たれどなほ主格を略せるなり。又卷六歌儺所之諸王臣子等集葛井、連廣成家宴歌の小序に

比來古儺盛興、古歲漸晚、理宜其盡古情同唱、古歌故擬古趣、輒獻古曲二節云々(△を添へたる二つの古の字は本に此とあり。今改めつ)

とありて

春さればををりにををりうぐひすのなくわが島ぞやまずかよはせ

とあるもヲヲリニヲヲリの前に花ノといふべきを略せり。而してかく主格を略せるがやがて古趣に擬したる所なるべし。○サブシエのエは助辭、サブシは不樂なり

あふみぢのこの山なるいさや川けのこ呂ごろはこひつつ裳あらむ

淡海路乃鳥籠之山有不知哉川氣乃己呂其侶波戀乍裳將有

右今案高市岳本宮、後岡本宮二代二帝各有異焉。但僞岡本天皇

未審其指

第四句のケは例のケなり。宣長は呂を乃の誤字としたれどなほもとのまゝにてあ

るべくケノコロゴロはコノ日頃といふ事なるべし○契沖は上三句をケの序として序よりつづきたるケは水の氣にて霧なりといひ略解には

これはいさや河といふ地の名をやがて女の情をいさ不知といふにとりなし給へり○千蔭は舒明天皇の御製とせるなり

といへり案するにこは千蔭のいへる如くケノコロゴロハコヒツツ裳アラムイサといふべきイサを序に譲れるにて三首下なる

眞野の浦のよどの繼橋こころゆもおもへや妹がいめにしみゆる
又卷二二〇八頁なる

神山のやまべまそゆふみじかゆふかくのみ故にながくとおもひき
などと同體なり○コヒツツ裳アラムの裳は誤字にてコヒツツカアラムなるべく四五の意は君モ此日頃我ヲ戀ヒ給フデアラウカとのたまへるなり○此御製に近江の地名を序につかひたまへるを見れば此長歌及反歌は夫の皇子又は帝の近江にいませる程によみたまひしなるべし

額田王思近江天皇作歌一首

君まつとわがこひをればわがやどのすだれうごかし秋の風ふく

君待登吾戀居者我屋戸之簾動之秋風吹

近江天皇は天智天皇なり○人まどはしに秋風が簾を動かすよとなり

鏡女王作歌一首

風をだに戀流者ともし風をだにこむとしましたば何かなげかむ

風乎太爾戀流波乏之風小谷將來登時待者何香將嘆

此女王の名こゝと卷二四處と卷八とに見えたる皆鏡女王とあり眞淵の説考別記一二によればそは皆鏡女王の誤なりといへどなほもとのまゝにて鏡王の女とよむべき由上一三七頁に云へり○此歌は眞淵のいへる如く前の歌の和歌とおぼゆ略解に

宣長云三の句の風ヲダニは上なる詞を重ねたるのみ也風ヲダニ戀ルハトモシといふ二句を重ねいふ意也といへり
といへり案するにこゝのトモシは飽かぬ意としてソノ風ヲダニ我戀フルハイト

飽カヌ事ナリと釋くべし。即一首の意は

君は人まどはしに秋風の簾を動かすを憎みたまへどその風をだに我戀ふる事の乏しさよ。天皇の來給はむ事を期して待ち給はば遅くとも何か嘆き給ふべき。

我は寵衰へて入御を仰がむ望も無し

といへるなるべし

吹黄刀自歌二首

眞野の浦のよどの繼橋こころゆもおもへや妹がいめにしみゆる

眞野之浦乃與騰乃繼橋情由毛思哉妹之伊目爾之所見

初二は序なる事明なれど三句以下にツギテなどいふ事無ければ常の例とは異なり。宣長いはく繼橋ノツギテオモヘバニヤ云々といふ意なりと。然らばツギテといふことを略せるにて前なるアフミデノトコノ山ナルイサヤ川といふ歌の類なり。○眞野は卷三に眞野ノハリ原とあると同處にて神戸市の西部にあり。ツギハシは略解に「中に島の如き所有てまた懸渡せるをいふ也」といへり。處々に柱を立て、板を繼ぎたる橋ならむ。○ココロユモのモは助辭にてココロユはココロニなり。而し

てそはオモヘヤにかゝれるなり。下にもココロユモアハ思ハザリキ、ココロユモオモハヌアヒダニなどよめり。宣長が「心から妹が夢に見ゆるといふ意なり」といひ雅澄が「情裏ヨリモといふが如し。モは表はさるものにて裏よりも眞實に思ふよしなり」と云へるは共に非なり。オモヘヤは思ヘバニヤなり。○第四句に妹とあるにつきて契沖は「吹黄刀自は女なり。然るを此歌に妹之とあるはもし君ガ、セナガなどよめるを誤て傳へたるにや」といひ宣長は女ども妹といふといひ雅澄は女ども妹といへる例を擧げたり。男どちセコといへば女どちイモといふべきは論なけれど、なほ略解にいへる如く此歌は男より吹黄刀自に贈れるにて次の歌こそ吹黄刀自の歌ならめ

河上のいつもの花のいつもいつもきませわがせこ時じけめやも

河上乃伊都藻之花乃何時時來益我背子時自異目八方

卷一にも此人の歌に河上と書けるをカハカミともカハノへともよむべき由云へり。河ノホトリといふ意なればカハノへとよまむ方穩なる如くなれど卷十四に可波加美ノネジロタカガヤと假字書にせる例あり(四一頁参照)○イツ藻のイツは河

上ノユツイハムラのユツに同じくて澤山といふ事なり。五百ツをつづめてユツともイツともいふを今はイツモイツモをさそひ出さむが爲にイツといへるなり。契沖、千蔭○イツモイツモはイツニテモといふ事(卷三参照)○トキジケメヤモのヤモは後世のヤハトキジケメヤはトキジカラムヤにて古義にいへる如く何時トテモ時ナラズトイフ事アラムヤハといふ意なり

田邊忌寸櫛子任太宰時歌四首

衣手にとりとどこほりなく兒にもまされる吾をおきていかにせむ

衣手爾取等騰己保里哭兒爾毛益有吾乎置而如何將爲

一本に舍人吉年の作とせり○契沖千蔭雅澄共に櫛子の任に下りし時に其妻又は一婦人のよみし歌とし又上三句を母ノ袖ニスガリテナク子ニモといふ意とせり。されどよく思ふに他人の作れる歌とせむには結句のオキテイカニセムといふ事かなはず(他人の作ならばオキテイカニセムトカスルといはざるべからず)辭を換へていはば結句は旅だつ人自身のいふ辭にて之を送る人のいふ辭にあらず。ただ不審なるは四句なり。即四句に吾ヲとあるを正しとせば送る人の歌ならざるべか

らず。よりて思ふに吾ヲは君ヲの誤なるべく而して或本に舍人吉年(又千年)の歌とせるは後人のさかしらにて實は櫛子の歌なるべし。はやく玉の小琴に

吾は君の誤といはれたる考の説よろし

といひ景樹も亦吾を君の誤とせり。右の如くなれば以下四首共に櫛子の作なり○トリトドコホリはトリツキテなり。マサレルはマサリテナクの略と見べし

置きてゆかば妹こひむかも(しきたへの)黒髪しきてながき此夜を

置而行者妹將戀可聞敷細乃黒髮布而長此夜乎

一本に田部忌寸櫛子と註せるは例のさかしらなり。結句は置キテユカバの下におきかへて心得べし○シキタヘノは枕辭とはしるけれど何にかゝれるにか明ならず。冠辭考に

こは末の意みな夜床のさまなれば總てに冠らせてシキタへの語を置たる物にて云々

といへるはうけられず。シキテの枕と見るべきか。クロ髪シキテは女の寝る状なり。わぎもこをあひしらしめし人をこそ戀のまさればうらめしみおもへ

吾妹兒矣相令知人乎許曾戀之益者恨三念

上三句は契沖等のいへる如く媒セシ人ヲとなり○ウラメシミは形容詞の語幹にム(ミ)を添へたるにてヲシム、カナシム、イツクシムなどの類なり。ウラメシガリと譯すべし。古義總論八〇丁、同二卷下一一九丁にあまたの例を擧げてウラメシウと譯したるはいかが

朝日影にほへる山に(てる月の)あかざる君を山ごしにおきて

朝日影爾保徹流山爾照月乃不厭君乎山越爾置手

結句の下にスギユカムガカナシなどいふ辭を省きたるなり。干蔭雅澄は上三句をアカザルの序としたれど三句を序とすれば不審なる事あり。即朝日のにははむには月は照るべからず。されば宣長のいへる如く第三句のみを枕として卷十二なるアラタマノ年ノ緒ナガクテル月ノアカザル君ヤアス別レナムと同格とすべし。○朝日カゲニホヘル山ノ山ゴシニアカザル君ヲオキテといふべきをさはいひがたきによりてまづ山ニといひ結句に至りて更に山ゴシニといへるなり。○此歌は前三首とはちがひて既に途に上りての後の作なり

柿本朝臣人麻呂歌四首

三熊野の浦のはまゆふ百重なす心はもへどただにあはぬかも

三熊野之浦乃濱木綿百重成心者雖念直不相鴨

初二は序。ハマユフは濱オモトといふもの。其葉あまた重なりたればモモヘナスの序とせるなり(略解)○モモヘナス心ハモヘドは本集卷十六アサキ心乎ワガモハナクニの例によればモモヘナスはココロにかゝりココロハはココロヲバの略なり。即そのかみココロヲオモフといふ熟語ありしなり。但集中にココロハモヘドとよめるにココロニハのニを省きたりと見べきあり。なほ其歌の處に至りていふべし。○タダニアフは直接に逢ふ事、このアハヌカモはアハヌカナといふ意なり

いにしへにありけむ人もわがごとか妹にこひつつ宿不勝家牟

古爾有兼人毛如吾歟妹爾戀乍宿不勝家牟

結句、舊訓にイネガテニケムとよみ略解古義共に之に従ひたれどシを挿みてイネガテニシケムといはでは語格と、のはず(卷二にミナ人の得難爾爲云ヤスミ兒エ

タリとあるを思へ。されば契沖の説に従ひてイネガテズケムとよむべし。ズケムは集中にナニスレゾハハトフハナノサキデ已受^コ禰^ケ牟^ム卷二十サヤマダノヲヂガ其日ニモトメ安波^ア受家^ハ牟^ム卷十七など假字書にせる例あり。今はザリケムとのみ云へどいにしへはズケムとも云ひしなり。卷三四四五頁にもエヒナキスルニナホシカズケリとあり

今のみわぎにはあらずいにしへの人ぞまさりて哭^ホ左^サ倍^ヘなきし

今耳之行事庭不有古人曾益而哭左倍鳴四

初二は今ノ世ノミノ事ニアラズとなり。哭左倍は略解にナキサへとよみたれど、なほ舊訓の如くネニサへとよむべし。聲ヲアゲテナキサヘシタとなり

ももへにも來^キ及^シ禰^カ常^トおもへかもきみが使のみれどあかざらむ

百重二物來及禰常念鴨公之使乃雖見不飽有哉

二句は舊訓にキオヨベカモとよめるを契沖はオヨブといふ古言なければとてキシケカモとよみ雅澄は

キシカヌカモトと訓べし。シカヌといふは又は希望の辭のネの轉れるなり(不の字の意にあらず)。アレカシ、アヘカシとねがふ意をアラヌカモ、アハヌカモなど云る例にてこゝの意をわきまへつべし。さて及の一字にてはシカヌと訓べからねばこゝは字の脱たるものかとも云べけれどねがふ意のヌの辭は省きて書る例集中に多し。七卷にアラミヅラ云々人相鴨^{アハヌカモ}十卷にカスミタツ云々妹相鴨^{アハヌカモ}又サツキ山云々マタ鳴鴨^{ナツカモ}またホトトギスキキモ鳴香^{ナツカモ}十一にワガセコハ云々人來鴨^{コヌカモ}又日クレナバ云々有與鴨^{アリコヌカモ}又カクシツツ云々有鴨^{アリヌカモ}又シキタヘノ云々急明鴨^{ハヤモアケヌカモ}これら皆ヌの辭にあたる字を略きて書り(○玉勝間十三卷二丁「萬葉集に不字を略きて書る例」を参照すべし)、本居氏のシケカモとよめるは(○契沖はやく然よめり)及の訓はよろしけれどアレをアレカモ、アヘをアヘカモなど云べき語格なければなほあしかりけり

といへり。案ずるにヌカモといへるにセヌカナの意なるとセヨカシの意なるとあり。甲は瀧ノミヤコハミレドアカヌカモ、君ヲシモヘバイネガテヌカモの類にて乙の例はタユルコトナクアリコセヌカモ、三笠ノ山ニ月モイデヌカモなどなり。而し

て乙の意なるヌカモに不の字を書けるは集中に一首もあること無し。然も雅澄が此ヌを希望のネの轉せるなりと云へるはなほ研究を要す。又乙の意なるはヌカとのみも云へり(ヒサカタノ雨モフラヌカ、人モナキ國モアラヌカなどの如し)。

因にいふ。不△カモと書けるにはヌカモとよむべきとジカモとよむべきとあり。ジカモとよむべきは卷三四六四頁及四六八頁なる君ニアハジカモの類なり。此例集中に六七首あり

又セヨカシの意なる中にはヌに當れる文字無きもある事雅澄の云へる如し。但雅澄の擧げたる例の中にはアハムカモ(アハジカモの反對)とよむべきものあるに似たり。なほ其歌々の處に至りていふべし。○一首の意はオヒカケオヒカケ使ノ來レカシト心ニ願ヘバニヤアラム、カクシバシバ來ル君ノ使ノナホ見レドアカヌといへるなり。○哉は武の誤ならむ

碁^ゴ檀^{ダン}越^ヱ往^ユ伊勢國時留^シ妻作歌一首

(かむ風の)伊勢の濱をぎをりふせてたびねやすらむあらき濱邊に
神風之伊勢乃濱荻折伏客宿也將爲荒濱邊爾

ハマヲギは濱におひたる荻なり。伊勢にては葦の事をハマヲギといふといふは此歌によりて後人のいひいでたる俗説なり(契沖)

柿本朝臣人麻呂歌三首

をとめらが袖ふる山のみづがきの久しき時ゆおもひきわれは
未通女等之袖振山乃水垣之久時從憶寸吾者

上三句はヒサシキの序、その中にて又ヲトメラガソデの七言はフル山の枕なり。梓ユミヒキトヨ國などの類なり

夏野ゆくをしかの角^{ツサ}のつかのまも妹が心をわすれてもへや

夏野去小牡鹿之角乃東間毛妹之心乎忘而念哉

初二は序なり。夏は鹿の角おひかはりてまだ短ければツカノマの序としたるなり(契沖)。此序なども新にいひ出でむは容易ならじ。○ワスレテモヘヤは一つの辭づかひにてただワスレテモヘヤといふに同じ。卷一にも大伴ノミツノハマナル忘貝イヘナル妹ヲワスレテモヘヤといふ歌あり

(珠衣タマギヌ)のさゝるさゝるしづみ家の妹にもいはず來キ而テおもひかねつも
珠衣乃狹藍左謂沉家妹爾物不語來而思金津裳

卷十四に

安利伎奴乃佐惠佐惠之豆美いへのいもものいはず伎爾氏おもひぐるしも
といふ歌あり。柿本朝臣人麻呂歌集中出とさへあればもとは今の歌と一つなりし
事しるし。右の卷十四なる歌によりて眞淵(冠辭考)はアリギヌノ、モノイハズキ
ニテとよみたれど珠衣をアリギヌとよむべき由なし。なほ舊訓のまゝにタマガヌ
とよむべく(玉勝間六卷丁三十)に四の卷なるはタマガヌにて裳に玉裳といふ類なり
といへり。そのタマガヌは玉を着けたる衣なり(古義に珠を蟻の誤としてアリギヌ
とよみオリギヌの義とせるは鑿說なり)。さてタマガヌノはサキサキの枕辭なり。○
第二句は冠辭考に「妻がなげきさやめくをしづめんとて」云云と釋き略解古義共に
此説に従ひたり。案するにサキサキはシホサキのサキにて騒といふこと、シヅミは
シヅマリの約なり。當時の俗語方言にはかく異常に語をつづめたる例少からず。な
ほ後にいふべし

因にいふ。シヅマリをつづめてシヅミともいへばこそ下にナミダニシヅミのシ
ヅミに定の字を借りたるなれ。定は安定の定にてシヅマリともよむべし

○來而はなほ舊訓の如くキテとよむべし。此歌と卷十四なると辭句ひとしからず。
此歌は此歌として訓を施すべく卷十四なるに拘はるべからず。○オモヒカネツモ
は思ニタヘカネツモなり。オモヒカネ妹ガリユケバのオモヒカネに同じ。○一首の
意は騒にマギレテキタガ女房トヨク話ヲセズニ來テ騒ガ靜マツテカラ思ニ堪ヘ
カネルといへるなり。こはおそらくは防人の歌にて人麻呂の作にはあらず

柿本朝臣人麻呂妻歌一首

君が家にわれ住坂の家ぢをもわれは不忘ワスレいのちしなずば
君家爾吾住坂乃家道乎毛吾者不忘命不死者

キミガイヘニワレの八言はスミ坂の枕辭なり(宣長)。いにしへ夫婦となれば男の方
より女の家にゆきて宿りしなり。之をスムといふ。此歌の趣にては女の方より男の
家にゆきてやどるやうにきこゆ。此事千蔭雅澄もはやく不審せり。案するに題辭に
柿本朝臣人麻呂妻歌とあるは誤にて妻の上に贈の字のありしがおちたるにはあ

らざるか○住坂は地名。書紀神武天皇紀、古事記水垣宮の段などに墨坂といふ地名見えたるを宣長記傳二十三卷は宇陀郡萩原驛の西にありといひ而して此歌のスキ坂は「宇陀の墨坂とは思はれず。坂は誤字ならむか」といへり(略解に引けり)○スキ坂カノイヘデは住坂を経て彼家に到る道なり(古義)○不忘を雅澄はワスラジとよめり。ワスレジにて可なり

安倍、女郎歌二首

今さらに何をかおもはむうちなびきこころは君によりにしものを
今更何乎可將念打靡情者君爾縁爾之物乎

ウチナビキは寄ルの形容なり。何ヲカオモハムは考ヘル事ハ無イとなり

わが背子は物なおもひそ事しあらば火にも水にもわれなけなくに
吾背子波物莫念事之有者火爾毛水爾毛吾莫七國

第四句はいたく辭を略したり。タトヒ火ニ入り水ニ入ル事アリトモの意なり○ナケナクニはナカラナクニにて畢竟吾アルニといふことなり。卷一にもワガオホキ

ミ物ナオモホシスメ神ノツギテタマヘル吾ナケナクニといふ歌あり

駿河嫁女歌一首

(しきたへの)枕ゆくぐる涙にぞうきねをしける戀のしげきに
敷細乃枕従久久流涙二曾浮宿乎思家類戀乃繁爾

水に浮びて寝るをウキネといへば枕をくぐりおつる涙に浮寐をしつといひて涙の多き事を形容したるなり。上四句の形容の誇大なる、頗古今集時代の歌に近し

三方、沙彌歌一首

(ころもでの)別今夜從妹も吾もいたくこひむなあふよしをなみ
衣手乃別今夜從妹毛吾母甚戀名相因乎奈美

第二句を契沖宣長共にワカルコヨヒユとよめり。之によればワカルはいにしへ四段活なりしなり。但卷十八なる長歌にコロモデノワカ禮之トキヨとあればはやく今の如く二段にもはたらきしなり○コヒムナのナは嘆辭にて集中に多くつかひたり

丹比真人笠麻呂下筑紫國時作歌一首并短歌

臣女の くしげに乗有 鏡なす みつの濱邊に さにづらふ 紐と
きさけず 吾妹兒に こひつつをれば あけぐれの あさ霧がくり
なくたづの ねのみしなかゆ わがこふる 千重の ひとへも な
ぐさ漏 ころも有哉跡 家のあたり わがたち見れば

臣女乃匣爾乘有鏡成見津乃濱邊爾狹丹頰相紐解不離吾妹兒爾戀乍居
者明晚乃旦霧隱鳴多頭乃哭耳之所哭吾戀流千重乃一隔母名草漏情毛
有哉跡家當吾立見者

臣女は略解に「此二字は姫の字の誤れるにてタヲヤメとよまんか」といひ木村博士
〔美夫君志卷一下六六頁及訓義辨證上卷二六頁〕は「官女の意をもてタヲヤメとよむ
べきなり」といへり恐らくは姫の字を戲に二つに割きて書けるなるべし○乗有を
宣長のノレルとよめるを雅澄は「鏡は匣の内にこそ納べきを乗とはいかでいはむ」
といひて齋の一字の誤としてイツクとよみ改めたり用なき時は匣の内に納むべ

く用ある時は匣の上に載せもすべければもとのまゝにてノレルとよむべし。實は
舊訓の如くノスルとよまゝほしけれど有の字を添へ書きたればノスルとはよま
れず。さて初三句はミツノハマビのミにかゝれる序なり○サニヅラフは赤く匂ふ
事○紐トキサケズは上着をぬがでまる寐をする事なり。卷九にヒモトカズマロネ
ヲスレバワガキタルコロモハ馴レヌといひ卷二十にクサマクラタビユクセナガ
マルネセバイハナルワレハヒモトカズネムといへり。以て證とすべし○アケグレ
ノ云々の三句はネノミシナカユのネにかゝる序なり。但略解に「其朝のけしきをや
がて序に設て云々」といへるは非なり。アケグレは略解に云へる如く夜の明方まだ
ほのぐらき程をいふ。代匠記には「明んとする折に却てしばらくくらはるを云」とい
ひ古義にも「夜の明はてむとしてかへりてくらくなる時をいふ」といへり。さる事果
してありやおぼつかなし○名草漏は舊訓にナグサムルとよめるを契沖は
ナグサモルとも讀べし。三室の山を三諸とも云に同じ
といひ雅澄は

ナグサムルとよむべし。漏はムルに借て書るなり。集中に高松、小豆無、足常、間結な

ど書ると同類なり

といへり。字のまゝにナグサモルとよみてナグサムルにひとしと心得べし。ナグサムルをナグサモルといふは轉訛なり。轉訛を地方に限り後世に限る事と思はむは迂遠なり。神名の往往書によりて少しづつ相異なるを思へ。○有哉跡を舊訓にアリヤトとよめるを宣長はアレヤトに改め略解古義共に之に従ひたれど、なほアリヤトとよむべし。二九五頁参照。以上四句は卷二なる人麿妻死之後泣血哀慟作歌の中なるをさながら取れるなり。○イヘノアタリは故郷ノ見當ヲなり

(あを^ア碕^サの) かづらき山に たなびける 白雲隱 (あまざかる) ひなの國邊に 直向^{タカムカフ} 淡路をすぎ 粟島を そがひにみつつ 朝なぎにかこのこゑよび ゆふなぎに 梶のとしつつ 浪の上を いゆきさぐくみ いはのまを いゆきもとほり いなびつま 浦みをすぎて (鳥じもの) なづさひゆけば

青碕乃葛木山爾多奈引流白雲隱天佐我留夷乃國邊爾直向淡路乎過粟

鳥乎背爾見管朝名寸二水手之音喚暮名寸二梶之聲爲乍浪上乎五十行
左具久美磐間乎射往廻稻日都麻浦箕乎過而鳥自物魚津佐比去者

青碕は舊訓にアヲハタとよみたり。文字辨證上卷三二頁に碕は旗の俗體なるべしといへり。冠辭考には楊の誤としてアヲヤギノとよめり。○白雲隱の一句に誤字あるか又は此句の下に脱句あるべし。さらでは上なるワガタチミレバのをさまる處なし。○直向を舊訓にタダムカフとよめるを宣長のタダムカヒに改めたるはヒナノ國ベニを受けたりと見たるなり。されどヒナノ國ベニは遙に下なるナヅサヒユケバにつづきたるなればタダムカヒと相受くべきにあらず。雅澄はタダムカフとよみて淡路につけりと見たるはよろしけれどヒナノクニベを「四國邊をさしていへり」といひて四國ニタダニムカヘル淡路といふ意に釋きたるは非なり。播磨と淡路との間なる明石海峡を過ぐとて遙に天末に見ゆる四國を拉し來りて四國ニタダムカフ淡路などいふべけむや。こは卷十五なる屬物發思歌に

朝されば妹が手にまく鏡なすみつの濱びに、大船に眞梶しじぬきから國に渡り
ゆかむと、ただむかふ敏馬をさして、しほまちてみをびきゆけば云々

とあるタダムカフに同じくして行手の地が作者にただむかふなり。之に反して卷六なる

みけむかふ淡路の島に、ただむかふみぬめの浦の云々

とあるは甲の地に乙の地がただむかふなり。よくせずばまぎれぬべし。今は正面ニミユルといふにひとし。○粟島は淡路國津名郡岩屋浦にあり。粟島ヲソガヒニ見ツツは粟島ヲスギといはむに同じ。○朝ナギニ云々の四句は例の辭のあやに二つに分てるのみ。○イユキサグクミ、イユキモトホリのイは添辭。サグクミは卷二なる岩根サクミテナツミコシ(三〇三頁)卷六なるイホへ山イユキサクミなどのサクミと同じ。ユキモトホル(回避の意)の對に用ひたればゆきとほる事(突破の意)とおぼゆ。卷十一にイハホストラユキトホルベキマストラヲモともよめり。○イナ日ツマは卷六にイナ美ツマとあり。又卷十五に印南イナツマと書けり。契沖はただ印南をさしていふといひ千蔭は播磨印南郡につける海中の島なるべしといひ雅澄は印南郡の海邊なりといへり。こゝに播磨風土記賀古印南二郡の條に南毗都麻といふ島の名見えて印南郡の條に郡南、海中有小島名曰南毗都麻と見えたり。又景行天皇賀古松原より

此島に渡り給ひし趣同書に見えたれば賀古印南の郡境の延長線に近しとおぼゆ。然も今これに相當する島なし。大日本地名辭書には此ナビツマとイナビツマ(又イナミツマ)とを一つとして今の高砂に當てたり。高砂は加古印南二郡の界を流る、加古川の河口のデルタにて今は島のやうには見えぬどいにしへは島ともいふべかりけむ(三六二頁カコノシマ参照)ナビツマのナビはイナビに同じくツマは端の意にて元來イナビツマ島といひけむを略してナビツマといひしにこそ因にいふ。風土記の一本に即遁度於南毗都島とあるは都の下に麻の字をおとせるなり

○ウラミは浦つづきなり。○ナツサヒユケバは艱ミ往ケバとなり

家の島 ありそのうへに うちなびき しじにおひたる 莫告我
なにかも妹に のらずきにけむ

家乃島荒磯之宇倍爾打靡四時二生有莫告我奈騰可聞妹爾不告來二計
謀

家ノシマの前に脱句あるべし。さらではナツサヒユケバといふ句のをさまる處なければなり。案ずるにもと

鳥じものなづさひゆけば、家の島くもゐに見えぬ、その島のありその上に

などありしが二句おちたるにや。彼卷十五なる屬物發思歌(即今の歌と辭句頗相似たる歌)に

朝なぎに船出をせむと、船人もかこもこゑよびに、ほとりのなづさひゆけば、いへ
じまはくもゐにみえぬ

とあり。今は此歌によりてクモキニミエソノ島の二句を補はむとはするなり。もしもとの如くばイヘノシマはイヘジマノとあるべし。然もことさらに地名の中間にノを挿みて調を成したるを見ても原作は今の如くならざりけむことを知るべし。○家ノシマは屬物發思歌にはイヘジマとあり。今エジマといふ。播磨灘なる島島の中にては最大なる島なり。○シジニはシゲクなり。莫告我を略解には宣長の説によりて我を毛の誤としてナノリソモとよみ古義には能の誤としてナノリソノとよめり。一句を隔て、ノラズにかゝれる枕なればナノリソノとよむべし。○ノラ

ズキニケムは故ありて別を告げずして來りしなり。反歌と照らし合せて心得べし。古義に「たちのいそぎして家の妹に語るべきことをも語らず來にしを今悔しみて嗚呼何トテカ告ズ來ニケムコトヨといふなり」といへるは非なり。

反歌

しろたへの袖ときかへてかへりこむ月日をよみてゆきてこましを

白妙乃袖解更而還來武月日乎數而往而來猿尾

ソデトキカヘテは宣長「男女別れて旅に行く時に袖を解放ちて互に更へてかたみとする事のありしなるべし」といへり。袖をときかへもせず還り來らむ月日を數へもせて別れ來りしを悔めるなり。○ソデトキカヘテのテは除きて心得べし。袖を解き更ふる事と月日をよむ事とは別事なればなり。卷三(二七四頁)悲傷死妻歌なるニキビニシ家ユモイデテ緑兒ノナクヲモオキテ朝霧ノオホニナリツツ云々の上なるテと同類なり。

幸伊勢國時當麻呂大夫妻作歌一首

わがせこはいづくゆくらむ(おきつもの)なばりの山をけふかこゆらむ
吾背子者何處將行已津物隱之山乎今日歟超良武

既に卷一に出でたり(七二頁)ナバリノ山は伊賀國名張郡の山なり(宣長)

草孃歌一首

秋の田の穂田のかりばかかよりあはばそこもか人のわをことなさむ
秋田之穂田乃刈婆加香縁相者彼所毛加人之吾乎事將成

草孃は略解に「草の下香を落せしか。しからばクサカノイラツメと訓べし」といひ雅
澄は輟耕錄に娼婦の事を草娘といへりといひてウカレメとよめり。草野の娘子即
村嬢といふことにあらざるか○カリバカはこゝの外に卷十に

秋の田のわが刈婆可のすぎぬればかりがねきこゆ冬かたまけて
又卷十六に

あめなるやささらの小野にちがやかりかや刈婆可に鶉乎たつも
とあり。宣長は門人道麻呂の説によりて「稻を刈る時田を若干の區に分ちてそを一

ハカニハカと今もいふ、そのハカにて一はかづつ數人にて寄合ひて刈る故にカヨ
リアフの序とせり」といひ千蔭雅澄はカリシホ、カリ時の意とせり。又久老は「カリバ
は鎌をいひカは處をいふ言にて鎌入る所をカリバカといへるなるべし」と云へり
(信濃漫錄二卷二七丁)案するにカリバカは一定の廣さを一人の刈分と定めたるを
いふ。卷十六の刈婆可は誤字なるべし。さて今はカリバカの下にニを補ひて見べし
○初二は序とおぼゆ○穂田は穂の出でたる田、カヨリアフのカは添辭、ソコモカは
ソレニツケテモ、コトナスはイヒタテハヤスなり○一首の意は男ハソノ刈分ヲ刈
リ進ミ我ハワガ刈分ヲ刈リ進ミテ偶然寄り合ハムニソレヲモ心アル如ク人ノイ
ヒハヤサムカといへるならむ

志貴皇子御歌一首

大原のこの市柴のいつしかとわがもふ妹にこよひあへるかも
大原之此市柴乃何時鹿跡吾念妹爾今夜相有香裳

初二は序なり。市柴は舊訓にイツシバとよみ雅澄も之に従へり。げに卷八、卷十一に
五柴とあり。又イツシカトをさそひおこすにもイツシバといはむ方まされる如し。

されど字のまゝにイチシバとよみても亦イツシカトの序とせられざるにあらず。オキツ島山オクマヘテなどの例あればなり。案ずるに當時イツシバをなまりてイチシバともいひしかば其唱のまゝに市柴と書けるなるべし。さてイツシバのイツは上なる河上ノイツ藻ノ花のイツに同じくて物の數の多きをいふ。柴は雅澄のいへる如く芝の借字なり。○イツシカトはイツシカ逢ハムトなり

阿倍女郎歌一首

わがせこがけせるころもの針目おちず入爾家良之△わがこころさへ
吾背子之蓋世流衣之針目不落入爾家良之我情副

古義に「吾背子は中臣東人をさすなるべし。次にも東人とこの女郎と贈答たる歌あればなり」といへり。○ケセルは着給ヘルなり。キルを敬語にケスといふなり。そはなほミルを敬語にメスといふが如し。古義○ハリメオチズは針目毎ニなり。契沖○家良之の下に奈の字の落ちたるなるべし。同上。ナは嘆辭なり。上六三三頁にもイタクコヒムナアフヨシヲナミとあり。○ワガココロサへのサへは絲に對して云へるなり。かく云へるを見れば其衣は阿倍女郎の縫ひたるなり。○一首の意は君ノ爲ニワ

ガ縫ヒテ君ノ今著給ヘル衣ノ一針毎ニ絲ト共ニ我心サヘ入リニケラシウベ我心ノ君ガ身ヲ離レヌといへるなり

中臣朝臣東人贈阿倍女郎歌一首

獨ねてたえにし紐をゆゆしみとせむすべしらにねのみしぞなく

獨宿而絶西紐緒忌見跡世武爲便不知哭耳之曾泣

旅さきより女に贈れるなり。○ユキシミトはカシコミト、サガシミト、シルシヲナミトなどと同格にてそのトは省きて見べきトなり。本書三五〇頁、四七七頁、五八二頁参照。古義にユキシカラムトテの意なりといひモシヤ他人ナドヲシテ著シメバユキシカラム云々と釋せるは非なり。紐の絶えにしがゆゝしきなり。ユキシミは俗にいふ縁起ガワルイカラなり。さてユキシミト、ネノミシヅナクなどこちたく云へるを思へばただ紐の絶えしに困じたるにあらじ。おそらくは當時獨寝て衣の紐の絶ゆれば夫婦の契に不祥なる事ありなどいふ俗信ありしにこそ

阿部女郎答歌一首

わがもたるみつあひによれる絲もちてつけてましもの今ぞくやしき
吾以在三相二搓流絲用而附手益物今曾悔寸

ミツアヒニヨレルイトとは三すぢより合せたる丈夫なる絲をいふ。出雲風土記に
三身之綱とあり孝徳天皇紀大化元年に三絞之綱とあるもミツアヒの事ならむ。君
ガ旅ニ出立ツ時丈夫ナル絲ニテ紐ヲ縫附ケオカマシモノヲとなり

大納言兼大將軍大伴卿歌一首

神樹カミキにも手はふるとふをうつたへに人妻といへばふれぬものかも
神樹爾毛手者觸云乎打細丹人妻跡云者不觸物可聞

作者は大伴安麻呂にて旅人坂上郎女などの父なり○神樹を舊訓にサカキとよめ
るを宣長はカムキと改訓せり。即神木なり○ウツタへニはヒトへニなり(契沖)○一
首の意はサシモカシコキ神木ニモ手ヲ觸ルル事アルヲ人妻ト云へバ絶對ニ觸レ
ラレヌモノカ、ナアと云へるにて人妻に思をかけたるなり

石川郎女歌一首

春日野の山邊の道をよそりなくかよひし君がみえぬころかも

春日野之山邊道乎與曾理無通之君我不所見許呂香裳

作者は大伴安麿の妻なり(本書五六三頁参照)ヨソリは卷十三なる問答歌に

汝をぞも吾によすちふ、吾をぞも汝によすちふ、荒山も人しよすればよそるとぞ
いふ

とあれば寄る事なるは確なれどこゝはいかに釋すべきか。契沖は

ともなひてより所とする人もなきなり

といひ千蔭は

よるべきたよりもなき意なり

といひ雅澄は

隨身もなく唯獨通ふ意なるべし

といひ景樹は

ひたよりにかよひ來るを云外によりなく一すぢに通ひし也

といへり。タヨリ、手ヅルの意にて古今集戀三なるヨルベナミ身ヲコソ遠クヘダテ

ツレのヨルべと同意なるか

大伴女郎歌一首

雨障アマザハつね爲スルきみはひさかたの昨夜の雨にこりにけむかも

雨障常爲公者久堅乃昨夜雨爾將懲鴨

元曆校本の註に今城王之母也今城王後賜大原真人氏也とあり。略解、古義に大伴旅人の妻なる大伴郎女と同人とせり。いかか○雨障は舊訓にアマザハリとよめるを宣長は大平のアマヅツミとよめるを採れり。案ずるにアマザハリとアマヅツミとは略同意なれど今はなほアマザハリとよむべく下なるフルトモ雨ニ將關哉もまた舊訓の如くサハラメヤとよむべし○爲は舊訓にスルとよめるを古義にはセスとよめり。もとのまゝにて可なり○昨夜は略解にキノフとよみ古義にキツとよめり。六言によみては口調よろしからず。寧キノヨノアメニと八言によむべきか。卷二に君ゾキノ夜イメニミエツル(二〇一頁)とあり○古義にいへる如くコヨヒハ來マサヌナラムといふ意を含めり

後人追同歌

ひさかたの雨もふらぬか雨乍見君にたぐひて此日くらさむ

久堅乃雨毛落糠雨乍見於君副而此日令晚

題辭の同を諸註に和の誤とせり。但前の歌のかへしに擬したるにあらず。前の歌を見て寄雨相聞の意をよめるなり○フラヌカはフレカシ(六二八頁参照)アマヅツミはアマゴモリなり。その下にシテを補ひて心得べし。アサビラキコギニシ船ノ跡ナキゴトシのアサビラキと同格なり。タダフはナラフなり

藤原宇合大夫遷任上京時常陸娘子贈歌一首

庭立麻乎ニハミタツ乎ヲかりほししきしぬぶあづまをみなを忘れたまふな

庭立麻乎刈干布慕東女乎忘賜名

宇合常陸國守たりしなり。初二はシキの序なり。庭ニタツ麻ヲカリホシクとか、れり。シキシヌブは頼に思ふなり。初二は賤女のしわざを以て序としたり。されど此女が實際しかするなりとは思ふべからず。國の守に思はれ又歌をよむばかりの女なればまことの賤女にはあらず。自謙して無下の賤女のやうにいひなせるなり○

庭立はニハニタツとよむべし。卷十四にニハニタ都アサテコブスマとあり。ニハニ
タツは庭ニ生フルにてそのニハは垣内なり

京職、大夫藤原、大夫賜、大伴良女歌三首

をとめらがたまくしげなる玉櫛の神氣武毛妹にあはず有者
媿媿等之珠篋有玉櫛乃神家武毛妹爾阿波受有者

上の大夫はカミとよみて官職なり。下の大夫はマヘツギミとよみて爵位なり。名を
麻呂といふ。賜は諸本に贈とあり。古義に郎女の上に坂上の二字を補ひたれどもと
のまゝにてあるべし。○第四句を契沖はカミサビケムモとよみて「逢見又事ノ久シ
キヲ思ヘバアタラシキ櫛モフリヌラムとなり」といへり。案ずるに初句にヲトメラ
ガといひ尾句にイモといへる。重複していふべきにあらねば上三句は序と見ざる
べからず。さて之を序と見るにタマグシノカミサビケムモとよみては序とならね
ば第四句はなほよみやうあるべしと思ひしに今村樂神の字をタマシヒとよみし
由古義にいへり。いみじき發明なり。之に従ふべし。即タマグシノタマシヒと音を重
ねたる序なり。さてケムモは古義にいへる如くキエムモにてモは嘆辭なり。○有者

はアラバとよむべし。從來アレバとよめり

よくわたる人は年にもありとちふを何時間曾毛吾戀爾來

好渡人者年母有云乎何時間曾毛吾戀爾來

卷十三に年ワタルマデニモ人ハアリトフアイツノ間曾母ワガコヒニ來といふ歌
あり。○初二は契沖「戀ニ能ク堪忍シテ有渡ル人ハ一年アハデモサテコソアルヲと
云なり」といへり。年ニモは一年中モなり。○四五代匠記にはイツノホドゾモワガコ
ヒニケリとよみ略解にはイツノマニゾモワガコヒニケルとよめり。古義にはイツ
ノホドゾモアガコヒニケルとよめれどイツノホドゾモとよまば第四句にて切り
て心得べくさてはコヒニケルと結ぶべき由なし。契沖の訓によりて四五の間にワ
ガ妹に逢ハザルハタダシバシノ間ナルヲハヤといふことを補ひてきくべし

烝ぶすま奈胡也がしたに雖臥妹としねねば肌しさむしも

烝被奈胡也我下丹雖臥與妹不宿者肌之寒霜

烝は蒸の誤字なり。古事記須勢理比賣命の御歌にムシブスマ爾古夜ガシタニとあ

りて熟語となれるをさながら用ひたるなり。久老は「奈胡也の奈は爾を書ひがめたるものなり」といへり(信濃漫録三十四丁)爾の略字尔と奈とは相似たればさもあるべし。記傳卷十一に

ムシブスマは暖なる由の稱なり。ニコヤガシタニは柔之下ニなり。ニコヤカのカを省けるなり

といへり。ニコヤガシタといへる異様なれど神代の古語なれば今の語法にては律し難し。畢竟アタタケキ衾ノ軟ナルガ裏ニといふことと心得べし。○三句は舊訓にフセドモとよめるを略解にフシタレドと改めたり。もとのまゝにてあるべし

大伴郎女和歌四首

さほ河のコイ小石ふみわたり(ぬばたまのクマ黒馬之來夜者年コハもあらぬか
狭穂河乃小石踐渡夜干玉之黒馬之來夜者年爾母有糠

此歌は麻呂のヨクワタル人ハ年ニモアリチフヲといひしに答へたるなり。○小石を契沖は

サザレ浪サザラ萩などいへるもちひさきをササヤカと云より出たる詞なれば

サザレとのみ讀ては用ありて體なければ東歌にチクマノ河ノ左射禮思モとよめるを證として今もサザレシと讀べきにや。但、雪をハダレとのみよめる例證明なればさて有べきにや

といひ清水濱臣(答問雜稿)は

必コイシとよむべし。サザレにては更に其意を得ず。いかにとなればササササラ、ササレ皆細小の義にて何事にもちひさき事にそへていふ詞也。サザレとのみいひて小石の事にはなりがたし

といひ其子光房(同書書入)は

舊訓のまゝサザレとよむべき歟。サザレイシと云べきを略きてサザレとのみ云は小竹をササともシヌとも云に同じ。ササも只小の義シヌも垂義にて小竹にのみかぎりたる詞ならねど小竹の名におほせて云。此類猶あるべし

といひ井上文雄(伊勢の家苞卷二十一)は

サザレ石を省きてサザレとのみいへるは言語の常にて、しかいぶかしむべきことならず。本集にハダレ雪をハダレとのみいひ大黒の鷹を我オホドロ、舟やかた

ある舟を黄ヅメノヤカタとのみよめり。源氏物語にあづま琴をアヅマとのみいへるも同じ定なり

といへり。古くはサザレイシ又サザレシ又サザライシといひてサザレとのみ云へる例なければコイシとよむべし。但後に小石をサザレとのみいふやうになりしは言語の變轉にて誤とはいふべからず。○第四句は舊訓にコマノクルヨハとよめり。宣長いはく

コマを黒馬と書るはただ字音をとれる假字のみ也。ウメを烏梅と書る類也。黒の字に意なし。道麻呂が云。ヌバ玉ノは來夜の夜にかゝれる枕詞也

と。されど卷十三にヌバタマノ黒馬ニノリテとあり又こゝは夜の枕などおくべき處にあらねば契沖雅澄の説に従ひてクロマとよむべし。又來夜は雅澄がクヨとよめるに従ふべし。クル夜をクヨといへるは古格に依れるなり。くはしくは後に云ふべし。○年ニモアラヌカは一年中ニ一度ナリトモアレカシとなり(略解)贈歌にては屢逢ヘドモ久シク逢ハヌヤウニ思フといひ答歌にては年に一度も來ぬやうにいへるなり。宣長は「年の字は常の誤なるべし」といへり。こは卷十三に

川の瀬の石ふみわたりぬばたまの黒馬之來夜は常にあらぬかも

とあるによりて云へるなれど誤字とせでも心得らるなり

千鳥なく佐保の河瀬のさざれ浪やむ時もなしわがこふらく爾

千鳥鳴佐保乃河瀬之小浪止時毛無吾戀爾

上三句は序。コフラクハはコフルコトハとなり。爾の字は元曆校本にも類聚古集にも者とあり

こむといふもこぬ時あるをこじといふをこむとはまたじこじといふものを

將來云毛不來時有乎不來云乎將來常者不待不來云物乎

初句を略解にコムトイフ人ダニと釋けるはわろし。コムトイフ時ダニと釋くべし。

結句は

たまかづら實ならぬ木にはちはやぶる神ぞつくとふならぬ木ごとに
よき人のよしとよくみてよしといひし吉野よくみよよき人よくみつ

などと同じくて當時行はれし一つの體にはあれどなつかしからず。蛇足と謂ふべし

千鳥なく佐保の河門の瀬をひろみうち橋わたすなが來とおもへば
千鳥鳴佐保乃河門乃瀬乎廣彌打橋渡須奈我來跡念者

右郎女者佐保大納言卿之女也。初嫁一品穗積皇子被寵無儔。而皇子薨之後時藤原麻呂大夫娉之郎女焉。郎女家於坂上里。仍族氏號曰坂上郎女也。

カハトは河のわたり場なり。舊説の如く河峽とせばカハトノ瀬ヲヒロミとはいふべからず。○チドリナクは准枕辭なり。○ウチハシを宣長は

打渡す橋と心得るはいかが。打渡さぬ橋やはあるべき。故思ふに打は借字にてウツシの約りたる也。爰へもかしこへも遷しもてゆきて時に臨みて假そめに渡す橋也

といへり(玉の小琴二)○左註の時の字の上に脱字あるべし(下なる大伴田村家之大

嬢贈妹坂上大嬢歌四首の處に至りて云はむ。郎女の二字はあまれるにや。族氏號曰を古義にウヂヲ、トイフナリとよめり。族氏は氏族の顛倒にや。さらば氏族號シテ、トイフとよむべし

又大伴坂上郎女歌一首

佐保河のきしのつかさの小歴木莫刈鳥ありつつもはるしきたらばたちかくるがね

佐保河乃涯之官能小歴木莫刈鳥在乍毛張之來者立隱金

歌は二種の句より成る。甲は五七言の句、乙は七言の句なり。甲二乙一なるを短歌といひ甲三以上乙一なるを長歌といひ甲一乙一甲一乙一と次第せるを旋頭歌といふ。今の歌は旋頭歌なり。○ツカサは高き處なり。契沖官をツカサといふに同じといへり。案ずるにツカとも語源を同じうせり。○三句の鳥は焉の俗字なる鳥の誤なり。(桂宮御本即所謂桂萬葉には焉とあり。なほ訓義辨證上卷七七頁を見よ。さて此句を舊訓にシバナカリソとよめるを雅澄はシバナカリソネとよめり。之に従ふべし。○

アリツツモは己があるにあらず柴ヲソノママアラセツツなり。ソノママニシテと譯すべし。○結句を契沖は諸共ニ立隠レテ逢事モアルガニと釋せり。ガネはベクなり。ガニとは異なり。ハルシキタラバは春ガ來テ葉ガ出テ木シゲクナリタラバとなり。

天皇賜海上女王御歌一首

赤駒之越馬柵のしめゆひし妹がころはうたがひもなし

赤駒之越馬柵乃緘結師妹情者疑毛奈思

右今案擬古之作也但以往當便賜斯歌歟

馬柵は舊訓にウマヲリとよめるを宣長ウマセに改めたり。信友は舊訓の如くウマヲリとよみ又之の字を不の誤としてアカゴマノコサヌとよめり。比古婆衣卷十一全集第四の之を不の誤とするは信友の説に従ふべく馬柵はなほ宣長の改訓によるべし。さてウマセのセは同じ人のいへる如くセキなるべく卷六にナキズミノ船瀬とあるフナセのセもこれと齊しかるべし。○天皇は聖武天皇なり。初二は序シメ

ユヘシは我物ト領ゼシといふ事にて妹にかゝれり。○左註には誤脱ある如し。信友道別(略解)は擬を疑の誤字とせり。なほ古の下に人字を脱せるか。道別は又往當を當時の誤字とせり(桂萬葉には時當とあり)。こはなほ考ふべし。

海上女王奉和歌一首

梓弓つまびく夜音の遠音にも君が御幸を聞之よしも

梓弓爪引夜音之遠音爾毛君之御幸乎聞之好毛

初二はトホトの序なり。契沖いふ「隨身が夜の陣にて弦打する音なり」と。○四句の御幸は眞淵の説に御事の誤にて御言の借字なりと云へり(記傳十一卷四丁にも)。○聞之は舊訓にキクハシとよめるを契沖キカクシに改めたり。シは助辭なり。○一首の意はタトヒ遙ナリトモ君ノ御言ヲ承ルハウレシといへるなり。天皇の妹ガココロハウタガヒモナシとのたまひ女王のトホトニモ云々といへるを思へば故ありて女王は里にありて久しく内に參らざりしなり。

大伴宿奈麻呂宿禰歌二首

(うちひさす)宮にゆく子をまがなしみ留者くるし聽去者すべなし
打日指官爾行兒乎眞悲見留者苦聽去者爲便無

考の説に宿奈麻呂は續記に管安藝周防二國とあればその管國より女を宮仕に出
だし、時の歌かといへり○マガナシミはカハユサニなり○留者聽去者は舊訓に
トムレバヤレバとよめるに従ふべし(古義はトドムハヤルハとよめり)

難波がた鹽干のなごりあくまでに人の見兒をわれしともしも

難波方鹽干之名凝飽左右二人の見兒乎吾四乏毛

初二はアクマデニ見ルの序なり○見兒は舊訓にミルコとよめるを古義にはミム
コとよめり。未女を奉らぬさきの歌とせばミムコとよむべけれど結句を清く釋し
たる上ならでは女を奉らぬ程の歌とも定められず○トモシは略解にワレハ見ル
事ノスクナシと也といひ古義に「トモシは少き意、モは歎息の辭なり」といへり。案す
るにこのトモシは上なる風ヲダニコフルハトモシのトモシにて飽かぬ意なり。
されば此歌は女を京に上せし後の歌にて見兒はなほ舊訓の如くミルコとよむべ

し。人は延臣を指せり。ワレシトモシモは卷二なるワレシカナシモ(二四一頁)の類に
てワレハアカズ思フといふ意なり

安貴王譚一首并短歌

とほづまの ここにあらねば (玉梓の) 道をたどほみ おもふ空

安莫國 なげくそら やすからぬものを みそらゆく 雲にもがも

高飛 鳥にもがも あすゆきて 妹にことどひ わがために 妹も

事なく 妹がため われも事なく 今裳見如 たぐひてもがも

遠孀此間不在者玉梓之道乎多遠見思空安莫國嘆虛不安物乎水空往雲
爾毛欲成高飛鳥爾毛欲成明日去而於妹言問爲吾妹毛事無爲妹吾毛事
無久今裳見如副而毛欲得

トホヅマは夫と遠く離れて住める妻にて今は因幡國の本郷に歸れる八上采女を
指せり○アラネバはアラヌニなり○タドホミの夕はタワスレテの夕(四八七頁)と
同じく添辭なり○オモフソラナゲクソラのソラは古義にココチと譯せるまづ

當れり(略解にサマとうつせるはふさはず)○安莫國を宣長のヤスケクナクニとよめるは非なり。ヤスケクナキニとはいへどナクニとは云はず。なほヤスカラナクニと舊訓によめるに従ふべし。○雲ニモガモは雲ニモ化^ナラマホシとなり。ニモはニテモの意にあらず。○高飛は宣長に従ひてタカトブと四言によむべし。タカトブのタカは名詞にて空といふ事なり。今も方言に空をタカといふ處あり。タカトブを略してタカトブといへるにあらず。○アスキテは今日行カデ明日行キテといふにはあらでアスキニモユキテといふ意なり。コトドヒはモノヲ言ヒなり。○事ナクはモノオモヒナクといふ意にあらざるか。下にも事モナクアリコシモノヲオイナミニカカル戀ニモ吾ハアヘルカモといふ歌あり。○今裳見如は舊訓にイマモミルゴトクとよめるを宣長はイマモミシゴトに改めて「京ニアリシ時見シ如ク今モといふ意也」といへり。さらばミシゴト今モといはむが辭の順なり。もと五七の二句なりしが脱字を生じて一句となれるにはあらざるか。○タグヒテモガモは相副ヒテモアラマホシとなり

反歌

(しきたへの)手枕まかず間置^タ而としぞへにける不相念^{ハネ}者
敷細乃手枕不纏間置而年曾經來不相念者

右安貴王娶因幡八上采女係念極甚愛情尤盛於時勅斷不敬之
罪退却本郷焉于是王意悼^{タウ}惘^{ダウ}聊作此歌也

間置而を舊訓にヘダテオキテとよめるを宣長はアヒダオキテとよめり。さてそのアヒダは時間にや空間にや宣長の思へるやうは知られねど雅澄は明に時間の事とせり。もし時間の事とせばアヒダオキテは年ゾヘニケルと重複すべし。案ずるに間置而は義訓にてヘダタリテとよみて處の隔たる事とすべきか。○不相念者を宣長はアハヌオモヘバとよみ雅澄はアハナクモヘバとよめり。いづれにしてもこれもタマクラマカズと重複すべし。さればアヒオモハネバとよみて妹が相思ハネバといふ意と見るべくや。アヒオモハヌは集中に多くは相不念と書きたれど又下なる不相念人ヲオモフハ大寺ノ餓鬼ノシリヘニヌカヅクゴトシの如く不相念と書けるもあり

門部王戀歌一首

おうの海の鹽干の滷のかたもひにおもひやゆかむ道のながてを
飫宇能海之鹽干乃滷之片念爾思哉將去道之永手呼

右門部王任出雲守時娶部内娘子也未有幾時既絶往來累月之
後更起愛心仍作此歌贈致娘子

飫^ウ宇^ノ海は即出雲の中^ノ海なり。宍道湖と美保灣との間にあり。初二はカタモヒの序なり。卷三四五九夏にも此王のよめるオウ河ノ河原ノチドリ云々といふ歌あり。オモヒヤユカムはオモヒツツヤユカムのツツを省けるなり。ナガテは長路といふに同じ。○略解に「出雲の任より歸る時道にて更におもひ出てよみて贈れる歌なるべし」といひ古義も此説に従ひたれどさては左註と合はず。干蔭雅澄はミチノナガテを語のまゝに心得たるにはあらざるか。僅に一二里なるをも歌にはミチノナガテといふべし

高田女王贈今城王歌六首

こときよく甚^イ毛^モ莫^ナ言^イひと日だに君いしなくば痛寸取物
事清甚毛莫言一日太爾君伊之哭者痛寸取物

コトキヨクはサツバットといふことならむ。甚毛莫言は契沖イタクモイフナとよめれどコトキヨクとイタクと重なりて調わろければ略解古義に従ひてイトモナイヒツとよむべし。○君イシの伊は志斐伊ハマヲセ(三四七夏)の伊に同じ。○結句を雅澄は偲不取物の誤としてシヌビアヘヌモノとよめり。誤字とはおぼゆれど古義の説にも従はれず。有不取物の誤としてアリアヘヌモノとよむべきか。人ごとをしげみこちたみあはざりき心あるごとなおもひわがせ

他辭乎繁言痛不相有寸心在如莫思吾背

初二は人ノ口ガウルササニといふこと(一六六頁参照)○ココロアルゴトはオモフ心アル如クとなり。略解古義にはアダシ心アル如クと釋せり。卷七にたえずゆくあすかの川のよどめらば故しもあるごと人のみまくとあるを古今集戀四に

たえずゆくあすかの川のよどみなば心ありとや人のおもはむ
と改めて出せり。之と参照して心アルゴトの意をさとるべし
わがせこしとげむといはば人ごとはしげくありともいでてあはまし
を

吾背子師遂常云者人事者繁有登毛出而相麻志呼

トゲムは逢ヒトゲムなり

わがせこにまたはあはじかと思^{オモ}基^キけさの別のすべなかりつる

吾背子爾復者不相香常思基今朝別之爲便無有都流

アハジカはアハザラムカなり。基は墓の誤なり

この世には人ごとしげしこむよにもあはむわがせこ今ならずとも

現世爾波人事繁來生爾毛將相吾背子今不有十方

コムヨニモは來世ニダニといふ事今ナラズトモは此世ナラズトモといふ事なり

常やまずかよひし君が使こず今はあはじとたゆたひぬらし

常不止通之君我使不來今者不相跡絶多比奴良思

イマハはモハヤにてアハジにかゝれり。タユタヒヌラシはタユタヒハジメタサウ
ナといふばかりの意なり。古義に「此マデハアフベキカアフマジキカト二方ニ思ヒ
マドヒシガ今ハ一方ニアハジト決メヌラシの意なり」といへるは非なり。○以上六
首もとより一時の作にあらず

神龜元年甲子冬十月幸紀伊國之時爲贈從駕人所詭娘子笠朝臣

金村作歌一首并短歌

おほきみの いてましのまに (もののふの) 八十とものをと いて
ゆきし うつくしづまは (あまとぶや) かるの路より (たまだすき)
敵火をみつ (あさもよし) きぢに入立 まつち山 こゆらむきみ
は もみぢばの ちりとぶみつ 親^{ムツシク} わをばおもはず (草枕) た
びをよろしと おもひつつ きみはあらむと あそそには かつは
知れども しかすがに もだもえあらねば わがせこが ゆきのま

にまに おはむとは ちたびおもへど たわやめの 吾身にしあれ
ば 道守の とはむ答を いひやらむ すべをしらにと たちてつ
まづく

天皇之行幸乃隨意物部乃八十伴雄與出去之愛夫者天翔哉輕路從玉田
次畝火乎見管麻裳吉木道爾入立眞土山越良武公者黃葉乃散飛見乍親
吾者不念草枕客乎便宜常思乍公將有跡安蘇蘇二破且者雖知之加須我
仁默然得不在者吾背子之往乃萬萬將追跡者千遍雖念手嬬女吾身之有
者道守之將問答乎言將遣爲便乎不知跡立而爪衝

マニはママニなり。マニを重ねてマニマニといひ又中なるニを省きてママニとも
いふなり。續紀宣命にオノガホシキ末仁、字鏡にホシキ末爾などあり。○ヤツトモノ
ヲはアマタノ部ノ長といふ意にてやがて百官といふ事なり(記傳十五卷十八丁參
照)。ヤツトモノヲトのトはト共ニなり。○ウツクシヅマはイトシキ夫といふこと。○
キヂはここにては紀州の道なり。抑地名に路を添へたる(紀路、巨勢路、大和路の類)に

は其處の路なると其處へゆく路なると二様あり。何々の路(輕の路、磐余の路の類)と
いへるも然り。其處へゆく道とのみ思へるはたとへば小夜時雨廿二丁)かたくなな
り。此卷に淡海路ノトコノ山ナルイサヤ川といへるを思ふべし。鳥籠山は近江の内
ならずや。○入立を代匠記略解にはイリタツとよみ舊訓古義、拮解などにはイリタ
チとよめり。キヂはこゝにては紀國といふ意なればイリタツとよむべし。○親を宣
長のシタシクモとよめるを古義にシタシケクに改めてハシクをハシケクといふ
類なりといへれどシタシケクハシケクなどいふ語は無し。げに上にもミヨシ野ノ
山ノアラシノ寒久爾(本書一一五頁)イハネサクミテナツミコシ吉雲會無云々(本書
三〇一頁)といふ例あれどそは然いふべき理由あるにてただサムク、ヨクを延べて
サムケク、ヨケクといへるにあらず。舊訓にはムツマシキとよめり。キとよみて下な
る吾につづくべからざるはいふまでもなければど此訓に基づき又皇親と書きてス
メラガムツとよむ例に倣ひてムツマシクとよむべきか。宣長の如くモの辭を添へ
てよまむは心安からざればなり。いづれにもあれ我ヲコヒシクハ思ハデ君ハ旅ヲ
オモシロシト思ヒツツアラムト云々といへるなり。○アソソニハはシンドモにか

かれり。絶えたる古語にて例も無ければ其意詳にしがたし。契沖は「推量し意得たる詞なるべし」といひ鐘の響(二三三丁)には「淺々にてウスウスといはむがごとし」といへり。○カツは半面ニハ、カタヘニハなどの意なり。古義にいへる如くシレドモカツハと下にめぐらして見るに及ばず。シルにかゝれるにてモダモエアラズにかゝれるにあらず。○モダモエアラネバはジツトシテモヲラレヌカラといふこと、ユキノマニマニはドコヘユカウガユイタサキヘといふこと、オハムはオヒユカムなり。○道守は道番なり。反歌の關守もやがて道守のうちなり。神代紀の一書に泉守道とありてヨモツチモリと訓じ和名抄道路具に遺邏をチモリとよめり(但記傳 七十二卷には遺邏は斥候にてチモリにかなはずといへり)。○イヒヤルは俗にいふイッテノケルなり。シラニトのトは例の如く省きて見べし。○タチテツマヅクは卷十三にもものいはずわかれしくれば、はや川のゆかくもしらに、ころもでのかへるもしらに、うまじものたちてつまづき

とあり。契沖は「心のうはの空なる故なり」といひ古義卷十三には「心も空にて歸りくる故に物につまづくなり」といへり。げに卷三なるワガノレル馬ヅツマヅク(四五五

頁参照)卷十一なるワガマツキミガ馬ツマヅクニなどのツマヅクは今もいふツマヅクなれどこゝのツマヅクは別なる如し。抑ツマヅクは爪ヲ突クなればそのツマヅクにことさらにするとおのづからせらるゝとの別あるべし。而してそのおのづからせらるゝ方は即今いふツマヅクにて、ことさらにする方は今いふツマダツなるべし。今はせむすべなさに或は夫の行けるさきの見えもやするとたちあがりてつまだつといへるなるべし。考に「そば立て望さまなり」と云へる、我意を獲たり

反歌

おくれるてこひつつあらずば木の國の妹背の山にあらましものを
後居而戀乍不有者木國乃妹背乃山爾有益物乎

コヒツツアラズバはコヒツツアラムヨリハといふ意。○四五は妹背ノ山ナラマシヲといふことにて妹背ノ山ナラバ別ルル事モアルマイニといふ意を含めり

わがせこが跡ふみもとめおひゆかばきの關守い將留鴨

吾背子之跡履求追去者木乃關守伊將留鴨

紀ノセキモリ伊の伊は上六六五頁なる君伊シナクバの伊に同じ○將留鴨を略解にトドメテムカモとよみ古義にトドメナムカモとよめりテムは自己のはたらきにいふ辭なればトドメナムカモとよむべし

二年乙丑春三月幸三香原離宮之時得娘子作歌一首并短歌 笠

朝臣金村

みかの原 たびのやどりに (たま梓の) 道のゆきあひに (あま雲の)
よそのみみつつ ことどはむ よしのなければ ころのみ むせ
つつあるに あめつちの かみ辭因而 (しきたへの) 衣手かへて
おのづまと たのめるこよひ 秋の夜の 百夜の長く ありこせぬ
かも

三香之原客之屋取爾珠梓乃道能去相爾天雲之外耳見管言將問緣乃無者情耳咽乍有爾天地神祇辭因而敷細乃衣手易而自妻跡憑有今夜秋夜之百夜乃長有與宿鴨

代匠記に「作者の名幽齋本に娘子の下にあり例尤然るべし」といへり○タビノヤド

リニは旅ヤドリノホドニにてミチノユキアヒニは途ニテユキアフ際ニなり○ヨソノミは今ニを挿みてヨソノミといふさてミツツとあればただ一度ならで度度行逢ひしなり○ココロムセツツは卷三五五頁に吾妹子ガウエシ梅ノ木ミル毎ニココロムセツツ涕シナガルとあり○辭因而は從來コトヨセテとよめり語意は略解古義共に宣長の「コトヨサシと同意にて神ノヨセ給ヒテなり」と云へるに従へり案ずるにコトヨシテとよむべくそのコトは辭ヨシテはオホセテにて辭モテオホセテといふ意なり(記傳四卷八丁に言依の言は借字にて事なりといへるは従はれず)○コロモデカヘテは袖ヲカハシテモモ夜ノナガクは百夜ノ如ク長クアリコセヌカモはアレカシなり 古義に與宿鴨の辭

反歌

あま雲の)よそにみしより吾妹兒に心も身さへよりにしものを

天雲之外從見吾妹兒爾心毛身副縁西鬼尾

心モ身サへは心サへ身サへなり古義に云へる如く今ハ何事ヲカ思ハムといふ意を含めり

このよらの早開者^{ハヤクケナバ}すべをなみ秋の百夜をねがひつるかも
今夜之早開者爲便乎無三秋百夜乎願鶴鴨

此夜ラのラはただ添へたる辭なり。野をノラといふが如し。○第二句は契沖のいへる如くハヤクアケナバとよむべし。ハヤクアケナバといはばスベナカルベミと承くべきが如くなれどスベヲナミともいひしなり。上にもヤマズユカバ人目ヲオホミ(二九二頁)ミズテユカバマシテコヒシミ(四七一頁)ヒカバカタミト(五〇二頁)などあり。○秋ノ百夜ヲは此夜ノ秋ノ百夜ノ如クナラムコトヲとなり

五年戊辰太宰少貳石川足人朝臣遷任^{セシトキ} 餞于筑前國蘆城^{アシキ}驛^{ウツマ}家^ヤ歌

三首

あめつちの神もたすけよ(草枕)たびゆく君が家にいたるまで

天地之神毛助與草枕驕行君之至家左右

三首は皆送りし人の作れるにて作者は各別なるべし。○蘆城は今の筑前國筑紫郡阿志岐にて大宰府の東方にあり

(大船)おもひたのみし君がいなばわれはこひむなただにあふまでに
大船之念憑師君之去者吾者將戀名直相左右二

タダニアフはヨソナガラ逢フのうらにてマトモニ逢フといふことなれどこゝにてはタダニを軽く添へたるなり。マデニはマデといふに同じ

やまとぢの島の浦廻^{ウラマエ}に縁浪^{ヨスルナミ}あひだもなけむわがこひまくは
山跡道之島乃浦廻爾縁浪間無牟吾戀卷者

右三首作者未詳

ヤマトヂは大和へ上る道なり。○島は契沖の説に筑前國志摩郡志摩郷なりといへり。おそらくは普通名詞の島ならむ。○縁浪を宣長はヨルナミノとよみたれど卷十五にカムサブルアラツノサキニ興須流奈美マナクヤイモニコヒワタリナムとあればなほ舊訓に従ひてヨスルナミとよむべし。以上三句は序なり。○アヒダモナケムは絶間モナカラム、コヒマクハはコヒムコトハなり。上(六五五頁)なるチドリナク佐保ノ河瀬ノサザレ浪ヤム時モナシワガコフラクハと相似たり

大伴宿禰三依歌一首

わがきみはわけをばしねとおもへかもあふ夜あはぬ夜二走良武
吾君者和氣乎波死常念可毛相夜不相夜二走良武

ワガ君は女をあがめて云へるなり○ワケを契沖眞淵は自稱の語とし宣長は對稱の語とせり。集中を検するに自稱なると對稱なるとあり。案するにワケは奴といふことなるべし。さればこそ人にも自にもいふなれ。卷八なる紀女郎贈大伴宿禰家持歌に戲奴と書いて反云和氣と書けるはワケに奴の字を當てたれどその歌にては、もと戯れてワケと云へるなればその意をさとさむが爲に戲奴と書き、さては又ワケとよまれねば反云和氣といふ註を挿みたるなるべし。宣長記傳卷二十六、玉勝間卷八、玉の小琴はワケを汝といふ意とし今の歌を釋して

汝ハ死ネト君ハオモフニヤといふ也

といへれど、さてはワケハシネトオモヘカモとこそ云ふべけれ。ワケヲバと云へるを見れば自稱としてワレヲバと釋かでは語格と、のはず○結句の走の字幽齋本には去とありといふ。略解にはフタユキヌラムとよみて逢夜とおはぬ夜と經行を

いふといひ古義にはフタツユクラムとよみてあふ夜とおはぬ夜と二つながらに經行なりといへり。案するに二は漢籍に功無二於天下また親尊莫二などある二にて二去はナラビユクとよむべし。古義に語例として下なるウツセミノ代ヤモフタク又卷七なる世ノナカハマコト二代ハユカザラシを擧げたれどそは二度アル二度來ルといふことにて今の歌の二去とは相與からず

丹生女王贈太宰帥大伴卿歌二首

あま雲の遠隔のきはみとほけどもころしゆけばこふるものかも
天雲乃遠隔乃極遠鷄跡裳情志行者戀流物可聞

遠隔は契沖ソキへ又はソクへとよむべしといひ略解にはソキへ古義にはソクへとよめり。卷三にソク久へノ極とかき卷十九にソ伎へノキハミとかけり。さればいづれにてもあるべし。但木村博士(字音辨證下卷四七頁)は久と書けるはキの音を用ゐたるものなり。久にキの音ありといへり。語意は卷三五〇八頁にいへり○キハミはハテなり○四五句の意は此方ノ心ガ到レバサキデモ此方ヲ戀フルモノカとなり(古義)○宣長いはく二首ともに戯れなる歌なりと

古^{イニシヘノ} 人の令食^{タバセル}有^ルきびの酒やめばすべなしぬきすたばらむ
古人乃令食有吉備能酒痛者爲便無貫簀賜牟

古の字は舊訓にイニシヘノとよめるに従ふべし。イニシヘノ人はハヤクヨリ知レル人といふことなるべし。○令食有は古義にタバセルとよみて「賜有なり」といへるぞ穩なる。タバスは後のタマハスなり。○キビノ酒は黍を以て造れる酒といふと、吉備國産の酒といふと二説あり。吉備能酒と書ける、借字ともおぼえねば契沖の云へる如く吉備國の酒とすべし。○ヤマバスベナシはヤマバスベナカラムといふにひとし。○ヌキスは竹を編みて盥の上にかけてわたして水のちらぬ用意にする物なり。
(契沖)○一首の意は

故人ノ賜ヘル吉備ノ酒ヲ飲ミテ酒ニ中リテ嘔吐ヲ催サムニセムスベナカルベケレバ願ハクハ吐物ヲ受クル盥ノ上ニカケワタス貫簀ヲモ賜ハラム
と戯れて云へるなり。○痛は病を誤れるなり

太宰帥大伴卿贈大貳丹比縣守卿遷任民部卿歌一首

君がためかみしまち酒やすの野にひとりやのまむ友なしにして
爲君釀之待酒安野爾獨哉將飲友無二思手

カムは酒を造ることなり。今カモスといふはカミナスの約カマスの轉せるなり。卷十六にもウマ飯ヲ水ニ釀成ワガマチシ云々とあり。古義に「カミスルといふべきを訛れるなり」といへるは非なり。○待酒は古事記訶志比宮の段に

こゝに還上りまし、時に(○應神天皇の越前より)その御おや息長帶日賣命(○神功皇后)待酒をかみてたてまつらしき

とありて記傳卷三十一に「待酒は物より來る人に飲しめむ料にかみまうけて待つ酒なり」といへり。○二三の間に君ガ京ニ上リ去ラバといふ辭を加へてきくべし。○ヤスノ野は今の筑前國朝倉郡安野なり。此地に旅人卿の山莊などありしなるべし

賀茂女王贈大伴宿禰三依訶一首

筑紫船いまだもこねばあらかじめあらぶるきみを見之かなしき
筑紫船未毛不來者豫荒振公乎見之悲左

桂萬葉に題辭の下に故左大臣長屋王之女也とあり。コネバはコヌニなり。アラブルは卷二なるアラビナユキノ君マサズトモ(二三二頁)アラビナユキノ年カハルマデ(二三八頁)のアラビにて疎くなる事なり。○一首の意は宣長の

三依、筑紫船のくるを待て筑紫に下らむとする程のことなるべし。然るに其筑紫船も未だ來ざる先に早よそになりて吾方へはうとうとしくなれるが悲と也といへる如し。古義に

君が船はいまだ來もせぬに心かはりて我方へはうとび荒びて依附かぬ君を見むとおもふがかねて悲きこといふばかりなしとなり。三依の筑紫より上らむとするほどによみて京より贈りたまひし歌なるべしといひて見之をミムガとよめるは非なり

土師宿禰水通從筑紫上京海路作歌二首

大船をこぎのすすみに磐にふりかへらばかへれ妹により而者

大船乎撈乃進爾磐爾觸覆者覆妹爾因而者

コギノススミニはコギハヤリテなり。そのススミは卷三なる家モフトココロス

ムナ(四六九頁)のススミに同じ。○フリは觸レテ、カヘルはクツガヘルなり。○而者を略解古義に「テバ」とよみて千蔭は「テバはタラバなり」といひ雅澄は「吾思ふ妹に一日もはやく依らばこひしく思ふ心の安からむぞとなり」といへり。案するにこの妹ニヨリ而者は妹ノ爲ニハといふ意なり。さればテハのハは清みて唱ふべし。はやく景樹も

この而者はタラバ、タレバいづれに見てもうまくなはぬこゝちす。さらば者は澄てよみて妹ニヨリテナラバと云常のてにをはにきくべきかといへり

(ちはやぶる)神の社にわがかけし幣はたばらむ妹にあはなくに

千磐破神之社爾我掛師幣者將賜妹爾不相國

契沖いはく

これは渡海の安くて疾く都に到らむ祈して出立來るにはのわるくて海路に日を経れば妻に逢ことの遅きに心いられしてさらば彼幣を返し給はらむと神を少恨み奉るやうによまれたるなり

といへり

太宰大監大伴宿禰百代戀歌四首

事もなく生來之ものを老なみにかかる戀にも吾はあへるかも

事毛無生來之物乎老奈美爾如此戀于毛吾者遇流香聞

太宰府にて大伴坂上郎女におくれる歌なり○事モナクは物思モナクなり(六六二頁参照)○生來之は舊訓にアリコシとよめり。宣長は生を在の誤字とせり。雅澄は契沖の説に従ひてアレコシとよみて生レ來シの意とせり。宣長の説に従ふべし○オイナミは契沖の説に「ナミは列の字なり」といひ又「年次月次のナミなり」といへり。老境といふこと、おぼゆ。景樹は「後に老ノ波といふはこれより出でたるべし」といへり

こひしなむ後はなにせむいける日のためこそ妹をみまくほりすれ

孤悲死牟後者何爲牟生日之爲社妹乎欲見爲禮

初二は戀死ナム後ニハ妹ヲ見ルトモ何カセムとなり。ノチハは後ニハなり○卷十

一にもコヒシナムノチハ何セムワガ命イケラム日コソミマクホシケレといふ歌あり

おもはぬを思ふといはば大野なる三笠の杜の神ししらさむ

不念乎思常云者大野有三笠杜之神思知三

大野ナル三笠ノ杜は今の筑紫郡大野の附近なりといふ○神シシラサムはいにしへの誓の辭にて神ガ證人ニ立チ給ヒテ罰ヲ下シ給ハムとなるべし。齊明天皇紀四年に若爲官軍以儲^{ケルナラバ}弓矢^{アキダ}鬪^シ田^ノ浦^ノ神^ヲ知^ル矣^{ナリ}また天智天皇紀十年に

泣血誓盟曰臣等五人隨於殿下奉天皇詔若有違者四天王打天神地祇亦復誅罰。三十三天證^{アキラメシ}知^シ此事子孫當絶家門必亡云々

とあり○下にも卷十二にも似たる歌あり

暇なく人の眉根をいたづらにかかしめつつもあはぬ妹かも

無暇人之眉根乎徒令搔乍不相妹可聞

イトマナクは絶間ナクなり○眉根は古義にマヨネとよめり。マユネにても可なり

○略解に『人に戀らるれば眉のかゆきといふ諺有りて集中に多し』といひ古義に『人に戀らるれば眉皮の癢きといふ諺によりてよめるなり』といへれど卷六なる月たちてただ三日月の眉根かきけながくこひし君にあへるかも卷十二なる

いとのおきてうすき眉根をいたづらにかかしまつつもあはぬ人かも
などと合せ考ふるに眉根を搔くは戀人に逢はむ呪なり

大伴坂上郎女歌二首

黒かみにしろ髪まじりおゆるまでかかる戀にはいまだあはなくに
黒髪二白髪交至者如是有戀庭未相爾

老ナミニカカル戀ニモ吾ハアヘルカモに和したる歌なり○第三句を古義にオユマデニとよめるは語格と、のはず○次の歌によるに郎女は百代の挑に應せしに
あらずされば此歌の戀はおのが戀にあらで人の戀なり。従ひて此歌のカカル戀は
カク切ナル戀など譯すべし。古義にカカル苦シキ戀と譯せるは郎女自身の戀と心得たるなり

(山すげの)實ならぬことをわれによせいはれし君はたれとかぬらむ

山菅乃實不成事乎吾爾所依言禮師君者與孰可宿良牟

山スゲノは實の枕辭略解古義ミナラヌはマコトナラヌなり。ヨセの下にテを補ひて心得べし。吾ニ托セテ實ナラヌ事ヲ人ニ云ハレシ君ハといへるにて畢竟吾ト無キ名ノ立チシ君ハといふ意なり

賀茂女王歌一首

(大伴の)みつとはいははじ(あかねさし)てるる月夜にただにあへりとも

大伴乃見津跡者不云赤根指照有月夜爾直相在登聞

タダニはヨソナガラのうらなり

太宰大監大伴宿禰百代等贈驛使歌二首

(草まくら)たびゆく君を愛見たぐひてぞこししかの濱邊を
草枕羈行君乎愛見副而曾來四鹿乃濱邊乎

右一首大監大伴宿禰百代

愛見を略解にウルハシミとよめれど舊訓にウツクシミとよめる方まされり。旅ダ
チユク君ガシタハシサニとなり。タダフはツレダツなり。○志賀は福岡灣口に當れ
る島にて其東南は所謂海の中道に連れり

周防なる磐國山をこえむ日はたむけよくせよあらきその道

周防在磐國山乎將超日者手向好爲與荒其道

右一首少典山口忌寸若麻呂

以前天平二年庚午夏六月帥大伴卿忽生瘡脚疾苦枕席因此馳
驛上奏望請庶弟稻公姪胡麻呂欲語遺言者勅右兵庫助大伴宿
禰稻公治部少丞大伴宿禰胡麻呂兩人給驛發遣令看卿病而遂
數旬幸得平復于時稻公等以病既療發府上京於是大監大伴宿
禰百代少典山口忌寸若麻呂及卿男家持等相送驛使共到夷守
驛家聊飲悲別乃作此歌

岩國山は岩國町の北方に當れる山にて昔の中國街道の峻坂なり。○夷守は今の筑

前國糟屋郡仲原なりとも多多羅なりともいふ

太宰帥大伴卿被任大納言臨入京之時府官人等餞卿筑前國蘆城

驛家歌四首

みさき廻のありそによする五百重浪たちてもわがもへるきみ
三埼廻之荒磯爾緣五百重浪立毛居毛我念流吉美

右一首筑前掾門部連石足

蘆城は上六七四頁に見えたり。○廻の字略解には例の如くワ又はマとよみ古義に
はミとよめり。ミサキは岬、ミはメグリなり。上三句はタチテの序なり。○歌の意は古
義に「云々の君にてましませば別れまゐらせむはいともせむすべなしとなり」とい
へる如し

辛人のころも染とふ紫のところに染而おもほゆるかも
辛人之衣染云紫之情爾染而所念鴨

上三句は序なり。契沖は

此國にも紫色を貴て衣を染なむをカラビトノとしもいへる意得がたし
といひ略解には

辛は借字にて韓なり。又は辛人は淑人の誤にてヨキ人か。宣長は辛は字万、二字歟
といへり

といひ古義には

辛は宮、字の寫誤なるべし

といへり。案ずるにヨキ人、ウマ人、ミヤ人の紫の衣を着るは作者目前に見て知りた
るべければコロモソムトフとはいはじ。なほ韓人の借字とすべし。○上の染を舊訓
にソムとよめるを古義にシムに改めたり。説は同書三卷九六頁に見えたり。いづれ
にてもよし(四八九頁参照)

やまと邊君がたつ日のちかづけば野にたつ鹿もとよみてぞなく

山跡邊君之立日乃近者野立鹿毛動而會鳴

右二首大典麻田連陽春

略解には邊をへとよみて辭とし考及古義にはへニとよめり。卷一なるイザ子ドモ

早日本邊の例(一〇五頁)に従ひてヤマトへとよむべし。○三四の間に人ハ勿論とい
ふことを挿みて聞くべし。○典は太宰府の第四等官なり。太宰府の四等官は帥、貳監、
典にて貳以下に大少ありしなり

月夜よし河音清之いざここにゆくもゆかぬもあそびて將歸

月夜吉河音清之率此間行毛不去毛遊而將歸

右一首防人佑大伴四綱

第二句は略解にカハノトキヨシとよみ古義にカハトサヤケシとよめり。いづれに
てもよし。○ユクモユカヌモは京ニユク人モ、ユカデ筑紫ニ留ル人モなり。○將歸は
舊訓のまゝにユカムとよむべし。略解にはユカナとよめり。ユカムは分レユカムと
なり。上なるユクとは意異なり。○防人佑は防人司の判官なり

太宰帥大伴卿上京之後沙彌滿誓賜卿歌二首

(まそ鏡)みあかぬ君におくれてやあしたゆふべにさびつつをらむ

眞十鏡見不飽君爾所贈哉旦夕爾左備乍將居

サビツツはシヲレツツなり。ウラサブといふに同じ(本書五四頁及一二六頁参照)。
オクレテヤのヤはサビツツの下におくべきを言敷の都合にてオクレテの下にお
けるなり。○賜は贈の誤なり。

ぬばたまの黒髪變白髪手裳いたき戀にはあふ時ありけり

野干玉之黒髪變白髪手裳痛戀庭相時來

二三句を宣長はクロカミシロクカハリテモとよみ雅澄は舊訓に従ひてクロカミ
カハリシラケテモとよめり。宣長の説の方穩なり。シロクカハリを變白髪と書きも
すべけれどシラケを白髪とは書くまじきが故なり。テモのモは亦なり。オイテモ亦
といふ意なり。○こゝの戀は男女の戀にあらず。老イテ心淡クナリヌレドナホ君ヲ
思フ情ノ切ナルニ堪ヘズといへるなり。略解に

年経ても男女の戀は逢ふ時あるを此別は再逢ひ難きを歎くなり

といへるは非なり。上なるクロカミニシロカミマジリオユルマデカガル戀ニハイ
マダアハナクニと辭は似たれど意は似たる所なし

大納言大伴卿和歌二首

ここにありて筑紫やいづくしら雲のたなびく山の方にしあるらし

此間在而筑紫也何處白雲乃棚引山之方西有良思

卷三(三九三頁)にココニシテ家ヤモイツクシラ雲ノタナビク山ヲコエテキニケリ
といふ歌あり。ココニアリテはココニシテと同じくてココデといふ事畢竟ココカ
ラ見ルトといふ意なり

草香江の入江にあさるあしたづのあなたづたづし友なしにして

草香江之入江二求食蘆鶴乃痛多豆多頭思友無二指天

草香江は河内の地名。上三句は序。○タツタヅシは契沖おちつかぬやうの心なりと
いへり。今いふタヨリナイの意なり。友ナシニシテは友ナクテなり

太宰帥大伴卿上京之後筑後守葛井連大成悲嘆作歌一首

今よりはきの山みちは不樂牟わががよはむとおもひしものを
從今者城山道者不樂牟吾將通常念之物乎

第三句を舊訓にサビシケムとよめるを宣長はサブシケムに改めたり。オモシロカ

ラザラムとなり。四五はイツマデモ君ニマミエ奉ラム事ヲ樂ミツツ通ハムト思ヒシモノヲといふ意なり。古義に

今より後は吾通ふべきよしもなくて城、山道はいよいよさぶしからむ、卿の太宰府におはして吾つねにかよひし時は人馬の通行絶ずてにぎはしくおもしろかりしを、となるべし

といへるは非なり。○木の山は筑前國筑紫郡原田の南方にありて肥前に跨れり。いにしへ筑後肥前より太宰府に通ふには此山を踰えしなり

大納言大伴卿新袍贈攝津大夫高安王歌一首

わがころも人にな著せそあびきする難波をとこの手には雖觸スレドモ

吾衣人莫著曾網引爲難波壯士乃手爾者雖觸

雖觸は舊訓にフルトモとよめれどさては意通せざるによりて宣長は

雖の下不字落たるか。しからばテニハフレズトモと訓べし。三四の句は高安王をたはぶれていへる也

といへり。之によればタトヒ氣ニ入ラズシテ御手ニ觸レタマハズトモ人ニハ興ヘタマフナといへるなり。雅澄は雖觸をフレドとよみ難波壯士を王自云へりとし、さては題辭と合はざるによりて高安王より旅人卿に贈れるなりとせり。案ずるにこの新袍は筑紫のつととして攝津職の長官たる高安王に贈りしにてもとより然るべき人をもて贈りけむを三津に船のはてし時そこらに居合せたる漁夫に托して贈りしやうにいひなして賤ノ男ノ手ニハ觸レヌレドといへるにや。さらば雖觸はフルレド又はフレドモ(四段活とせば)とよむべし

大伴宿禰三依悲別歌一首

あめつちと共に久しくすまはむとおもひてありし家の庭はも

天地與共久住波牟等念而有師家之庭羽裳

任地を離れむとする時その家に別るゝ事を悲みてよめるなりと略解古義にいへれど京人が任國に下りたらむにたとひ其家いとめでたかりとも京に歸るうれしさを忘れてかくばかり其家の別を惜まむは人情にあらず。恐らくは家の庭に寄せて情人の別を惜めるなるべし。○ハモは屢云ひし如く思ひ遣る調の辭なれば此歌

はその家にてよめるにあらで旅だちし後又は京に歸りての後によめるなり

金明軍與大伴宿禰家持歌二首

見まつりていまだ時だにかはらねば年月のごとおもほゆる君
奉見而未時太爾不更者如年月所念君

明軍は家持の父旅人卿の資人なり○時は雅澄のいへる如く四時の時なり。カハラ
ネバとあるによりて常の意の時にあらざる事知らる。カハラネバはカハラヌニな
り○見マツリテは最後ニ御目ニカカリテなり

(足引の)山におひたるすがの根のねもころみまくほしき君かも
足引乃山爾生有菅根乃勲見卷欲君可聞

上三句は序なり。ネモコロは今いふクレグレなり。代匠記には男色關係の歌とせり

大伴坂上家之大娘報贈大伴宿禰家持歌四首

生而有者みまくも不知なにしかもしなむよ妹といめにみえつる
生而有者見卷毛不知何如毛將死與妹常夢所見鶴

略解にいふ

契沖云。今コソ逢ガタケレ、カタミニナガラヘバ又相見ムモ知ラレヌヲナドカ吾
夢ニ君ガ入來テカク逢ハデアランヨリハ戀死ナント見エツランとよめり○代
匠記の初稿本に出でたるなり

古義にいふ

生存ヘテアリトモ現在ニテハ相見ム由モ知ズ、來世ニテ逢ベシ、サアレバ生テア
ラムハ中々ニ物ウシ、イザ死テムヨ妹トノタマフト夢ニ見エツルコトヨ、何シカモ
カクハ見エツルゾとなり。第三四句をおきかへて意得べし

と。雅澄は初二四を家持の辭とせるなり。句を前後するは處にこそよれナニシカモ
といふ地の辭を話辭の中に挿むべけむや。其上此説の如くば第二句の不知はシラ
ニとはよむべからず。必シラジとよむべきなり。雅澄又いはく

本居氏の詞瓊綸にてをはたがへる歌の中に此歌をいれしはいかにぞや
と。玉緒七卷四丁に

いきてあらば見まくもしらざに、

と擧げて

これはゾノヤ何などなくしてツルと結べるかなはず。上のナニシカモは此語へはかゝらねばなり。但初句をイキテアラバと訓むときは二の句の意かはりてナニシカモの言、ツル迄かゝれば難なし

といへり。宣長の第一説は

『いきてあればみまくもしらず何しかも死なむよ妹』といめにみえつる

界中の辭を皆家持の話辭と見れば何シカモは死ナムと照應するが故に『ツルの係なし』といへるなり。第二説(玉の小琴なるは此方なり)は契沖の説の如く

いきてあらばみまくもしらに何しかも死なむよ妹』といめにみえつる

シナムヨイモのみを家持の話辭と見ればナニシカモと見エツルと照應するが故に『難なし』といへるなり。説の當否は措きて宣長の語格論はよく通れり。訝るべきにあらず。さて歌の釋はしばらく契沖の説によるべし。此説に従へばイキテアラバはミマクと、ナニシカモはミエツルと照應せるなり

ますらをもかくこひけるをたわやめのこふるところにたぐへらめや

も

丈夫毛如此戀家流乎幼婦之戀情爾比有目八方

男デサヘカク戀慕フガナホ女ノ戀慕フ心ニ匹敵セムヤといふ意なり。タグヘラメヤモはタグヒテアラムヤハなり

(月草の)うつろひやすくおもへかもわがもふ人のこともつげこぬ
月草之徙安久念可母我念人之事毛告不來

二三はウツロヒカハリヤスキ心ナレバニヤといふ意、結句は便モセヌといふ意なり

春日山朝たつ雲のぬ日無みまくのほしき君にもあるかも

春日山朝立雲之不居日無見卷之欲寸君毛有鴨

第三句を從來キヌ日ナクとよめれどさては序とならず。よろしくキヌ日ナミとよむべし。○歌の意は契沖の云へる如く春日山ニ雲ノキヌ日ナクテサヤカニ見エネバイカデ見マホシト思フ如ク見マホシクオボユル君カナといへるなり

大伴坂上郎女歌一首

いでていなむ時しはあらむをことさらに妻ごひしつたちていぬべしや

出而將去時之波將有乎故妻戀爲乍立而可去哉

初二は出デユク時ハアラウニといふ意、コトサラニはタチテイヌにかゝれり。○こは郎女の夫の郎女に通ひそめし頃事ありて地方に行きし時によめるにあらざるか

大伴宿禰稻公贈田村大嬢歌一首

あひ見ずばこひざらましを妹を見てもとなかくのみ戀者奈何將爲
不相見者不戀有益乎妹乎見而本名如此耳戀者奈何將爲

右一首姊坂上郎女作

稻公は旅人卿の庶弟、田村大嬢は大伴宿奈麻呂の女、坂上郎女は田村大嬢の繼母なり。○モトナはアヤニクなり。○結句は略解古義にコヒ、バイ、カニ、セムとよみたれど

コヒバと假設的にいふべき處にあらず。誤字あるにあらざるか。○略解に左註の首は云の誤なるべしといへり。坂上郎女が田村大嬢に贈りし歌とせば姊とは云ふべからず。姊は稻公に對して云へるなれば右一首とあるはもとのまゝにして作とあるを代作と心得べし

笠女郎贈大伴宿禰家持歌廿四首

わがかたみ見つとしぬばせ(あらたま)年の緒ながくわれも將思シヌバム

吾形見見管之努波世荒珠年之緒長吾毛將思

將思は古義先と同にシヌバムとよめるに従ふべし。○シヌバセはシノビタマヘなり。○年の緒は年數なり。第一年第二年とやうにいふがトシナミ、十年二十年とやうにいふがトシノヲなり。○古義に「これは家持卿に別れゆくとき女郎より何にもあれ形見のものを贈りてそへたるなるべし」といへる如し

(しら鳥の)とば山松のまちつつぞわがこひわたる此月比を

白鳥能飛羽山松之待乍曾吾戀度此月比乎

初二は序。コノ月ゴロヲのヲは助辭なり

(ころもでを)打廻乃里にあるわれを知らずぞ人はまでどこずける

衣手乎打廻乃里爾有吾乎不知曾人者待跡不來家留

第二句は舊訓にウチワノサトとよめり。契沖は右の訓に従ひて地名とせり。卷十一にも神ナビノ打廻前乃イハブチニとあり。宣長は打を折の誤とし乃を衍字としてヲリタムサトと訓みて近き事とせり。雅澄は之に従へり。初句をウチにかゝれる枕辭とし打廻はウチミとよみて近鄰の義とすべきか。下にもマヂカキ君ニコヒワタルカモまた山河モヘダタラナクニカクコヒムトハとよめり。○シラズはシラデゾ、コズケルはコザリケルなり

(あらたまの)年の經去者今しはとゆめよわがせこわが名のらすな

荒玉年之經去者今師波登勤與吾背子吾名告爲莫

經去者は古義にヘヌレバとよめる。よろし(舊訓はヘユケバ)○歌の釋も雅澄の年の經にたれば今はくるしからじと心許して吾名を人に告知らしめたまふな、

ゆめゆめ吾夫子よといふなり

といへる如し

わがおもひを人に令知哉たまくしげひらきあけつといめにし所見

吾念乎人爾令知哉玉匣開阿氣津跡夢西所見

代匠記(初)曰く
昔をあると夢
見れんと思ふ
うけりて古語あり
けりて和漢ニ
下と金太刀身
ニ取副と爲見え
り何のてと
君ありむたえ

令知哉は略解古義共に宣長のシラセヤとよめるに従ひ略解に「知ラセバニヤなり」

といひ古義に「知ラシムレバニヤの意なり」と云へり。げに我思ヲ君ガ人ニ知ラセタ

マヘバニヤ楯筒ヲ開キツト夢ニ見ユといへるなれどシラセヤとよみてはかなは

ず。シラスルは二段活にてシラセは其將然格なればなり。必シラスレヤとよむべき

なり。○所見は舊訓のまゝにミユルとよむべし。略解にミエツとよめるは非なり

闇夜になくなるたづのよそのみにききつつかあらむあふとはなしに

闇夜爾鳴奈流鶴之外耳聞乍可將有相跡羽奈之爾

闇夜は舊訓にクラキヨとよめるを契沖はやくヤミノヨともよむべしと云ひ雅澄は卷二十に夜未乃欲能と假字書にせるを證としてヤミノヨとよめり。初二は序な

り○ヨソノミニはヨソニノミニなり

君にこひいたもすべなみなら山の小松が下に立嘆鴨シタタケツル

君爾戀痛毛爲便無見楡山之小松下爾立嘆鴨

イタモはイトモなり。結句の鴨一本に鶴とあり。之によりてタチナゲキツルとよむべし。ツルの係の無きは略辭格なればなり。○下の字舊訓にシタとよめるを考に

小松といはんからに立寄るばかりの陰なるはいはじ。然れば其松のもとべに立ちて嘆きしをいふなればモトと訓べし云々

といひ略解古義共にモトとよめり。卷一の小松下乃草乎荇核も考、古義にはコマツガモトノとよめり。案ずるに小松といふもの、もし今いふ如く小さきもののみを云はば小マツガモトとも云ふべからず。小松ガナカニなどこそいふべけれ。然いほざるを見れば小松は今云ふよりは遙に大なるをいひし事明なり。従ひてこゝは安んじてコマツガシタニとよむべし(卷一頁二三参照)

わがやどのゆふかかげ草のしら露のけぬがにもとなおもほゆるかも

吾屋戸之暮陰草乃白露之消蟹本名所念鴨

上三句は序なり○ユフカゲグサは契沖いはく

草の名にあらず、陰草といはむとて幸露も夕におくものなれば夕陰草など云へり

文意明ならねど夕カゲを陰草にいひかけたりとせるに似たり。略解には

草の名にあらず。水陰草、山陰草といへるに同じく庭の夕陰の草なり

といひ古義には

契沖云。草の名にあらず。夕の陰草なり。アシ引ノ山ノ陰草、天ノ河ミヅカゲ草などよめるたぐひなり

といへり。案ずるに本に暮陰草とは書きたれどカゲは陰にはあらで影の意なり。略解古義の字面に泥みたるは非なり。山、水などにこそ陰はあれ夕に陰あらむや。さて夕影は本集卷十九にコノユフカゲニウグヒスナクモ、古今集秋下にキリギリスナクユフ影ノヤマトナデシコなどありて夕日山に沈みて餘光なほ天にある程をいふ。○ケヌガニはキエヌガニにてそのガニは略解にホドと譯し古義にバカリニと

譯せる如し。古義には又宣長のガニとガネとを混同せるを辨拆しガニをバカリニ、ガネをタメニと譯し古今集以後やうやうガネの方は用ひられずなりきと云へり。くはしくは今の歌の註下を見べし

吾命のまたけむかぎりわすれめやいや日にけにはおもひますとも

吾命之將全幸限忘目八彌日異者念益十方

マタケムは全カラムなり。イヤ日ニケニは日ヲ追ウテマスマスといふことなり。さて上三句と下二句と打見には相親しからず。案するに第四句の上にムシロといふことを補ひて聞くべきなり

八百日ゆく濱の沙もわが戀にあにまさらじかおきつ島守

八百日往濱之沙毛吾戀二豈不益歟奥島守

ヤホカユクは略解に「多くの日數をあゆみ行といふにてかぎりなく遠き濱といふ意なり」といへる如し。○沙を舊訓にマサゴとよめるを雅澄は和名抄と集中の例とを引きてマナゴとよめり。○第四句アニマサラジカといへる異様に聞ゆ。續紀歷朝

豈不益歟 四訓
アニマサラジカ
代匠記云 豈中
不字街文ルヘシ
但字豈ホノ詞
ノ字文立早中ミ
意得カタク用タル
処アレハアニマサラジ
カトヨメルニヤ

詔詞解四卷三十三丁に第二十八詔に豈障倍岐物仁方不在とある註に

豈云々三十八詔に豈障事波不在止四十二詔に豈敢云々事波無止仁徳紀大后の御歌に阿理豫區望阿羅儒萬葉四に豈不益歟など有。古言の豈は漢文のいひざまといさゝかかはれり。萬葉十六に豈藻不在ともあるは何ノ論モアラズなりと師のいはれし其意也。さてこゝにかく詔給へる意は、ナデフコトカアラムサハルコトアラジト也

といへり。本集卷三にアニマサマヤモアニシカメヤモ(四四三頁及四四四頁)といへるは今の世にいふと同じ。されば古言のアニは今のいひざまと異なるもありとこそいふべけれ。さて今の歌にアニマサラジカといへるは續紀第三十八詔に豈サハル事ハアラジトといへると似たり。今はそのアラジの下にカの加はれるのみ。さて諸例に試みるに右のアニはオソラクハと譯して通ずるに似たり。されば今も恐ラクハマサラジと譯すべし。アラジカはアラジといふに同じ。なほ卷五に至りて云ふべし。○オキツシマモリと云へるは海邊の趣なれば島守のさし向ひてある體にて問ひかけたるなり

(うつせみの)人目をしげみいはばしの(まぢかき君にこひわたるかも
宇都蟬之人目乎繁見石走間近君爾戀度可聞

ウツセミノは枕辭なり。代匠記にウツセミノ人目とは世ノ人目なりといへるは非なり。何に對してか特にウツセミノと云はむ。○マヂカキ君はマヂカク住ム君なり戀にもぞ人はしにする(みなせ河)したゆわれやす月に日にけに

戀爾毛曾人者死爲水瀬河下從吾瘦月日異

戀ニモヅは戀ニモ亦といふにヅを添へたるのみ。雅澄がモヅの辭にカヘリテといふ意を含めたるなり云々といへるは非なり。○シニスルのシニは名詞なり。今も犬ジニなどいふシニなり。古今集にシニハヤスクゾアルベカリケル榮花物語に殿ノ御シニなどあり。○ミナセ河は宣長の説に河の名にあらで水無き河なりといへり。水なし河のシガセにうつれるなり。やがてミナシ河とも云へり。其みなせ河は砂の下を水の流るゝものなればシタユの枕とせるなり。○シタユは略解古義共に人知レズと釋けり。こはヤスとあるに合せたるなれどまことに瘦せむには人に知られ

ざることあらむや。案ずるにシタユは心ヨリの意にて心ヨリオトロヘユクといへるなり。○月ニ日ニケニは日ヲオヒ月ヲオヒテにて之ヲオモヘバ人ハ戀ニモ亦死ヌルモノナリと云へるなり

(朝霧の)おほにあひみし人ゆるゑに命しぬべくこひわたるかも
朝霧之鬱相見之人故爾命可死戀渡鴨

人ユエニは人ナルニなり。○オホニは漠然トなり。目モトドメズなり。卷二にオホニ見シカバ今ゾクヤシキ(三一四頁)卷三にオホニヅミケルワヅカ柚山(五七四頁)などあり。○アラタマノ年ノヘヌレバといふ歌よりは前の歌なるべし。抑此二十四首はもと一時におくりし歌にはあらで度々におくりし歌なるを順序には拘はらでしるし留めたるなり

伊勢の海の磯もとどろによする浪恐人オシロカにこひわたるかも
伊勢海之磯毛動爾因流浪恐人爾戀渡鴨

上三句は序なり。○恐の字舊訓にカシコキとよめるを代匠記拾遺に

カシコキとよめば人の上カシコクとよめばわが上也。人の物いひなどをさしてカシコシとは云へり

と云へり。宣長もカシコクとよむべしと云へり

こころゆも吾はもはざりき山河も隔莫國かくこひむとは

從情毛吾者不念寸山河毛隔莫國如是戀常羽

ココロユモはココロニモにて(上)六二頁なるココロユモオモヘヤ妹ガイメニシミユルの註を見合すべし)ココロユモワハモハザリキはオモヒカケザリキといふことなり○山河は山と河となり○隔莫國は從來ヘダタラナクニとよめれどヘダテナクニといふべき處なり。下にもウミ山モ隔莫國とあり。これも六言によむべきかなほ考ふべし

ゆふさればものもひまさるみし人の言問爲形おもかげにして

暮去者物念益見之人乃言問爲形面景爲而

第四句は契沖のコトドフスガタとよめるに従ふべし。コトドフは物イフなり。スガ

タの下にヲを省けるなり○オモカゲニシテのシは助辭なり。雅澄がシテは其事をうけぱりて他事なく物する意の時いふ詞なりと云へるはこゝにはかなはず。このニシテは月影ヲ色ニテサケル卯花ハなどのニテに同じ

おもふにしにするものにあらませば千たびぞ吾はしにかへらまし

念西死爲物爾有麻世波千遍曾吾者死變益

シニカヘルのカヘルは反復なり。さればシニカヘルは幾度も死ぬる事なり○變は反の通用なり

つるぎだち身にとりそふといめにみつなにの怪ぞも君爾相爲

劔太刀身爾取副常夢見津何如之怪曾毛君爾相爲

怪の字を略解にサガとよめるを雅澄はサガは前表といふことにあらずと云ひてシルシと改めよめり。いにしへ婦人が劔を身に副ふと夢に見れば男に逢ふ前表、男子が鏡を身に副ふと夢に見れば女に逢ふ前表とせしなり。六帖にウチナビキ獨シヌレバマス鏡トルトユメミツ妹ニアハムカモといふ歌あり○結句は從來キミニ

アハムタメとよめれどすこし穩ならず。爲は鴨の誤にあらざるか

あめつちの神理カミコトワリなくばこそわがもふ君にあはずしにせめ

天地之神理無者社吾念君爾不相死爲目

神理は從來カミシコトワリとよめれどカミニコトワリとよむべきか。コトワリナクバコソは感應ガナイモノナラバとなり。畢竟神ニハ感應アレバ祈ル驗アリテ必逢フ事アラムと自慰めたるなり

吾もおもふ人もなわすれ多奈和丹うちふく風のやむ時無有

吾毛念人毛莫忘多奈和丹浦吹風之止時無有

多奈和丹は誤字とおぼゆ。宣長は

三の句アサニケニの誤ならむか。且爾氣丹か

といひ雅澄は

此歌六帖には君モオモヘ我モ忘レジアリソ海ノ浦フク風ノ止時モナク(後撰には吾モ思フ人モ忘ルナ有磯海ノ云々とあり)とあるを思へばもと有曾海乃など

ありしをよりよりに寫し誤れるにや

といへり○結句の無有は舊訓にナカレとよめるを宣長は「無爾ムニの誤ならむか」といへり。後撰にも六帖にもヤム時モナクとあればげに本集なるはナシニとぞありけむ。さてそのナシニは初句に還りかゝれるなり

皆人をねよとのかねはうつ△れど君をしもへばいねがてぬかも

皆人乎宿與殿金者打禮杼君乎之念者寐不勝鴨

ミナビトをいにしへヒトミナといへり。されば雅澄はこゝも人皆の顛倒なりといへり。されど卷二一四三頁にも皆人とあるを彼も此も顛倒なりとせむはいかが○ミナ人ヲのヲは今のヨなり。卷七なるワガセコヲコセ山ト人ハイヘドのヲに同じ。ネヨトノ鐘は今の午後十時なり。イネガテヌカモはイネアヘヌカナなり

あひおもはぬ人をおもふは大寺の餓鬼のしりへにぬかづく如

不相念人乎思者大寺之餓鬼之後爾額衝如

かひなき事のたとへに云へるなり。契沖いはく

昔は伽藍とある所には慳貪の惡報を示さむ爲に餓鬼を作り置けるなるべし、
、寺に詣でば佛菩薩等ををがまむこそ滅罪生善の益はあるべけれ由なく餓
鬼の許に行て尙其しりへをさへをがまむは何の益かあらむ云々

といへり。卷十六にも寺々ノ女餓鬼マヲサク大ミツノ男餓鬼タバリテ其子ウマハ
ムといふ歌あり。いにしへ寺々に餓鬼の像をおきたりし事これにて明なり。○如の
字舊訓にゴトとよめるを雅澄はゴトシに改めたり。ゴトはゴトクの略にてゴトク
はこゝにかなはざればなり。○いにしへは女もかゝることを云ひき。かくいふは今
の女に學べとはあらず。人情の變遷を見るべしとなり

こころゆも我はもはざりき又更にわがふるさとかへりこむとは
從情毛我者不念寸又更吾故郷爾將還來者

略解に「此歌と次の歌は左に相別後更來贈とあれば近く女の來り住るが又故有て
遠く隔りて後よみておくれるなるべし」と云へる如し

近有者雖不見在乎チカカラバミいアラムツやとほく君が伊座者有不勝自イモガオラシ

近有者雖不見在乎彌遠君之伊座者有不勝自

右二首相別後更來贈

略解古義共に舊訓に従ひてチカクアレバミネドモアルヲとよめれど故郷へ歸り
し後の歌なればチカカラバミズトモアラムヲとよむべきなり。○伊座者を略解古
義にイマサバとよめるは誤れり。舊訓はイマシナバ。イヤトホク君ガイマスは事實
にして假設にあらねばイマセバとよむべし。○結句はアリガツマシジとよむべし。
有敢フマジ即得アラジの意なり

大伴宿禰家持和歌二首

今更に妹にあはめやとおもへかもここだわが胸おほほしからむ
今更妹爾將相八跡念可聞幾許吾胸鬱悒將有

ココダは澤山オホホシはウツトシにて胸のふさがれるをいふ

なかなかにもだもあらましを何すとかあひみそめけむ不遂等
中々者默毛有益呼何爲跡香相見始兼不遂等

モダモアラマシヲはタダニアアラマシヲにてアヒソメザラマシヲといふ意なり。ナカナカニは第四句にかかれり。中々者の者は一本に爾となり。○結句は從來トゲザラナクニとよめり等は一本に爾とありといふ。トゲザラナクニはトゲザラヌニなり。然るに今はトゲザルニとあるべくトゲザラヌニといひてはトゲザルを更に打消したる事となりて義理通せず。宣長は

トゲザラナクニと云ひてトゲヌニと云意になる古言の一格也。此例多し。別に委く云り

といへれどこれのみにてはげにとはおぼえず。雅澄は

ナクは軽く添へたる辭にて家待莫國など云へる類なり

といへり。家待莫國は卷三なる草マクラタビノヤドリニタガツマカ國ワスレタルといふ歌の尾句にて莫は眞淵等の説の如く眞の字の誤にてイヘマタマクニとよむべきこと彼歌の處(三卷五二)にいへる如し。されば今の歌の例には引くべからず。案ずるに不遂爾の上に一字(相)の字などありしが落ちたるにはあらざるか

山口女王贈大伴宿禰家持歌五首

物もふと人にみえじとなまじひに常におもへどありぞかねつる

物念跡人爾不見常奈麻強常念弊利在曾金津流

略解にナマジヒニを初句の上におきかへて釋き古義には三四の句はおきかへて意得べしと云へり。まづナマジヒニといふ語の意を明にせむに雅澄はカリソメニと釋きたれどこれは當らず。用例を考ふるに黽勉シテといふ意ときこゆ。されば句をおきかふる要は無し。即ナマジヒニオモフと續けるなり。○アリゾカネツルは人ニ見エズニハアリカヌルとなり

相おもはぬ人をやもとなしろたへの袖ひづまでにねのみし泣裳ナカモ

不相念人乎也本名白細之袖漬左右二哭耳四泣裳

モトナはアヤニクニなり。心外ニなり。○契沖いはく「泣裳はナカモとよむべし。モはムに通じてナカムなり。集中例多し」と(例は古義に擧げたり)。人ヲヤ、、ナカモと照應せり。人ヲヤのヲはナルヲのヲなり

わがせこはあひもはずとも(しきたへの)君が枕はいめにみえこそ

吾背子者不相念跡裳敷細乃君之枕者夢爾見乞

ミエコソはミエヨカシなり○第四句心得がたし。試に云はばいにしへ、人が我をこふれば其人が我夢に見ゆといふ俗信ありしなり。そは下なる東人の妻の歌を見ても知るべし。今は君ハ我ヲコヒタマハネバ我夢ニ見エタマハズ、ソレハ是非ナケレドセメテ君ノ枕ハ夢ニ見エヨカシ、ソレヲダニ慰ニセムといへるにや

(つるぎだち)名のをしけくも我はなし君にあはずて年のへぬれば

劔太刀名惜雲吾者無君爾不相而年之經去禮者

ツルギダチは名の枕辭○一首の意は雅澄の今ハタツ名ノ惜キコトナク人目憚ラシキコトモナシといへる如し

蘆べよりみちくるしほのいやましにおもへか君がわすれかねつる

從蘆邊滿來塩乃彌益荷念歟君之忘金鶴

アシベヨリはアシベヲにて初二はイヤマシの序なり○君ガは君ノ事ガとなり。このワスレはワスラレの約なり。オモガタノ和須禮牟シダハなどワスラルをワス

ルといへる例多し。略解に「君ヲワスレカヌルといふを君が云々といふは例也」といひ古義に「君ヲといふこゝろを君之と云は古言の例なり」といへるは妄なり

大神、女郎贈大伴宿禰家持歌一首

さよ中に友よぶ千鳥ものもふとわびをる時になきつつもととな

狭夜中爾友喚千鳥物念跡和備居時二鳴乍本名

第二句の下にカナを附けて聞くべし○ワブルは當惑する事○ナキツツモトナは雅澄のモトナナキツツといふが如しと云へる、よろし

大伴坂上郎女怨恨歌一首并短歌

(おしてる) 難波の菅の ねもころに 君がきこして 年ふかく な
がくしいへば (まそ鏡) とぎしこころを ゆるしてし 其日のきは
み 浪のむた なびく玉藻の かにかくに こころはもたず (大船
の) たのめる時に (ちはやぶる) 神やさけけむ (うつせみの) 人か
さふらむ 通爲 君もきまさず (たまづさの) 使もみえず なりぬ

れば いたもすべなみ (ぬばたまの) よるはすがらに (あからひく)
 日もくるるまで なげけども しるしをなみ おもへども たづき
 をしらに たわやめと いはくもしるく たわらはの ねのみなき
 つつ たもとほり 君が使を まちやかねてむ

押照難波乃菅之根毛許呂爾君之聞四乎年深長四云者眞十鏡磨師情乎
 縦手師其日之極浪之共靡珠藻乃云云意者不持大船乃憑有時丹千磐破
 神哉將離空蟬乃人歟禁良武通爲君毛不來座玉梓之使母不見成奴禮
 婆痛毛爲便無三夜干玉乃夜者須我良爾赤羅引日母至闍雖嘆知師乎無
 三雖念田付乎白二幼婦常言雲知久手小童之哭耳泣管徘徊君之使乎待
 八兼手六

初二句は序なり○玉の小琴に

キコスはノタマフと云意に用ひたる詞也下に云者とあるに重なるやうなれど

もかく重て云が古語の常也。さてノタマフと云ことをキコスと云こと例多し
 といひ記傳卷三十七ヨシトキコサバの註に

ヨシトノタマハバなり、ノタマフと云べきをキコスと云へる例云々

といひて書記萬葉の中よりあまたの例を挙げたり。げに本集卷十一なるイヌカミ
 ノトコノ山ナルイサヤ河イサトヲキコセワガ名ノラスナなどノタマフをキコス
 といふことあるは疑なけれど今のキコシテをイヒテとすれば下なるイヘバと重
 なるなり。宣長は「かく重ねていふが古語の常なり」といひたれどかゝる例あるを知
 らず。元來こゝのキコシテを宣長が辭のまゝに解せざるはネモコロニと親しから
 ざる故なるべし。案ずるにネモコロニはキコシテにかゝれるにあらず。ネモコロニ
 年フカクナガクシイヘバといふ間に君ガキコシテを挿めるなり。即我事ヲ君ガキ
 キ給ヒテネモコロニ年深ク長クノタマヘバと云へるなり。さればキコシテ(キカシ
 テともよむべし)は辭のまゝにキキタマヒテと解すべし。○年フカクの例は古義に
 擧げたり。略解に

こゝは末々長ク絶ジトイヘバと也

といひ古義に

こゝは今よりゆくさきの久しく長きをかねていふなり

といへるは非なり。年フカクは年久シクにて年フカクもナガクも共に既往の事を云へるなり。卷三にも昔ミシフルキツツミハ年フカミ池ノナギサニミクサオヒニケリとあり(四六三頁参照)○トギシココロは再男ニ逢ハジト思固メシ心といふことなり。漢籍に厲志操といへるに當れり。大伴宿奈麻呂に死別して寡居したりし程の事と思はる。下にもおなじ人のよめるマソ鏡トギシ心ヲユルシテバノチニイフトモシルシアラメヤモといふ歌あり○ソノ日ノキハミを宣長は

こは其日ノ盡ルマデと云意にて其日ノ毎日毎日過行テ極マリ盡ルマデにてイツ迄モと云意になる也。十七卷に來シ日ノキハミとも又其日ノキハミともあり。其日ヨリシテ今日迄と云ことに用ひたり

といひ略解古義共に之に従ひたれどソノ日カガリの意とすべし。卷十七述戀緒歌なる別來シソノ日ノキハミアラタマノ年ユキカヘリ春花ノウツロフマデニアヒミネバイタモスベナミ云々も其日カガリと釋きて滯る所なし○浪ノムタナビク

玉藻ノはカニカクニの序なり。ムタはトモニなり。藻は浪のまゝに、とゆきかくゆき處を定めねばカニカクニの序とせるなり。カニカクニ心ハモタズは迷ふ所なきをいふ○タノメル時ニはタノメル間ニなり。サクルは離すこと、サフルは邪魔する事なり○通爲を略解にカヨハセルとよめるはわろし。宣長のカヨハシシとよめるに従ふべし○君モのモは使に對していひ使モのモは君に對していへり○スガラは始より終までの間をいふ。さればヨルハスガラニはヨルハ夜ドホシといふことなり○日モクルルマデの日モは夜ハスガラニの夜ハに對せるなり○タヅキは手段○タワヤメはタワヤキ女といふことにてそのタワヤシはタワムなどと同じくタワといふ語のはたらきたるにて剛毅ならざる事なり。タワヤメトイハクモシルクはタワヤメトイフ由モシルクといふ意なり○タワラハは卷二(一七八頁)にも戀ニシヅマムタワラハノゴトとあり。略解に「掌にのする許のわらはと云也」といへるは非なり。手に抱くばかりのわらはといふことなり(卷三〇五三頁なる手兒の語釋と合せ見べし)○タモトホリのタは添辭なり。タワスル(卷三七四頁)のタに同じ○マチヤカネテムはマチカネテアラムカの意なり。カネタラムをカネテムといふはカラムをケ

ムといふと同例なり

反歌

はじめより長くいひつたのめずばかかるおもひにあはましものか
從元長謂管不念恃者如是念二相益物歟

初二は長歌にネモコロニ君ガキコシテ年フカクナガクシイヘバといへるに當れり。略解に『長クトイヒテタノマセズバといふ也』といへれど長クトイフといふ事をナガクシイヘバ又ナガクイヒツツとは云ふべからず。長クトといふべき處は本集にもナガクトといへり。たとへば下にコヒコヒテアヘル時ダニウルハシキ言ツクシテヨナガク常モハバといへる如し。案するにナガクイフは年月を經ていひわたるなり。○タノムルはタノマシムルにて畢竟約束する事、カカルオモヒニアハマシモノカは夫の通はずなりしを恨みてカヤウナ嘆ニ逢ハウヤと云へるなり。○不念恃の念は令の誤なり

西海道節度使判官佐伯宿禰東人妻贈夫君歌一首

あひだなくこふれにかあらむ(草枕)たびなる君がいめにしみゆる

無間戀爾可有牟草枕客有公之夢爾之所見

略解には夫の戀ふる事とし古義には作者の戀ふる事とせり。略解の説可なり。そのかみ人が我を戀ふれば其人が夢に見ゆといふ俗信ありしなり。下にもワガセコガカクコフレコソヌバタマノイメニミエツツイネラエズケレといふ歌あり

佐伯宿禰東人和歌一首

(草枕)たびに久しくなりぬれば汝をこそおもへなこひそわぎも

草枕客爾久成宿者汝乎社念莫戀吾妹

古義に

旅にありて久しく相見ずあれば吾こそ汝を思ふ事の甚しけれされば吾思ふほど汝は吾を思ふまじければ汝のみ吾を戀しく思ふとはいふことなかれ吾妹よとなり

と云へるサレバ以下はひが言なり

池邊王宴トナヘシ誦歌一首

松の葉に月はゆつりぬもみぢばの過哉君があはぬ夜多鳥
松之葉爾月者由移去黃葉乃過哉君之不相夜多鳥

作者は不詳なるなり○多鳥は舊訓にオホクとよめるを宣長は

結句はアハヌヨオホミと訓べし鳥は身の誤か又焉の字にてもよし

といへり鳥は鳥の誤なりさて鳥が焉の俗體なる事は訓義辨證に見えて上に引ける如し○ユツルは古義に依移るといふ事なりといへり案ずるにコノクレノ時ユツリナバアハズカモアラム(卷十四)など時にもいへるを見ればただウツルといふに齊しくてイウツルをつづめてユツルといふか月にいへるは傾く事なり初二は女の來ぬ人を徒に待明しつるさまなり初にコヨヒモマタといふことを加へて聞くべし古義の説非なり○過哉は舊訓にスギヌヤとよめるを古義にスギシヤに改めたりされどスギシヤにては語格と、のはずなほスギヌヤとよむべく釋は略解に「君ニアハヌ夜ノアマタ過ギヌルヨト也」といへるに従ふべし(古義にヤを疑辭としたるはわろし)君ガアハヌは君ガ逢ウテクレヌとなり君を主格とせるによりて

さる意とは聞ゆるなり○略解古義ともに多鳥を宣長の説に従ひてオホミとよめれどスギヌヤと(古義の説の如くヤを疑辭としても)相かなはずなほもとのまゝにオホクとよむべし焉には意なし(例は訓義辨證上卷七九頁以下に擧げたり)○略解に「松を待にいひなして云々」といへるは鑿説なり

天皇思酒人女王御製歌一首

道にあひてゑまししからにふる雪のけなばけぬがに戀云わぎも
道相而咲之柄爾零雪乃消者消香二戀云吾妹

天皇は聖武天皇なり○カラニは今いふカラなり道ニユキアヒテ君ノウチユミシヲ見シカラニとのたまへるなり○ケナバケヌガニは消エムバカリとなり○戀云は宣長の説に戀念の誤にてコヒモフなりといへり之に従ふべし○ワギモの下にヨを添へて聞くべし

高安王裏メル鮒ヲ贈娘子歌一首

おきべゆき邊去伊麻夜妹がためわがすなどれる藻ふしつか鮒

奥幣往邊去伊麻夜爲妹吾漁有藻臥束鮒

オキベユキのへは助辭にあらず。沖ベヲユキのヲを省けるなり。河池などにもいにしへは沖といひき。○邊去は從來へニユキとよめれどへヲユキと改むべし。○伊麻夜は誤字にあらざるかも。し誤字ならずばやは助辭とすべし。○藻臥束鮒は藻に臥て一束許ある小鮒なり。』と契沖云へり。なほ考ふべし。記傳卷三十四(六三丁)惠賀之裳伏岡の註に

田中道麻呂云萬葉四の歌に吾漁有藻臥束鮒とあるは誰もただ藻にかくれたる鮒と心得たるめれども若は此裳伏の地よりいづるよしにはあらずか

といへり

八代女王獻 天皇歌一首

君により言のしげきをふるさとの明日香の河にみそぎしにゆく
君爾因言之繁乎古郷之明日香乃河爾潔身爲爾去

一尾云龍田こえ三津の濱邊にみそぎしにゆく

一尾云龍田超三津之濱邊爾潔身四二由久

言は人言なり。シゲキヲのヲは後のニなり。當時の都は奈良なれば明日香をフルサトといへるなり

娘子報贈佐伯宿禰赤麻呂歌一首

わがたもとまかむともはむますらをは戀水にしづみしらが生二有
吾手本將卷跡念牟大夫者戀水定白髮生二有

題辭に報贈とありて初に赤麻呂の歌なければ略解には報は衍字か又別に贈歌有しが落たるか』と云へり。古義には二首次なる赤麻呂のハツ花ノといふ歌を此歌の上におきかへ此歌を以てそれにこたへたる歌とせり。○マカムは枕ニセムなり。生二有を舊訓にオヒニタリとよめるを雅澄はオヒニケリに改めたり。○此歌解しがたし。宣長は三一・二四五と句をついでて見べくさて四句の頭へ我ハといふことを添へて心得べきなりといひ契沖同説古義もその説に従へり。第二句と尾句とに誤字あるべし。第二句はマカムトカオモフ、尾句はシラガオヒニタルヲなどあらでは

通せず

佐伯宿禰赤麻呂和歌一首

しらがおふることは不念^{なま}なみだをばかにもかくにも求めてゆかむ
白髮生流事者不念戀水者鹿煮藻闕二毛求而將行

不念を舊訓にオモハズとよめるを雅澄はオモハジとよめれどなほオモハズとよむべし。但辭はこゝにて切れたり。オモハズニといふ意と見て下へ續けては心得べからず。○カニモカタニモはトニカタニなり。モトメテはソノ戀水ヲ目アテトシテとなり

大伴四綱宴席歌一首

なにすとか使の來流^{ツル}君をこそかにもかくにもまちがてにすれ
奈何鹿使之來流君乎社左右裳待難爲禮

略解に

此宴に來らぬ人におくれる也。障ありて來ぬよしの使を何にかせむ。君をこそ待

てと也

といへる如し。來流は略解古義にキタルとよめれどなほ舊訓の如くキツルとよむべし。○マチガテニスレは待チカネタレとなり

佐伯宿禰赤麻呂歌一首

初花のちるべきものを人ごとのしげきによりてよどむころかも
初花之可散物乎人事乃繁爾因而止息比者鴨

花とのみいひて可なるを初花といへるは賞美の言なり。○ヨドムは躊躇にてこゝにては行キテ得メデヌと云へるなり。○古義に此歌をワガタモトといふ歌の前におきて其歌を此歌の和とせるはいかが

湯原王贈娘子歌二首

うはへなきものかも人はしかばかりとほき家路を令還^{カヘス}念^{オモヘバ}者
宇波弊無物可聞人者然許遠家路乎令還念者

ウハヘナシはツレナシといふこととおぼゆ。結句は略解にカヘスオモヘバとよめ

り。下なるウハヘナキ妹ニモアルカモカクバカリ人ノ心ヲツクスオモヘバとある
 と参照するにげにかへスオモヘバとよむべし。イヘヂヲのヲはヨリのヲなり
 目には見て手には不所取月内のかつらのごとき妹をいかにせむ
 目二破見而手二破不所取月内之楓如妹乎奈何責
 雅澄は不所取を古風にトラエヌとよみ月内をツキヌチとよめり。人の口に熟した
 る歌なる上舊訓もあながちに後世風といふにあらねばなほ常の如くよみて可な
 り。さて手ニハトラレヌは我物とせられぬ譬なり

娘子報贈歌二首

幾許おもひけめかもしきたへの枕片去いめにみえこし

幾許思異目鴨敷細之枕片去夢所見來之

略解にいへる如く前の二首は未うけひかざりしほどの歌にて此歌は既に逢ひて
 の後のなり。オモヒケメカモは君ガ思ヒケメバカとなり。古義に作者の思ふ事とせ
 るは非なり。片去は契沖以下皆カタサルとよめり。さて契沖は

枕の片つ方をば君が爲に分ちおける夜の夢に見ゆると意得べきか
 といひ宣長も

夫の他處にあるほどは夜床を片避りて寝るなり。、、さて片去りてぬる夜の夢
 にと云ふことなる故にカタサルイメとよむべきなり

と云へれどさる意を枕カタサル夢といひては枕カタサリヌル夜ノ夢などいはず
 は辭足らず。案するに片去は舊訓の如くカタサリとよむべく枕カタサリは床の中
 央より一側に枕のする事なり。枕が一側にずれ且夢に男が見えしなり。○幾許を従
 來イカバカリとよめり。ココダクニ、ココダクモなどよむべからむ

家にしてみれどあかぬを(草まくら)たびにも妻與あるがともしさ

家二四手雖見不飽乎草枕客毛妻與有之乏左

宣長雅澄は妻を夫の借字とし與を乃又は之の誤としたれどもとのまゝにて舊訓
 の如くツマトとよむべし。次の歌と照らし見るに此時湯原王別の妻を伴ひて旅に
 ありしなり。トモシは飽かざる事なり(六一九頁参照)家ニテ見ルダニナホ飽カヌ所
 アルヲアダシ妻ヲ伴ヒテ旅ニアレバ愈不足ニ思フと云へるなり

湯原王亦贈歌二首

(草枕)たびにはつまは雖^{ホドモ}率^{ホドモ}有^{ホドモ}くしげのうちの珠とこそおもへ
草枕客者孀者雖率有匣内之珠社所念

第三句は舊訓にキタレドモとよめるを宣長は大平の説によりてキタラメドと改めたり。案ずるにゲニ旅ニアダシ妻ヲ伴ヒタレドソハ櫛笥ノウチナル玉ト同様ニ用フル事モナシ、マコトニ妻トシテ戀シク思フハ御身ナリといふ意とおぼゆれば第三句はなほキタレドモとよむべし。文選なる石崇の王明君辭に昔爲匣中玉今爲糞上^{糞上}英^英とあり。匣中玉は進御を得ざる譬なり

わがころもかたみに奉^{マツル}しきたへの枕^{マクラ}不離^{マツル}まきてさねませ

余衣形見爾奉布細之枕不離卷而左宿座

奉を舊訓にマタスとよめるを古義にはマツルとよみて

マツルは即後世のタテマツルなり。十八卷に麻都流と假字書にせり。マタスとよむは非なり。物を獻するをマタスといふことなし

といへり(一卷下三四丁、及九卷二一丁)○枕不離は舊訓にマクラカラサズとよめるを契沖はマクラヲサケズとよめり。次の歌にワガ身ハサケジとあるに合せて契沖のよめる如くよむべし。マクラヲサケズは枕カラハナサズなり。サネマセのサは添辭なり

娘子復報贈歌一首

わがせこがかたみのころも孀問爾わが身はさけじことどはずとも

吾背子之形見之衣孀問爾余身者不離事不問友

第四句は我身ヲバハナサジとなり。コトドフはものいふ事なり。第三句は從來ツマドヒニとよめれど(ツマドヒの語義は五二七頁以下にいへり)意通せず。三四を顛倒して心得べきか

湯原王亦贈歌一首

ただ一夜へだてしからに(あらたまの)月かへぬると心^{ココロ}遮^{マフ}
直一夜隔之可良爾荒玉乃月歟經去跡心遮

心遮は舊訓にオモホユルカモとよめり。略解に

道別云。所思彘など有しがかく心遮二字に誤たるならんといへり

と云へり。遮を迷の誤としてココロマドヒヌとよむべし

娘子復報贈歌一首

わがせこがかくこふれこそぬばたまのいめに見えつついねらえずけ
れ

吾背子我如是戀禮許曾夜干玉能夢所見管寐不所宿家禮

古義に

カクコフレコソは夫君がかく戀とのたまふ如くしか戀ればこそその心なり

といへるはカクとシカとの後世の區別に泥めり。本集にはカクとシカとを通用せり。たとへば卷二高市皇子殯宮之時の長歌(二七六頁)にシカシモアラムトとあるを一本にカクモアラムトとせり。又今の歌また下なる

朝髪のおもひみだれてかくばかりなねがこふれぞいめにみえける

かむさぶといなにはあらずはたやはたかくしてのちにさぶしけむかも
はシカをカクといへるにて卷一なる

三輪山をしかもかくすか雲だにもこころあらなむかくさふべしや

又上七二九頁なるシカバカリトホキ家路ヲカヘスオモヘバなどはカクをシカと
いへるなり。はやく記傳卷六(全集第一の三二二頁)にも

凡てカクとシカとはくはしく云へば差あり。カクは我につきたる事又さし當り
たる事を指て云、シカは向ふ人又向ふ物につきたる事又そのいふ事などを指て
云。コレとツレとの差の如し。されど又カクとシカとを通はして云ることも記中
にもあり。萬葉四にワガセコガカクコフレコソ云々などのたぐひはシカと云べ
きをカクと云り

といへり。○イネラエズケレはイネラレザリケレの古格なり

湯原王亦贈歌一首

はしけやししまぢかき里を雲居にやこひつつをらむ月もへなくに
波之家也思不遠里乎雲居爾也戀管將居月毛不經國

古義にハシケヤシはこゝは里と云ふに係りて妹が住里なればめで思ふよしなり
といひ又マデカキサトヲは聞近き里なるものをといふなりといへる如し。クモキ
ニは天外ノ如クニといふ意とおぼゆ

娘子復報贈和歌一首

たゆといはばわびしみせむと(やきだちの)へつかふことは幸也吾君
絶常云者和備染責跡焼太刀乃隔付經事者幸也吾君

ワビシミセムトはワビシガラウトとなり。へツカフを宣長は「絶もせず逢もせぬを
いふ」といひ雅澄は

へツラフといふと同言にてうはべには親しく依りたるごとくに見えて信實に
依れるにあらぬを云ふ言なり

と云へり。へだたる事にはあらざるか。幸也は宣長は辛也の誤字としてカラシヤと
よみ千蔭はもとのまゝにてヨケクヤとよめり。略解の訓に従ふべし。吾君はワガキ
ミとよむべし(三卷二頁六参照)

湯原王歌一首

わぎもこにこひてみだればくるべきにかけてよせむとわがこひそめ
し

吾妹兒爾戀而亂在久流部寸二懸而縁與余戀始

ミダレバはミダレナバにてヨセムと照應せり。クルベキは絲を繰る器具なり。ワギ
モコニ戀ヒテ我心モシ絲ノ如ク亂レナバクルベキニカケテ繰リ集メムト覺悟シ
テワガコヒソメシナリといへるなり。略解にヨセムトを妹ガ方ヘヨセムトコソ(古
義には妹ガ方ヘクリヨセムトテ)と譯せるは非なり。○在は者の誤ならむ

紀女郎怨恨歌三首

世のなかの女にしあらば吾渡痛背の河をわたりかねめや
世間之女爾思有者吾渡痛背乃河乎渡金目八

契沖の説の如く離別を恨みたる歌なり。女は略解のヲミナとよめなる従ふべし(古
義にはメとよめり)○吾渡を宣長は君渡の誤として君ガワタルとよみ雅澄は直渡

の誤としてタダワタリとよめり。此事は後にいふべし。痛背は略解に痛足の誤としてアナシとよみ古義も之に従へり。集中にミナシ河をミナセ河ともいへればアナシ河をアナセ河とも云ひつべし。されば誤字と見るに及ばず。さて宣長雅澄が吾渡の吾を誤字としたるはワガワタルにては結句と打合はぬ如く見ゆるによりてなり。即「世ノ中ノ女ニシアラバ渡リカネメヤとあるを見れば紀女郎は渡りかねしなり。さらばワガワタルとはいふべからず」と思へるなり。案ずるに紀女郎は實に夫古寫本に安貴王之妻也とありの跡を慕ひてあなせ河を渡りしなり。されどいたく渡りなやみしよりおのれのかよわきを嘲りて世間一般ノ婦人ナラバ今ワガワタル此アナセ川ヲ我如ク渡リカネムヤ我如クハ渡リナヤマジといへるにて一首の意よく聞えたり。されば字のまゝにワガワタルとよみて不可なる所なし。アナセ川は巻向山より出でて初瀬川に入る小流なり

今はわはわびぞしにけるいきのをにおもひし君をゆるさ△思へば
今者吾羽和備曾四二結類氣乃緒爾念師君乎縦左思者

夫の跡を慕ひてたわやめの身にしてあなせ川さへ渡り行きしかど終に別れざる

を得ざるに至りて此歌はよみしなり。イマハとあるにてさる事と知らる。ワビゾシニケルはアキラメタといふ意ならむ。くはしくは下なるオモヒタエワビニシモノヲの處にいふべし。イキノヲは命なり。イキノヲニオモフは命ヲカケテ思フなり。ユルスはゆるしはなちて別れいなしむるなり。卷十二にもシロタヘノソデノワカレハヲシケドオモヒミダレテユルシツルカモとあり

しろたへの袖可別日ワカルベキをちかみ心にむせびねのみしなかゆ

白妙乃袖可別日乎近見心爾咽飲哭耳四所流

二句はソデワカツベキとよむべき如くなれど卷十二に白妙ノ袖ノ別ハヲシケドモまた白妙ノ袖ノ別ヲカタミシテとあればなほソデワカルベキとよむべきなり。袖ガ分ルベキといふ意なり。○此歌は前二首よりはさきの歌なるべし。流は泣の誤ならむ

大伴宿禰駿河麻呂歌一首

ますらをのおもひわびつつたびまねくなげく嘆をおはぬものかも

丈夫之思和備乍遍多嘆久嘆乎不負物可聞

タビマネクは度々なり。結句は妹ガオハヌモノカハ、妹ガ負フベキモノゾとなり。カモはカハなり。古義にカモをカナとうつせるは非なり

大伴坂上郎女歌一首

こころには忘るる日なくおもへども人のことこそしげき君にあれ
心者忘日無久雖念人之事社繁君爾阿禮

古義に

人言の繁きによりて思ふ如く得あはぬ君にこそあれ
と譯したれどさらば人之事繁君爾社阿禮とあるべし(事は言の借字)されど卷十二にも

極而吾もあはむとおもへども人の言こそしげき君なれ
とあれば誤寫にはあらず。かくコソの置處のたがへるに似たる例は卷十六にもハチス葉ハカクコソアル物とあり。これも常識によらばカクアルモノニコソといふ

べきなり

大伴宿禰駿河麻呂歌一首

あひみずてけながくなりぬこのごろはいかに好去哉いぶかし吾妹
不相見而氣長久成奴比日者奈何好去哉言借吾妹

ケナガクは久シクなり。好去哉を略解にヨケクヤとよめるを古義にサキクヤに改めたり。平安ナリヤイカニと云へるなり。イブカシはオボツカナシといはむが如しと古義にいへり

大伴坂上郎女歌一首

(夏葛)のたえぬ使のよどめればことしもあるごとおもひつるかも
夏葛之不絶使乃不通有者言下有如念鶴鴨

右坂上郎女者佐保大納言卿女也。駿河麻呂此高市大卿之孫也。
兩卿兄弟之家女孫姑姪之族。是以題歌送答相問起居

古義に

佐保大納言は安麻呂卿なり。駿河麻呂の下の此は者の誤なるべし。高市大卿は安麻呂卿の兄御行卿なり。女孫姑姪とは坂上郎女は安麻呂卿の女、駿河麻呂は御行卿の孫なれば女孫といひ、さて坂上郎女は父のいとこなれば駿河麻呂より姑といひ、駿河麻呂はいとこの子なれば坂上郎女より姪と云るが故に姑姪とあるならむ。

といへり。○宣長の説に夏葛は蔓葛の誤にてハフクズとよむべしといへり。卷二十に波布久受ノタエズシヌバム、卷十に蔓葛とあれば之に従ふべし。ヨドメルは滞レルにて來らざるなり。タエヌはタエザリシの意と見べし。コトシモアルゴトは上六六五頁なる心アルゴトナオモヒワガセ、卷七なる故シモアルゴト人ノ見マクニの心アルゴト、故シモアルゴトと同義なり。

大伴宿禰三依離復相歡歌一首

わぎもこは常世の國にすみけらし昔みしより變若ましにけり

吾妹兒者常世國爾住家良思昔見從變若益爾家利

坂上郎女に贈れるなり。太宰府より歸り上りし時によめるか。常世國はこゝにては

仙郷なり。變若は舊訓にワカエとよめるを古義にヲチに改めたり。之に従ふべし。ヲツは若がへる事なり(卷三六四三頁參照)。マシは敬語のマシなり。益とかけるは借字のみ

大伴坂上郎女歌二首

(ひさかたの)あめの露じもおきにけりいへなる人もまちこひぬらむ

久堅乃天露霜置二家里宅有人毛待戀奴濫

略解に太宰府にありし程の歌なるべしと云へり。さもあるべし。露ジモは露なり(卷二三八頁參照)。アメノと云へるは古義に天より降ものなればいふ。天ノシグレなど云が如し』といへり。家ナル人は都に残せる娘たちなり。略解に家ナル人は駿河麻呂の妻をいふなるべし』といひ古義にも之を學びて宅有人毛は京ノ家ニアル人モといふにて駿河麻呂の妻をいふなるべし』といへれど郎女の娘は二人ありて郎女の太宰府にありし頃(天平二年)は二人共になほ幼かりき。長女の家持に、次女の駿河麻呂に嫁せしは遙に後の事なり。人モといへるは己に對していへるなり(古義)○白露のふれるを見て他郷にある事の久しきに驚き且故郷こひしく思へる趣なり。卷六に

天平二年庚午冬十一月大伴坂上郎女發帥家上道とあれば此歌を作りし後間もな
く還り上りしなり

玉主タモリに珠はさづけてかつがつも枕と吾はいざふたりねむ

玉主爾珠者授而勝且毛枕與吾者率二將宿

玉主を略解考にはタマ、マシとよみ宣長雅澄は舊訓の如くタマモリとよめり。又雅澄は神名帳に玉主天神社と書いてタマモリとよめる例を挙げたり。宣長は、カツガツは事の未慥ならずはつはつなるをいふ辭なり、未うけばりて授け畢りぬるにはあらざれども先はつはつに授けそめたる意なり
といひ又

玉主ニの上へ移して見べし

といへり。此説に従ふべし。カツガツモは俗語のソロソロなり。もし珠を授け畢りし後の作ならばカツガツモとはいふまじく又第二句はサヅケツとこそ云ふべけれ
○玉は娘、玉主は婿なる事契沖のいへる如し。但契沖は家持駿河麻呂の二人としたれど略解古義にいへる如く駿河麻呂のみならむ。右の二首はもとより同時の作に

あらず。本集の編者の人よりきゝしが同時なれば並べ擧げたるにこそ

大伴宿禰駿河麻呂歌三首

ころろには忘れぬものをたまたまも不見ミヌ日數ヒサマ多月ぞへにける
情者不忘物乎儻不見日數多月曾經去來

第四句は略解にミザル日マネクとよめるを古義には卷十八に美奴日佐末禰美と假字書にせるに據りてミヌヒサマネクとよめり。之に従ふべし。卷十七にも見奴日佐麻禰美とあり。タマタマモは略解に「思ヒカケズ不意ニなり」といひ古義にはタマサカの意としてタマタマニサへと譯したり。案ずるにタマタマモはタマタマニモにてそのモはダニに通ずれば雅澄の説に従ふべし

あひみては月もへなくにこふといはばをそろと吾をおもほさむかも
相見者月毛不經爾戀云者乎曾呂登吾乎於毛保寒毳

アヒミテハのハは助辭、ヲソロのロは添辭なり。○ヲソロは今いふウソなりと契沖も
宣長(玉勝間十一卷三五丁)もいへり

念はぬを思ふといはばあめつちの神もしらさむ邑禮左變
不念乎思常云者天地之神祇毛知寒邑禮左變

前なると二首一聯の歌なり。オモハヌヲオモフトイハバ何ガシノ神シラサムといふ事當時戀する人のいひなれたる誓言と見ゆ。上にも

おもはぬをおもふといはば大野なる三笠のもりの神ししらすむ

とあり卷十二にも

おもはぬをおもふといはば眞鳥すむうなでの杜の神ししらすむ

とあり○結句は考に

歌飼名齋かくありしを草の手より見誤しか

といひ(此説或は宇萬伎のとし或は魚彦のとし或は眞淵のとせり)古義には

言借名齋などありしを寫誤れるにてイブカルナユメならむか

といへり。邑禮は悵憤の誤か。卷九なる見菟原處女墓歌にイブセムを悵憤と書けり。

イブセムはヤキモキスルといふ事なり

大伴坂上郎女歌六首

われのみぞ君にはこふるわがせこがこふとふ事は言のなぐさぞ
吾耳曾君爾者戀流吾背子之戀云事波言乃名具左曾

三四の間にワレニといふことを補ひて聞くべし。コトノナグサは今いふ氣ヤスメなるべし。卷七にも例あり。雅澄は卷七の歌の註に事ノナグサメニと譯したれど今の歌に言とあるが正しくて卷七に事ノナグサニと書けるは借字なるべし

おもはじといひてしものはねず色のうつろひやすきわがこころかも

不念常日手師物乎翼醉色之變安寸吾意可聞

ウツロヒヤスキはカハリヤスキなり。ハネズは卷八に

夏まけてさきたるはねず久方の雨うちふらばうつろひなむか

又卷十一に

はねずいろのあか裳のすがた

とあり又日本紀卷二十九に朱花此云波泥須とあれば暮春にさく赤き花にて變色

しやすきものと見ゆ。仙覺抄に或云庭櫻或云李花或云木蓮花といへりとあり。案ずるにニハザクラの花は特色あるものにあらず又うつろひやすきものにあらず。之に反して木蓮の花は青を帯びたる一種固有の赤色にて又風雨に逢ひて黒色にかはりやすきものなればニハザクラよりは當れり。伴信友の動植名彙(全集第五)にも「木蓮花なるべし。詳説別にあり」といへり。其詳説は未見す。略解には庭梅とし古義には庭櫻とせり。

おもへどもしるしもなしとしるものを奈何幾許わがこひわたる

雖念知僧裳無跡知物乎奈何幾許吾戀渡

初二はオモフトモシルシモナカラムトと釋くべし。第四句を契沖はナニカココバク、干蔭はナゾココバクモ、雅澄はイカデココバクとよめり。集中にナニカとナゾとは假字書にせる例あれどイカデは例なし(卷二六頁参照)。契沖に従ひてナニカココバクとよみてむ。

あらかじめ人ごとしげし如是有者しゑや吾背子おくもいかにあらめ

豫人事繁如是 有者四惠也 吾背子奥裳何如荒海藻

第三句は舊訓にカクシアラバとよめるを(略解古義共に之に従へり)契沖は

有者は今按アレバともよむべし。シエヤはヨシヤなり。奥は、後の心にいへりといひ宣長は

シエヤはヨシヤと見ては此歌きこえず。歎息の聲也

といへり。案ずるにもしユク末ハイカナラムといふ意ならばオクハとこそいふべけれ、オクモとは云ふべからず。オクモはサシオクモにてヤマムモといふ事にあらざるか(置クに奥の字を借りたるは異様なれど)○第二句はカクシアレバとよむべく又四五をおきかへ、シエヤはヨシヤの意としシエヤワガセコの下にアヒソメテムといふことを加へて心得べし。一首の意はアヒソメヌ先ニハヤ人言ゾウルサキ、カカレバ止ママモイカナラム、タトヒコノママニ止ムトモナホ人言ハウルサカルベシ、ヨシヤ我背子アヒソメテムといへるなるべし。アラムといふべきをアラメといへるは一の格なり(卷二一頁参照)

汝乎與吾乎人ぞさくなるいで吾君人のなか言ききこすなゆめ

汝乎與吾乎人曾離奈流乞吾君人之中言聞起名湯目

初句は舊訓にナヲトワヲとよめり。契沖は上のヲは助語なりといひ雅澄も汝乎の乎は助辭なりといへれどかゝる處にヲを挿める例を知らず。おそらくは上の乎は衍字なるべし。然らばナレトワレヲとよむべし。ナレトワレトヲといふべき下のトを略せる例は集中にも玉ハハキカリコ録麻呂ムロノキトナツメノモトヲカキハカムタメ(卷十六)大伴等佐伯氏者(卷十八)賀陸奥國出金詔書歌君與吾へダテコフル(卷十九)四月三日云々の歌などあり。サクハ離間する事、ナカゴトハ即離間の言辭なり。吾君は舊訓にワギミとよめるを代匠記に

吾君はアガキミと讀べきか。ワギミは和殿原和御前などいふ類の新語か。集中に例見えず

といへり。なほ卷三(四六二頁)を見るべし。キキコスナは古義に

コスはアリコソ、ユキコソなどいふ乞望辭のコソと同じきを莫と云に續くに引れてコソを轉じてコスといへるなり

といへり。キキコスナはキイテクレルナと譯すべし。○起は越の誤なり

こひこひてあへる時だにうるはしきことつくしてよ長くともはば
戀戀而相有時谷愛寸事盡手四長常念者

略解に「コトは言なり。末句は長ク逢ハントオモハバとなり」といへる如し。コトツクシテヨは言ヲ極メヨカシとなり

市原王歌一首

あごの山五百重かくせる佐堤の埼さではへし子がいめにしみゆる
網兒之山五百重隱有佐堤乃埼左手蠅師子之夢二四所見

アゴノ山は略解に志摩英虞郡の山なるべしといへり。佐堤ノサキの所在は不明なり。宣長は佐を信又は詩の誤字として伊勢朝明郡の地名とせり。案するに宣長の説の如くサデをシデの誤とすれば第三句以上は序とならず。雅澄は

歌の意は佐堤ノ埼ニテ小網サシ延テ漁業セシ女ノウルハシカリシガ忘ラレズ
シテ夢ニサヘサダカニ見ユルとなり。契沖が序歌とせるはあらず

とさへ云へり。もとより少女の小網はへていざりせしは佐堤の埼なれど今は其サ

デノ埼を序につかへるなり。もし雅澄の云へる如くならばサデノ埼の下に必ニの辭あらざるべからず。今ニの辭を添へざるは序なるが故なり。アゴノ山は一山の名にあらず。英虞郡の群山なり。さればこそイホヘカクセルといへるなれ。さて英虞郡は志摩國の南部なれば佐堤埼は南志摩の海岸にありとせざるべからず。宣長のいへる志氏埼は伊勢の北方にありて地理かなはず。サデハフは小網を廣ぐる事

安都宿禰年足歌一首

佐穂わたり吾家の上になく鳥のこゑなつかしきはしき妻の兒

佐穂度吾家之上二鳴鳥之音夏可思吉愛妻之兒

サホワタリは佐保ノ里ヲ渡リテなり。古義に

佐保河ヲ渡リテの意なり。河をいはねどワタリと云れば河なることしるしといへるは非なり。又略解古義ともにナク鳥ノまでを序とせるは非なり。序はコエまでなり。妻之兒は即妻なり。今ならばナツカシクハシキ妻ノ兒といふべきをナツカシキといへるはいにしへの語法なり。たとへば續紀宣命に清支明支正支直支心以などあり

大伴宿禰像見歌一首

(いそのかみ)ふるとも雨に將關哉妹にあはむといひてしものを

石上零十方雨二將關哉妹似相武登言義之鬼尾

第三句は舊訓にサハラメヤとよめるを雅澄はツツマメヤとよめり。アマザハリといはむとアマヅツミと云はむとはほぼ同意なれど今はなほサハラメヤとよむべし。なほ卷八なる雨障イデテユカネバ、卷十一雨乍見トマリシ君ガの處にもいひてむ

安倍朝臣蟲麻呂歌一首

むかひみてみれどもあかぬ吾妹子にたちわかれゆかむたづきしらずも

向座而雖見不飽吾妹子二立離往六田付不知毛

次の歌の左註によれば大伴坂上郎女に贈れるにて戯にただならぬ中の如くに云へるなり。○タヅキはスベなり。卷一(一三頁)にもオモヒヤルタヅキヲシラニとあり

大伴坂上郎女歌二首

不相見者アヒミヌハいくばくひさもあらなくにここばくわれはこひつつもあるか
不相見者幾久毛不有國幾許吾者戀乍裳荒鹿

初句は記傳(三十卷二十六丁)及略解に従ひてアヒミヌハとよむべし(古義に者を而の誤としてアヒミズテとよめるは非なり)イクバクヒサモは久ニモとニを補ひてさくべしココバクはココダともココダクともいふ。澤山といふ義(卷二六三頁参照)こひこひてあひたるものを月しあれば夜はこもるらむしましはあり
まて

戀戀而相有物乎月四有者夜波隱良武須與羽蟻待

右大伴坂上郎女之母石川内命婦與安倍朝臣蟲滿之母安曇外命婦同居。姊妹同氣之親焉。緣此郎女蟲滿相見不疎。相談既密。聊

作戲歌以爲問答也

右二首も戲に事ありげにいへるなり。但二首別時の作なり。三四は月ノアルヲ思へバ夜ハマダ深カラムとなり。卷三にもクラハシノ山ヲタカミカ夜ゴモリニ云々とよめり

厚見王謔一首

朝爾日爾アサニヒニいろづく山の白雲のおもひすぐべき君にあらなくに
朝爾日爾色付山乃白雲之可思過君爾不有國

初句は略解にアサニケニとよみたれどなほ舊訓の如くアサニヒニとよむべし(朝毎ニ日毎ニなり。アサニケニと云へる意に同じ)と契沖いへり。上三句はスグの序にてオモヒスグベキは一時思ヒテ止ムベキといはむに齊し(四三一頁及五一四頁参照)

春日王歌一首

(足引の)山たちばなの色にいでて語言カタコトつぎてあふこともあらむ

足引之山橋乃色丹出而語言繼而相事毛將有

初二は序。ヤマタチバナはヤブカウジなり。語言は宣長が語者の誤としてカタラバとよめるに従ふべし。色ニ顯ハシテ心ノ中ヲ語ラバ引續キテ逢フ事モアラム、イデヤ色ニ出デテ語ラムといへるなり。○第三句をイロニ出与とせる本あれど取らず

湯原王歌一首

月讀の光にきませ(あしひきの)山をへだててとほからなくに

月讀之光二來益足疾乃山乎隔而不遠國

ツクヨミは月なり。山ヲモ隔テズ遠クモアラヌ處ナレバ月ノ光ニ通ヒ來マセといへるなり。今ならば山モ隔テズ遠カラナクニといふべし

和歌一首

つくよみの光は清てらせれど感情不堪念

月讀之光者清雖照有感情不堪念

清の字略解にサヤニとよめれど舊訓に従ひてキヨクとよみて可なり。四五は略解

にマドヘルココロタヘジトゾオモフとよみたれどさては意通せず。宜しく感情を情感の顛倒として六帖の如くココロゾマドフタヘヌオモヒニとよむべし。月ノ光ノ清サニ身ハ惑ハネド堪ヘヌ思ニヨリテ心ゾ惑フといへるなり。贈歌にツクヨミノヒカリといふ辭あるを取りてよめるにて後世の答歌とは趣を異にせり。○雅澄は前の歌を娘子の湯原王に贈れる歌とし此歌を湯原王の歌とせり。げに然るべし

安倍朝臣蟲麻呂歌一首

(しづたまき)數にもあらぬ壽持奈何幾許わがこひわたる

倭父手纏數二毛不有壽持奈何幾許吾戀渡

略解に

壽は身の草書より誤れるにてミヲモチテならん。又吾身二字の誤にてワガミモテにても有べし

といへり。しばらくミヲモチテとよむべし。第四句は契沖のナニカココバクとよめるに従ふべし

大伴坂上郎女歌二首

(まそ鏡)とぎし心をゆるしてばのちにいふともしるしあらめやも

眞十鏡磨師心乎縦者後爾雖云驗將在八方

上に出でたる此人の怨恨歌にもマソカガミトギシココロヲユルシテシとありト
ギシ心は節ヲ守ラムト思固メシ心ユルスは人に委するなり(七一七頁参照)○テバ
はタラバ、イフトモは悔ユトモなり

(眞玉つく)をちこちかねて言はいへどあひてのちこそくい(二)はありと
いへ

眞玉付彼此兼手言齒五十戸常相而後社悔二破有跡五十戸

ヲチコチは略解に「今と後とをいふ」といへる如し言を舊訓にイヒとよめるを略解
にコトに改めたり。二の字は略解に衍字かといへり。ノチコソはノチニコソにてそ
のノチは副詞なり。之を名詞とせばアヒテノチといはざるべからず

中臣女郎贈大伴宿禰家持歌五首

(をみなべし)さき澤におふる花がつみかつても知らぬ戀もするかも

娘子部四咲澤二生流花勝見都毛不知戀裳摺可聞

上三句はカツテの序、其中にて又ヲミナベシはサキ澤の枕なり。或は舊訓の如くサ
ク澤ニオフルとよむべきにて(本には咲澤と書けり)花勝見と女郎花とさき交れる
にやとも思へど卷十にヲミナベシ咲野ニオフルシラツツとありて躑躅と女郎
花とは固よりさき交るべくもあらねばなほ契沖の説の如くサキ澤とよみて地名
とすべし。さて契沖は「大和國添下郡の佐紀なるべきにや」と云へり。さてもなほヲミ
ナベシをサキ澤又はサキ野の枕につかひたるは異様にて故なくてはかなはぬこ
こちす。轉じて例を尋ぬるに卷十一にカキツバタサキ沼ノ菅ヲ笠ニヌヒ云々、卷十
二にカキツバタサキ澤ニオフル菅ノ根ノ云々とあり又菅家萬葉集(下卷女郎花の
部)にヲミナベシ拆野ノサトヲ秋クレバ云々とあり。よりて案ずるにサキ野(澤も沼
も其中にあり)は女郎花、燕子花などの多かる處なれば花チラフアキツノ野べ、千鳥
ナク佐保ノ河原、カハヅナクカムナビ川といふが如くにヲミナベシサキ野、カキツ
バタサキ澤などいへるなれどサキにいひかけたる爲ふと見てはかの花チラフ秋

津ノ野邊などの類とは見えぬなり。右の如くなれば今の歌のヲミナベシは所謂准枕辭なり。○花勝見は野生の花菖蒲にて日光にては赤沼アヤマといふ。寫眞は三好博士の日本植物界三四九頁に出だし著色圖は日光といふ書の中なる白井博士の論文に添へたり。あやめより小さく五六月頃に花さくものにて花の色は紫赤にて今も或地方にては花ガツミといふとぞ。略解に

陸奥にて今花菖蒲に似て花の四ひらなるものをカツミといへり。これぞまことの物なるべき

といへれどカツミは菰にて花カヅミと同物にあらず。又花勝見の花は三瓣にて四瓣にあらず。黒川春村の碩鼠漫筆に始めてカツミと花ガツミとを區別し花ガツミを野生の花菖蒲とせり。春村は其花ガツミを庭に植ゑて見し趣なるになほ四瓣花なりといへり。いといぶかし。○カツテモ知ラヌは曾テオボエヌとなり。カツテは更ニ、フツニなり

追考 仙臺叢書第十卷に収めたる藤塚知明の花勝見考に

宗仲○陸奥淺香郷の人曰。常のあやめの花に似て少し小ぶりなり。色は京紫の少

し赤み強し。此花二本松淺香の里に澤山野山にもあり。五六月も花あり

この花がつみおのれ仙臺の民なべてあやめと呼。池沼水澤に多し

此春子の三郎なる知能、淺香の郷に入り人つどひたる民家に花がつみを問求むるにむくつけき男ふたりみたり口つどひてあやめの花にして四ひらなるこそまことの花がつみにあるぞ。五月來らば取てませんなどいらへり

さらば四ひらのあやめまぎ求めんと池沼に臨むに多く得たり

など云へり。いと拙き擬古文にて語格の誤さへいと多かれど大意は知らるべし。花ガツミを四ひらと云へるは之にもとづきたるなり。四ひらなるはおそらくは變種ならむ。此書には千蔭の序添ひたり

(わたの底おきを)ふかめてわがもへる君にはあはむ年はへぬとも

海底奥乎深目手吾念有君二波將相年者經十方

略解に「初はフカメテといはん料のみ」といひてオキヲまでを序とせり。之に従ふべし。卷十六にもキナ川ノ沖ヲフカメテワガモヘリケルといひ。卷十八にもナゴノ海ノ沖ヲフカメテサドハセル君ガココロノスベモスベナサといへり。ココロヲフカ

クシテ即心フカクといふ事とおぼゆ。但卷十一にワタノ底オキヲフカメテオフル
藻ノとあるは辭のまゝに沖ヲフカクシテ即沖深クの意とすべし

かすが山あさるる雲のおほほしく知らぬ人にもこふるものかも

春日山朝居雲乃鬱不知人爾毛戀物香聞

オホホシクは心の晴れざる事にて(卷二三頁参照コフルにかゝれり。初二は序。シラ
ヌ人とあるを見れば女郎は家持を見し事なきなり

ただにあひてみてばのみこそたまきはる命にむかふわがこひやまめ

直相而見而者耳社靈剋命向吾戀止眼

タダニアヒテはデカニ逢ヒテなり。ミテバはミタラバなり。命ニムカフ吾戀とつづ
けるなり。コヒヤムといふ動詞にあらず。命ニムカフは命ニ匹敵スルといふ事にて
畢竟命ニトリカヘルホドナといふ事なり。戀の下にモの辭おちたるやうに見ゆれ
ど卷十二にもマソカガミタダ目ニ君ヲミテバコソ命ニムカフワガ戀ヤマメとあ
ればいにしへはかくても耳に立たざりしなり。剋は刻の通用なり

いなといはばしひめや吾背すがのねのおもひみだれてこひつつもあ
らむ

不欲常云者將強哉吾背菅根之念亂而戀管母將有

明ニ否逢ハジトイヒ放タバ強ヒテ逢ハムト云ハムヤとなり。オモヒミダレテの上
にタダといふことを加へて心得べし

大伴宿禰家持與交遊△別歌三首

けだしくも人の中言聞可毛幾許雖待君がきまさぬ

蓋毛人之中言聞可毛幾許雖待君之不來益

目錄に別久歌とあるは久別を顛倒したるにて、ここには久の字を落したるならむ。
別の下にも脱字あるべし。ケダシクモはモシ或ハといふこと。第三句は古義にキカ
セカモとよめるに従ふべし。舊訓はキケルカモ。聞キ給ヘバニヤなり。第四句は考の
ココダマテドモと舊訓のココダクマテドといづれにてもよし

なかなかに絶タスといはばかくばかりいきのをにしてわがこひめやも

中々爾絶年云者如此許氣緒爾四而吾將戀八方

絶は略解にタエム古義にタユとよめり古義に従ふべしイキノヲニシテのシテは助辭イキノヲニは懸命ニといふこと上七三八頁にイキノヲニオモフとあり相照して心得べし

將思人^{アヒオモフ}にあらなくにねもころにこころ盡してこふるわれかも

將念人爾有莫國勲情盡而戀流吾彘

將思は一本に相思とありといふそれに從ひてアヒオモフとよむべし或は將相思^{アヒオモフ}の誤にてもあるべし(訓義辨證上卷八八頁には將相通用せしなりといへり)

大伴坂上郎女歌七首

謂言之^{モトイヘ}かしこき國ぞくれなるの色にないでそおもひしぬとも

謂言之恐國曾紅之色莫出曾念死友

謂言之は古義にモノイヒノとよめるに従ふべし(舊訓にはイフコトノカシコキはオソロシキなり國は世ときくべし古義)

今は吾はしなむよわがせいけりともわれによるべしといふといはな
くに

今者吾波將死與吾背生十方吾二可緣跡言跡云莫苦荷

第二句は上六九四頁に

いきてあらばみまくもしらに何しかも死なむよ妹といめに見えつる
とあるに似たり結句打見にはイフトといふ辭餘れるに似たりさるによりて宣長
はイフトは添へたる詞なりといへり案ずるにイフトイハナクニは仰セラルトモ
承ハラヌニといふことにて上のイフは男のいふにて下のイフは傳ふる人のいふ
なりはやく契沖も君がいふとも人のいはねばと釋せり

人ごとをしげみや君をふた鞘の家をへだててこひつつをらむ

人事繁哉君乎二鞘之家乎隔而戀乍將座

シゲミヤはシゲサニヤなりフタサヤノはイヘヲヘダテテの枕なりフタサヤは二
鞘刀の略にてその家は即鞘なり二鞘刀は鞘の腹を連ね作れるをいふ正倉院の御
物に圖の如き刀子あり一幹三室にて本太く末細し刀は柄の色の各異なるを見れ

ば用ふる所はた各異なるべし。神功皇后紀五十二年に七枝刀とありて七枝にナナツサヤと傍訓せるはいぶかし。こは石上布留神社の神寶の如く本来の鋒の外に左右に各三枝あるを云へるにあらざるか彼神寶をやがて神功皇后紀なる七枝刀に擬する説もあり

比者ちとせやゆきも過與われやしかもふ欲見鴨

比者千歳八往裳過與吾哉然念欲見鴨

諸訓を折衷して

このごろに舊略すぎにしと古みまくほれかも略

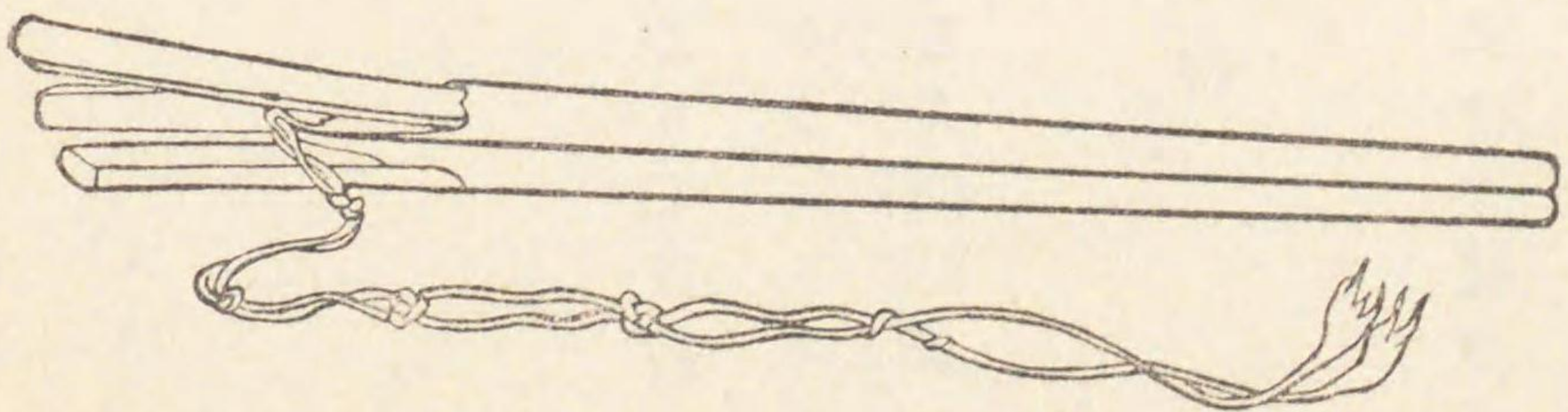
とよむべし。ワレヤはワレヨなり。シカモフにて切れたり。ミマクホレ

カモは見マクホリスレバカモなり

愛常わがもふこころ(はや河の)雖塞々友なほや將崩

愛常吾念情速河之、雖塞々友猶哉將崩

こは略解に従ひて



うつくしと、、せきとせくと、、くづれむ

とよむべし。セキトセクトモはセキニセクトモといはむに同じ。古義に友の字は餘れるに似たれど雖干常と書けると同例なりといへり。クヅレムは古義の如くクエナムともよむべし。ウツクシトはイトホシトなり。上六八五頁にもタビユク君ヲウツクシミとあり

青山をよこぎる雲のいちじろくわれとゑまして人にしらゆな

青山乎横殺雲之灼然吾共咲爲而人二所知名

初二は序。ワレトはワレニ對ヒテなり(略解)

海山も隔莫國なにかも目言をだにもここだともしき

海山毛隔莫國奈何鴨目言乎谷裳幾許乏寸

隔莫國は上七〇八頁にいへり。〇目言を眞淵はメゴトと濁りて見る事といふ意とし雅澄は目ト辭トとせり(卷二九頁参照)目言ヲダニモのヲは古今集なるアヤナクアダノ名ヲヤタチナム、香ヲダニニホへ人ノシルベクなどと同じ類なるヲなり。コダはこゝにてはタイサウなど譯すべし

大伴宿禰三依悲別歌一首

照日^{アルツキ}を闇にみなしてなく涙ころもぬらしつほす人なしに
照日乎闇爾見成而哭淚衣沾津干人無二

初句を宣長は日を月の誤としてテルツキヲとよめり。之に従ふべし。ミナスは古義に云へる如く見變^{ミカス}なり。なく涙に眼くもりて照る月を見れども闇の如しとなり。ナクナミダの下にニを省きたり。ホス人ナシニは妹ニ別レテハ干シテクルル人ナクテとなり。ナシニはナクテなり。古義にはナキニと同一視せる如し

大伴宿禰家持贈娘子歌二首

ももしきのおほみや人は雖多^{オホカレド}有^ドこころにのりておもほゆる妹
百穢城之大宮人者雖多有情爾乘而所念妹

第三句はオホカレド(舊訓)とオホケドモ(古義)といづれにてもよし。ココロニノリテは卷二(一四九頁)にも妹ガココロニノリニケルカモとあり。妹ガ我心ニ乗リテなり。オモホユルは我オモホユルなれば自他相背けるに似たれど當時はかやうにいひ

て怪しまざりしにこそ

うはへなき妹にもあるかもかくばかり人のこころを令盡^{ツクヌ}念^{オモヘ}者

得羽重無妹二毛有鴨如此許人情乎令盡念者

上七二九頁なるウハヘナキモノカモ人ハシカバカリトホキ家路ヲカヘスオモヘバとあるを學べるなり。ウハヘナキは彼歌の處にていひし如くつれなき意と思はる。結句は略解にツクスオモヘバとよめるに従ふべし。畢竟人ニ其心ヲ盡サスルヲ思ヘバといふ意なり

大伴宿禰千室歌一首 未詳

日本未詳、二字もい後人加筆、古歌

如此耳こひやわたらむ秋津野にたなびく雲のすぐとはなしに

如此耳戀哉將度秋津野爾多奈引雲能過跡者無二

初句は古義にカクノミニとよめるに従ふべし。三四は序なり。スグは上七五五頁なるアサニ日ニイロヅク山ノシラ雲ノオモヒスグベキ君ニアラナクニのオモヒスグに同じ。スグトハナシニはタダ一時ナラデといふ意にてスグとワタルとはうらうへなり

廣河女王歌二首

戀草をちから車になな車つみてこふらく吾心から
戀草呼力車二七車積而戀良苦吾心柄

コヒグサのクサは料とか種とかいふ意なり。但今は草にとりなしてコヒ草トイフ草ヲ云々といへるなり。力車は榮華物語にも見えたり。考に「人の力もてやる車なり」といひ古義に「力人の引く車なり」といへるは共に非なり。力ある車といふ意にて重きものを運ぶべき車なり。コフラクは今いはばコフルコトヨなどいふべき語勢なり。ワガ心カラは略解に云へる如くワガ心ツカラなり。古義に心ノ裏ヨリ眞實ニと譯せるは非なり。或人いはく此歌各句の首尾に韻をふめりと。おもしろき心づきなれどそは偶然のみ

戀は今あらじとわれは念オモヘル乎いづくの戀ぞつかみかかれる

戀者今葉不有常吾羽念乎何處戀其附見繫有

第三句は古義にオモヘルヲとよめるに従ふべし。上三句の意は今ハ戀ハ殘ラジト

思フヲとなり。ツカミカカレルの下にハを補ひて聞くべし。ツカミカカルは襲フなり。卷十六にもコヒノ奴ノツカミカカリテとあり

石川朝臣廣成歌一首

家人にこひすぎめやもかはづなく泉の里に年のへぬれば

家人爾戀過目八方川津鳴泉之里爾年之歴去者

コヒスグはオモヒスグベキ戀ニアラナクニ、オモヒスグベキ君ニアラナクニなどのオモヒスグに似てコヒワタルのうらなり。初二の意は畢竟家人ヲ戀渡ルカナとなり。イヅミノ里は和名抄山城國相樂郡の下に水泉以豆美とある是なり。略解に「久邇の都へ遷されし後奈良の故郷に妻をおきてよめるならん」といへり

大伴宿禰カタミ像見カクミ詞三首

吾聞ワガキキにかけてないひそ（かりごもの）亂れておもふ君がただかぞ

吾聞爾繫莫言刈薦之亂而念君之直香曾

吾聞は舊訓にワガキキとよめるに従ふべし。カケテを契沖は「君が上の事をかけて」

と譯し雅澄は「言の葉にかけて」と譯せり。案ずるにカケテを右の如く譯すればワガキキニ、ナイヒソとつづきて辭を成さず。さればワガキキニカケテとつづけてワレニ聞カセテの意とすべし。人に物を見するを御目ニカクといふ類なり。○タダカは玉勝間卷八(全集四卷一八四頁)に

多太加とは君また妹をただにさしあてていへる言にて君妹とのみいふも同じことに聞ゆるなり

といへり。君ガタダカは君ノ御上と譯すべし

春日野に朝ある雲のしくしくに吾戀益月に日にけに

春日野爾朝居雲之敷布二吾者戀益月二日二異二

初二は重々ニの序。第四句は古義に従ひてワハコヒマサルとよむべし。月二日ニケ

ニはイヤマシニなり

一瀬にはちたび障らひゆく水の後毛將相いまならずとも

一瀬二波千遍障良比逝水之後毛將相今爾不有十方

川の水の高きより低きにおつる處を瀬といひ、瀬と瀬との間をも瀬といふ。今の瀬

は後者の意なり。一セニハのハは無意の辭なり。障を古義にサヤラヒとよめれど舊

訓の如くサハラヒとよみて可なり。上三句は序なり。云々シテ逝ク水ノ後ニ合フガ

如ク後ニ逢ハムといへるなり。第四句はノチモアヒナムとよむべし。ノチモは後ニ

モなり

大伴宿禰家持到娘子之門作歌一首

かくしてやなほやまからむ近からぬ道のあひだをなづみまゐきて

如此爲而哉猶八將退不近道之間乎煩參來而

カクシテは即近カラヌ道ノ間ヲナヅミ來テなり。まづカクシテといひ、下に至りてくはしく云へるなり。カクシテヤのヤとナホヤのヤと重なれるはいか。古義には上のヤは軽く添へたる辭なりといへり。案ずるにカクシテヤのヤはヤハの意、ナホヤのヤは助辭にてナホヤはタダニといはむに齊し。○マカラム、マキ來テといへるにて娘子に贈れる歌なる事を知るべし。マカル、マキルは敬語なればなり

河内百枝娘子贈大伴宿禰家持歌二首

はつはつに人をあひみて何將有いづれの日にか又よそにみむ
波都波都爾人乎相見而何將有何日二箇又外二將見

ハツハツはチトバカリなり。第三句は舊訓にイカナラムとよめるに従ひてあるべし。古義にはイカニアラム。ヨソニ見ムは略解古義にヨソナガラニモ見ムと譯したれどさては少くともヨソニの下にモといふ辭無かるべからず。ホソノ此頃人ニ逢ヒソメタガトテモアヒトグル事ハ成ルマジキニ知ラズイヅレノ日ニカ又ヨソニ見ム、イヅレ遠カラズ外ニ見デハカナハヌ事ナルベシといへるなり

(ぬばたまの)其夜のつくよけふまでにわれは忘れずまなくしもへば
夜干玉之其夜乃月夜至于今日吾者不忘無間苦思念者

前なるとは別時の歌なるべし。其夜とは逢ひし夜なり。このソノは歌中に指す所なし。ヌバタマノソノ夜ノ梅ヲタワスレテヲラズキニケリ思ヒシモノヲ(四八七頁)ヒト日ニハ千重浪シキニオモヘドモナゾソノ玉ノ手ニマキガタキ(四九八頁)のソノと同類なり

巫部麻蘇娘子歌二首

わがせこをあひみし其日けふまでにわが衣手はひる時もなし
吾背子乎相見之其日至于今日吾衣手者乾時毛奈志

其日の下にヨリを補ひてきくべし

(たく繩の)ながき命をほしけくはたえずて人を欲見社

栲繩之永命乎欲苦波不絶而人乎欲見社

ホシケクハはホシク思フハとなり。結句は略解にミマホシニコソ、古義にミマクホリニコソとよめり。按ずるにミマクホレニコソとよむべし。チラデアレカシといふことをチラズアリニコソといふ類にはあらで常の(係辭の)コソなればなり。さてミマクホレニコソは見マクホレバコソ長キ命ヲホシク思フナレとなり

大伴宿禰家持贈童女歌一首

はねかづら今爲いもをいめにみてこころの内にこひわたるかも
葉根蘘今爲妹乎夢見而情内二戀度鴨

ハネカヅラは女の漸く人となるほどにものする髪の飾とおぼゆれど其製明ならず。爲の字は舊訓にスルとよめるに従ふべし。雅澄はセスに改めたれど答歌にも今爲妹とありてその爲はセスとよむべからねばこゝもスルとよむべし。此歌なるをセス答歌なるをスルとよむべくば書様を別にすべければなり

童女來報歌一首

はねかづら今爲スルいもは無ナキ四チをいづれの妹イモ其ソノここだこひたる

葉根獲今爲妹者無四乎何妹其幾許戀多類

爲を古義にセルとよめるはわろし。無四を宣長は無物の誤としてナキモノヲとよめり。之に従ふべし。妹其は舊訓の如くイモヅとよむべし。略解にイモカとよめるはわろし。四五は上なるイヅクノ戀ヅツカミカカレルと同格なり。即君ノ犬サウ慕ヒ給ヘルハイヅレノ妹ヅとなり。上三句の釋は古義の如し

栗田娘子贈大伴宿禰家持歌二首

おもひやるすべの不知シラ者ナかたもひの底ソコにぞわれはこひなりにける

思遣爲便乃不知者片腕之底曾吾者戀成爾家類

オモヒヤルは思を遣り失ふなり。不知者を舊訓にシラネバとよめるを古義にシレネバに改めたり。なほシラネバとよむべし。シラネバはシラレネバの略なり。カタモヒは略解にいへる如く蓋なき腕にてこゝにては底の枕なり。ソコニコヒナルとは「戀ノ至リ極レルといふなり」と宣長のいへる如し

またもあはむよしもあらぬかしろたへの我衣手にいはひとどめむ

復毛將相因毛有奴可白細之我衣手二齋留目六

アラヌカはアレカシなり。略解に「今一度逢てあらばいはひとどめむと云也」といへる如し。第二句の次にサラバといふ辭を補ひてきくべし。いにしへ衣手に人の心をいはひとどむるまじなひありしにこそ

豊前國娘子大宅女歌一首

夕闇は路たづたづし月まちていませわがせこそそのまにも見む

夕闇者路多豆多頭四待月而行吾背子其間爾母將見

イマセはこゝにてはユキマセなり。タヅタヅシはタドタドシなり。ソノ間ニモのモ
はダニに齊し

安都^{アト}扉^{ヒラ}娘子^メ歌一首

みそらゆく月の光にただ一目あひみし人のいめにしみゆる
三空去月之光二直一目相三師人之夢西所見

安都扉娘子を古義にアトノトビラヲトメとよみて

安都は氏なり。此上に安都宿禰年足とも見えたり。扉は字なるべし。上に巫部^{ウラベ}（氏麻
蘇^ソ字^ジ）娘子^メなどある類なり。扉はトビラと訓べきか。女の字にはめづらし云々
といへり

丹波^{タニハ}大^{オホ}△^ノ娘子^メ歌三首

かもとりのあそぶこの池にこのは落^{オチ}而^テうかべる心わがもはななくに
鴨鳥之遊此池爾木葉落而浮心吾不念國

目錄及諸本に大女^{オホメ}娘子^メとあり。○上三句は序なり。ウカベル心はウキタル心なり。落

而は舊訓に従ひてオチテとよむべし

（うま酒）をみわのはふりがいはふ杉手^{ツギテ}觸^フし罪か君にあひがたき

味酒呼三輪之祝我忌杉手觸之罪歟君二遇難寸

三輪ノハフリは三輪、大神の神主なり。イハフは穢を避けて大切に守る事。觸はいに
しへは四段にはたらきたればフリとよむべし。當時三輪の神杉に手を觸るれば神
罰にて男に逢はれずなどいふ俗信ありしなり。カク君ニ逢ヒ難キヲ思ヘバ前方三
輪社ニ參詣セシヲリ知ラズ知ラズ神杉ニ手ヲヤ觸レケムといへるなり。略解古義
にイノルカヒナクシテなど云へるは非なり。歌の上には見えぬ事なり

垣ほなす人ごとききてわがせこがこころたゆたひあはぬこのごろ

垣穗成人辭聞而吾背子之情多由多比不合頃者

垣ノ如ク中ヲ隔ツル人ノ言ヲ吾セコガキキテ云々と略解に譯せる如し。ワカセコ
ガはアハヌにかゝれり。古義に吾セコガ心ヲユタユタト危ミ疑ヒテ云々と譯せる
は非なり

大伴宿禰家持贈娘子歌七首

ころろにはおもひわたれどよしをなみよそのみにしてなげきぞわが
する

情爾者思渡跡縁乎無三外耳爲而嘆曾吾爲

ヨシヲナミは逢フ由ガ無サニなり。ヨソノミニシテはヨソニノミ見テなり

(千鳥なく)佐保の河門のきよき瀬を馬うちわたしいつかかよはむ

千鳥鳴佐保乃河門之清瀬乎馬打和多思何時將通

河門は河の渡場なり。馬ウチワタシのウチは添辭なり。古義に「鞭にて打て」といへる
は従はれず

よるひるといふわき不知わがこふるころはけだしいめにみえきや
夜晝云別不知吾戀情蓋夢所見寸八

不知は古義にシラニとよめるに従ふべし。ケダシは或ハなり

つれもなくあるらむ人をかたもひに吾はおもへば惑毛あるか

都禮毛無將有人乎狩念爾吾念者惑毛安流香

ツレナシはほだされぬ事にてこゝなどは氣ヅヨク(古義)など譯すべし。結句の惑毛
は契沖はもとのまゝにてワビシクモとよみ略解には感の誤として同じくワビシ
クモとよめり。古義に感の誤としてメダシクモとよめるはいかが。メダクとはいへ
どメダシクとは云はず。又そのメダシは父母ヲミレバタフトク妻子ミレバカナシ
クメダシなどいひて他よりいふ語にて自いふ語にあらず。○狩は獨を誤れるなり

おもはぬに妹がゑまひをいめに見て心のうちにもえつつぞをる

不念爾妹之咲儂乎夢見而心中二燎管曾呼留

オモハヌニはオモヒカケズなり。モエツツゾアルは妹こひしさに心の悶ゆるなり

ますらをとおもへる吾乎かくばかりみつれにみつれ片もひをせむ

丈夫跡念流吾乎如此許三禮二見津禮片思男責

ミツレはヤツレなり。略解に「ワレヲはワレナルヲ」といふ意か。されどワレヤとなく
ては末句にかなはず。乎は也の誤か」といへり。げに卷六なるマストラヲトオモヘルワ

レヤ水グキノ水城ノ上ニ涙ノゴハムなどの如くワレヤとあるべきなり
(むらぎもの)こころくだけてかくばかりわがこふらくをしらずかある
らむ

村肝之於摧而如此許余戀良苦乎不知香安類良武

コフラクヲはコフルコトヲなり○於は情の誤なり

獻 天皇歌一首

(足引の)山にしをれば風流なみわが爲類わざをとがめたまふな
足引乃山二四居者風流無三吾爲類和射乎害目賜名

作者の名のおちたるなり。風流は契沖に従ひてミヤビ(古義にはミサヲ)とよむべく
爲類は舊訓に従ひてスル(古義にはセル)とよむべし。ミヤビは俗にいふ氣ノキイタ
事なり。契沖の一説にいへる如く山里より物を奉るにそへたる歌なり

大伴宿禰家持歌一首

かくばかりこひつつあらずばいは木にもならましものを物もはずし

て

如是許戀乍不有者石木二毛成益物乎物不思四手

岩ニモ木ニモ化リテ物思ハズシテアラマシモノヲといふべきを五七七にとゝの
へむとてかく云へるなり

大伴坂上郎女從跡見庄贈賜留宅女子大嬢歌一首并短歌

とこよにと わがゆかなくに 小金門に ものがなしらに おもへ
りし 吾兒の刀自を (ぬばたまの) よるひるといははず おもふにし
吾身はやせぬ なげくにし 袖さへぬれぬ かくばかり もとなし
こひば ふるさとに 此月ごろも 有勝益士

常呼二跡吾行莫國小金門爾物悲良爾念有之吾兒乃刀自緒野干玉之夜
晝跡不言念二思吾身者瘦奴嘆丹師袖左倍沾奴如是許本名四戀者古郷
爾此月期呂毛有勝益士

跡見は今外山と書きて大和國磯城郡城島村に屬せり。卷八に紀朝臣鹿人至大伴宿

禰稻公、跡見庄作歌とあると合せて思へば稻公は坂上郎女の弟なり跡見庄は大伴氏の別業なり。庄はナリドコロとよむべし。留宅とある宅は坂上家なり。

トコヨニトはトコ世ニ行カムトにてただトコヨニといふよりは力あり。さてトコヨは通常極めて遠き國をいへどその意ならばトコ世ニモ[△]などいふべきを今トコヨニトと云へるを見れば契沖の

一二の句は死シテ冥途ニモユカヌヲなり

といひ紀傳卷十二全集第一の六六〇頁に

さて又後には人の死るを常世國にゆくと云しことあり。こは極めて遠き所にて便もなく往來^カふこともかなはぬ意にて、萬葉四にトコヨニトワガユカナクニ云々これら其意なり

と云へる如きなり。○ヲガナドは門なり。モノガナシラニを契沖はモノガナシゲニの意なりといへり。オモヘリシは物思ヲシテアリシといふ意にてこのオモフは下なる吾妹子ガオモヘリシクシ面影ニミユまたヨシヲナミオモヒテアリシ吾兒ハモアハレまた人ノコトシゲミオモヒゾワガスルのオモフと同じくて常のオモフ

とはすこし異なり。○大嬢既に人の妻たればトジといへるなり。○モトナシのシは助辭、モトナはアヤニクニなり(卷二〇三頁參照)。○フルサトは跡見庄なり。コノ月ゴロモは行末久シクハ勿論ノ事當分ダニとなり。○有勝益士は橋本進吉氏のアリガツマシジとよまれたるに従ふべし。意はアルニ堪へジとなり

反歌

(朝髪のおもびみだれてかくばかりなねがこふれぞいめにみえける

朝髪之念亂而如是許名姉之戀曾夢爾所見家留

右歌報賜大嬢歌也

ナネは人を親み尊びていふ稱なり。略解にネは姉の意と云ひ古義にネは字の如く姉なりと云へれど然らず。古事記中卷に神沼河耳命が御兄神八井耳命にのたまふ辭に

なねなが命^{ミコト}つはものをとりに入りて當藝志美美^{タケゲシビビ}を殺^レせたまへ

とありて傳(全集第二の一六一六頁)に

ナネは女にかぎるべきに似たれども、ここに兄命をのたまへれば男にもわたる

稱にてネは天津日子根など常多かるネなり

といへり○此歌汝ガ我ヲ戀フレバヅ我夢ニ汝ノ見エケルといふ意とおぼゆるを
カクバカリといふ辭かなはぬこゝちす。されば宣長はコフレヅナネガと打返して
心得べくカクバカリ我戀フレバヅ汝ガ我夢ニ見エケルといふ意なりといひ略解
古義共に之に従へり。案ずるにもし宣長の説の如くば初よりコフレヅナネガとあ
るべし。何ぞまぎらはしくナネガコフレヅといはむ。又ナネガコフレヅイメニエ
ケルとあるをいかでか我戀フレハヅ我夢ニ汝ガ見エケルと釋かむ。上七三四頁に
いへる如く本集にはカクとシカとを通用したれば今もシカバカリとうつして心
得べし。さていにしへ、人が我をこふれば其人が我夢に見ゆといふ俗信ありしなり。
上なる

あひだなくこふれにかあらむ草まくら旅なる君がいめにしみゆる(七二三頁)
ここだくにおもひけめかもしきたへの枕かたさりいめにみえこし(七三〇頁)
わがせこがかくこふれこそぬばたまのいめにみえつついねらえずけれ(七三四
頁)

などを見るべく又此等の歌を見て今の歌も汝がこふるといふ意なる事を知るべ
し

獻 天皇歌二首

にほどりのかづく池水こころあらば君にわが戀^{コラレ}こころしめさね

二寶鳥乃潜池水情有者君爾吾戀情示左禰

戀を略解古義共にコフとよみたれど卷二にもイニシヘニ戀流トリカモ、又マヌラ
ヲノコノ戀禮コソとありてコフはいにしへも二段活なればこゝはコフルとよむ
べし○一首の意たどたどし。略解には

其池の如く深く思奉る心をしらせ奉れと池水にいふ意なり
といひ古義には

君に深き心をしめし奉らねとなり
と云へり。かく釋けば意味は生ずれどそは辭をはなれたる釋にて辭の上にはさる
意味なし。案ずるに第三句と結句とにココロ(文字は共に情と書けり)といふ語のか
さなれる下の方のココロはフカサなどの誤にあらざるか

よそにゐてこひつつあらずば君が家の池にすむとふ鴨にあらましを
外居而戀乍不有者君之家乃池爾住云鴨二有益雄

コヒツツアラズバはコヒツツアラムヨリハなり略解に云へる如く天皇に獻る歌
に君ガ家ノなど云はむはいとなめげなり外に題辭のありしがおちて上なるアシ
ヒキノ山ニシヲレバと云ふ歌の題辭の誤りて再出でたるにあらざるか類聚古集
には獻天皇歌とありて其下に大伴坂上郎女在春日里作とありおそらくは坂上郎
女が大嬢におくれる歌なるべしとまれかくまれ二首共に相手の家の池をよめれ
ば二首一聯の歌なる事は疑を容れず

大伴宿禰家持贈坂上家大嬢歌二首雖絶數年後會相聞往來

わすれ草わがした紐につけたれどしこのしこ草ことにしありけり
萱草吾下紐爾著有跡鬼乃志許草事二思安利家理

シコノシコ草は忘草を惡み罵りていへるなりなほ子規を罵りてシコホトトギ
スといひ雞を惡みてクダカケといふが如しコトニシアリケリは名ノミナリケ
リといふに同じウスレ草はクワンザウなり○題辭の下の分註なる後の字は諸

本に復とあり數年絶ユトイヘドモ復會ヒテ相聞往來ストよむべきか

人もなき國もあらぬかわぎもことたづさひゆきてたぐひてをらむ

人毛無國母有粳吾妹兒與携行而副而將座

アラヌカはアレカシタツサヒはツレダチタグヒテは相添ヒテなり

大伴坂上大嬢贈大伴宿禰家持歌三首

玉ならば手にもまかむを(う)つせみの世の人なれば手にまきがたし

玉有者手二母將卷乎鬱膽乃世人有者手二卷難石

モシ玉ナラバ緒ニトホシテ腕ニマキテ身ヲハナサザラムヲ云々の意なりウツセ
ミノ世ノ人は俗にいふ人間なり○膽は膽の誤なり

あはむ夜はいつもあらむをなにとかそのよひあひてこと之しげき

も

將相夜者何時將有乎何如爲常香彼夕相而事之繁裳

初二はアハム夜ハアノ夜ニ限ル事モナカリシニといふ意結句の之は舊訓に従ひ

てノとよむべし(略解にはシとよめり)コトノシゲキは人ノ口ノウルサキとなり第
四句のソノは例の歌中に見えざるものをさせるソノなり(七七四頁参照)

わが名はも千名の五百名にたちぬとも君が名立者^{タダ}をしみこそなけ

吾名者毛千名之五百名爾雖立君之名立者惜社泣

初句のモは助辭なり。千名ノ五百名ニタチヌトモは名ガシバシバ立ツトモといふ
こと。おもしろき造語なり。タチヌトモの下にヲシカラザラメドといふことを略せ
り。立者を舊訓にタタバとよめるを古義にタテバに改めて

畧解に君ガ名タタバとよめるは未來を云る言なればヲシミコソナケと云るに
かけ合す

といへるは不思議なり。本集にはミズテユカバマシテコヒシミ、イモニアハズアラ
バズベナミ、ハヤクアケナバズベナミとやうに云へることを雅澄はよく知りた
らむにいかでか、ることを云へるにか(二九二頁、四七一頁、五〇二頁、六七四頁参照)

又大伴宿禰家持和歌三首

今しはし名のをしけくもわれはなし妹によりてはちたびたつとも
今時有四名之惜雲吾者無妹丹因者千遍立十方

イマシハシは略解に「ふたつのシは助辭にてイマハなり」と(代匠記にもいへれどお
そらくは當時イマシハといふ辭ありしにこそ。上七〇〇頁)にもイマシハトユメヨ
ワガセコワガナノラスナとあり。ヲシケクモは惜キコトモといふ意にて一種の格
なり。之に準じてヲシキをヲシケキとはいふべからず。妹ニヨリテハは上六八〇頁
にもカヘラバカヘレ妹ニヨリテハとよめり。古義にヨリテバと濁りてよみたれど
古今集離別歌なるワカレテハ程ヲヘダツト思ヘバヤカツ見ナガラニカネテコヒ
シキのワカレテハと同格なれば清みてとなふべき事前にいへる如し〇有は者の
誤なり

(うつせみの)代やもふたゆくなにすとか妹にあはずてわがひとりねむ
空蟬乃代也毛二行何爲跡鹿妹爾不相而吾獨將宿

フタユクはフタツユクといふ意にて神武天皇の御製なる彼ヤマトノ高佐士野ヲ
ナナユクヲトメドモタレヲシマカムのナナユクの類なり。初二の意は此世ハ二タ

ビヤハ來ルとなり

わがおもひかくてあらずば玉にもがまことも妹が手に所纏ツルナ牟
吾念如此而不有者玉二毛我眞毛妹之手二所纏牟

アラズバはアラムヨリハ玉ニモガは玉ニモナリナムマコトモはマコトニモなり。
結句を略解にマトハレムとよめるは拙し。玉ナラバ手ニモマカムヲといふ歌の答
なれば舊訓の如くマカレナムとよむべし。牟の字乎とある本ありと古義にいへり。
げに類聚古集にも乎とあれどそはなほ牟の誤とすべし

同坂上大嬢贈家持歌一首

春日山かすみたなびきころぐくてれるつくよに獨かもねむ

春日山霞多奈引情具久照月夜爾獨鴨念

略解に初二を序とせるは非なり。月下の霞のさまなり。ココログシを略解に「くぐも
るにておぼつかなき事にいへり」といひ古義に中山巖水の説を擧げてめでなつか
しむ意の言なりといへり。此卷の末にも

こころぐくおもほゆるかも春霞たなびく時にことのかよへば
とあり。俗にジレッツタイ(懊惱)といふ意にあらざるか

又家持和坂上大嬢歌一首

つくよには門にいでたちゆふけとひあうらをぞせしゆかまくをほり
月夜爾波門爾出立夕占問足ト乎曾爲之行乎欲焉

ユフケの事は卷三五〇八頁にいへり。就いて見るべし。足占ツツは信友の正卜考(全集第
二の五四五頁)に

俗に童子などのする趣にてまづ歩き踏止るべき標を定めおきてきて吉凶の
辭(〇ヨイカワルイカの類)をもて歩く足に合せつゝ踏わたり標の處にて踏止り
たる足に當りたる辭をもて吉凶を定むるわざにもやあらむ
といへり。結句は初句の次におきかへて心得べし。ユカマクヲはユカムコトヲなり

同大嬢贈家持歌二首

かにかくに人はいふとも若狭道の後瀬の山のちもあはむ君

云々人者雖云若狹道乃後瀨山之後毛將念君

三四はノチの序なり。初二は人ハトイヒカクイフトモとなり。ノチモはノチニモなり。今の情を以て見れば寧モを省くべきなり。念は會の誤ならむ。

世のなかのくるしきものにありけらく戀にたへずてしぬべきもへば
世間之苦物爾有家良久戀二不勝而可死念者

初句の上に戀トイフモノハといふ辭を補ひて心得べし。アリケラクはアリケルコトヨとなり。

又家持和坂上大嬢歌二首

(のちせ山)のちもあはむとおもへこそしぬべきものをけふまでもいけれ

後湍山後毛將相常念社可死物乎至今日毛生有

二三の間に我モといふ辭を挿みて聞くべし。イケレはイキテアレなり。

ことのみを後もあはむとねもころに吾をたのめて不相△可聞

事耳乎後手相跡勲吾乎令憑而不相可聞

コトノミヲのヲは普通のヲにあらで調の爲における助辭なり。上七六七夏にも目言ヲダニモココダトモシキとあり。コトノミはコトバニノミなり。タノメテはタノマセテにてアテニセサセテなり。結句は宣長の説に不相の下に妹の字おちたるにてアハヌイモカモとよむべしといへり。 *手ハモカモ*

更大伴宿禰家持贈坂上大嬢歌十五首

いめのあひはくるしかりけりおどろきてかき探れども手にもふれねば

夢之相者苦有家里覺而搔探友手二毛不所觸著

イメノアヒは夢に逢ふ事。クルシは今のツラシ、オドロキテは目サメテなり。契沖の説に遊仙窟の

少時坐睡則夢見十娘驚覺攪之忽然空手

といふ文によりて作れるなりといへり